朱田武福著

ユダヤ民族を検討する

東京モナス刊行



0
500
1000
1500
2000
U. S. S. R.
Caspian Sea
ASIA
IRAN
AFGHANISTAN
BALUCHISTAN
Lahore
gdad
Basra
Gwadar
Karachi
INDIA
Calcutta
Bombay
Madras
IA



Amsterdam
Berlin
EUROPE
Paris
Toulouse
elona
Black Sea
TURKEY
Athens
Tunis
Algiers
Mediterranean Sea
Tripoli
Beyrout
Haifa
Gaza
Alexandria
Cairo
PALESTINE
TRANS JORDAN
LIBYA.
FRICA
Assuit
EGYPT
Assouan
Khartoum
Kosti
Malakal
HE STRATEGIC
MPORTANCE
F PALESTINE
ays shewn thus
pipe-lines
routes
route to the
East

達觀

竹山書

序文

近來ユダヤ人に關する問題が擡頭して來たが、然もそれに對する正確な知識を得ることは甚だ困難事とされて居る。といふのは、從來一部の人を除いては、日本人がユダヤ人に直接接觸する機會の極めて尠かつたことにも基因するが、實は識者の研究不足の結果からであると思ふ。

勿論日本にはユダヤ關係の著書も多々あるやに聞いて居るが、徒らに恐怖して非難攻擊のみに終始して居ることは、自分としては決して當を得たものと思ふことが出來ない。先づ第一に、彼等の歷史的事實とその功罪とをつぶさに檢討して、しかる後公正なる判斷を下すべきである。

吾人同様に太陽の光りを浴び、人類の一員として生存する彼等に、若し間違つたことがあるにもせよ、之を是正し之を救濟するのが日本人たる者の態度でなくてはならない。

況してや彼等は「光は東方より」と憧憬し、メシヤ（救世主）の再臨を待望すること數千年の彷徨へる民である。彼等の待望久しい救世主が日本に御座しますことを知り、日のもとの宏大無邊の皇恩に浴し奉る日が來たならば、拜跪して感泣する彼等であるに相違ない。

徒らにその罪のみを數へてはならない。その功績をも認めて、如何にして彼等を指導し、如何に彼等を救濟すべきかを考へねばならぬ時機に直面して居るものと思ふ。

その意味に於て、この著述は最も有意義なものであることを確信するので

ある。

著者は歐米に留學すること十數年、諸學に通達し而も名利を追はず、日夜國事に奔走する最も實行力豊富な篤學の士である。殊にユダヤ民族研究の第一人者である事は今更喋々するまでもない。二十年間にわたり、實際的に彼の檢討せるところ必ずやこの問題に關する正しい認識を讀者に與ふるものなりと信じ、敢て大方諸賢に推奬する所以である。

昭和十二年十一月末

海軍中將
貴族院議員　佐藤鐵太郎

緒言

世界の諸民族中謎の存在として取扱はれて來たユダヤ民族は、古來亡國の民として凡ゆる他民族の忍ぶべからざる慘虐な嫌惡迫害に耐え忍んで來たがその守舊的ではあるが熱烈な信仰と、極めて進歩的な不斷の努力とは、遂に近代文化建設の無くてはならない立役者としての地位を確保せしめ、父祖の失へる國土の恢復成らずして他國に居候的生活をするも、或は他民族の主權者となり、或は政治、外交、經濟界の實權を握り、全世界の文化的機能を意の儘に操縱して、嘗ての迫害者を狼狽忸怩たらしめて居る。

斯くの如く、彼等が近代文化の原動力的存在となつて居る今日では、世界

中の凡ゆる實際問題を檢討するに當り、彼等を除外しては凡そ意味ないものである。

ユダヤ人問題研究の必要性もその爲に起るのである。ユダヤ人を公正な立場から研究することは、世界の動向に正しい認識を與ふるものであつて、少くともこの問題に關し文化人は無關心であつてはならないと思ふ。

併し、ユダヤ民族は世界各國に散在して居るので、その環境も事情も亦各種各樣であつて、研究上の諸困難は想像以上のものがある。

著者は滯歐中ユダヤ人と親しく交際し、個人的生活のすべてを研究した。又二十年間にわたつて、ユダヤ人及び非ユダヤ人の文献論說を蒐集して來た。

その山積する諸材料のうちより一部を抽出して、この著となつたものである。

る。始め學友明治大學哲學教授大島豊氏と共著で大冊出版の豫定であつたが大島君は遣米國民使節として急に渡米したので、止むを得ず、この總論的一著を先づものして、同君の歸國を待つことにした。從つてこの研究書は二篇、三篇と續刊されるものである。

事局多端の折柄多少なりとも讀者諸賢の參考ともなり得れば幸ひである。終りに出版を引き受けられた尼子靜氏の御好意と、頭山先生、恩師佐藤鐵太郎閣下並びに諸友の御鞭撻とに厚く感謝するものである。

昭和十二年十二月一日

著　者

目次

第一章 ユダヤ民族の史的徑路とその現狀

西部小アジアのユダヤ民族は、政治的形態としては可成り以前に消滅したのであるが、その精神的なる力は今日に到るもなほ大なる影響を及ぼしてゐる。この民族の政治的故郷であつたイスラエル王國とユダヤ王國との滅亡以來、殊に西暦七〇年にヴェスパシアヌス帝（Vespasianus）及びティッス（Titus）によつてイエルサレムが陷落されて以後、この民族は「分散」（Diaspora）の悲運をたどらざるを得なくさせられたのである。かくして

今日も自己の政治上の國家を有せずに分散狀態で、他國民のもとに客分として取扱はれてゐるのであるが、しかしユダヤ人（Jude）といふ名稱は、單に相互に血緣關係のある多くの人々の群を指示するのみでなくて、この民衆に數千年來、固有なる精神的宗教的特性を

も指示するものである。ユダヤ人は今日に到るまで、二千年乃至三千年間、變ることなく舊約聖書を信奉し、彼等が移住する如何なる國へも、その舊約聖書とその敎師とその祭司とを共に伴つて行く。また彼等は、その居住地の言語を學ぶと共に、彼等の聖書のヘブライ語を學び、その他に更にドイツのユダヤ人によつて創作された方言なるイヂッシュ語(Jiddisch)を到るところで用ひてゐる。かくして彼等がこの語を共通に用ひることによつて、精神的に結合された國際的な勢力を强めてゐる。彼等はこの勢力の故に、現世界の諸機構に對して偉大なる影響を及ぼし得るのである。更に、民族分散の結果、諸國で非常な迫害を受けたユダヤ人が、その復讐心に刺戟されて意識的にか無意識的にか、反基督敎徒となつたのみならず、西洋の文明(言ふまでもなくそれは基督敎的文明である)に對して、徹底的なる反擊を加へる者に到つた。マルクシズムはユダヤ主義ではないが、もしマルクスがユダヤ人でなかつたなら、彼の唯物論が生れた筈がなく、又もしレーニン、スターリン、その他のボルシェヴィーキの指導者達がユダヤ人でなかつたなら、唯物論的共產

主義運動を起さなかつたことだけは明白である。この故に、教養ある日本人にとつて、ユダヤ民族の歴史とその事實に注意することの緊要なるは論ずるまでもない。

バビロニア捕虜からの歸還（紀元前五三九年）と共に、イスラエル民族の歴史が終結しユダヤ民族の歴史が始つたのである。かくしてイスラエルは獨立國家なることを止めて、宗敎的集團になり、他の支配者及び他の民族が、かかるユダヤ人の僧侶的國家の上に主權を握り、ヘレニズムが古きユダヤ人の信仰と爭ひ、鋭き社會的政治的の對立がユダヤ民族を弱めるやうになつたのである。紀元前一世紀には、ユダヤはローマ帝國の屬領となり、紀元後七〇年に於けるエルサレム征服及び神殿破壞によつてユダヤ人の國家組織は完全に破壞されるに到つた。

ユダヤ人の歴史には三時期が明瞭に現はれてゐる。第一の時期（略紀元六〇〇年迄）に於ては、その重心が未だパレスチナ或ひはバビロン（ペルシヤ灣頭の居住地）に在つた。第二の時期（略六〇〇年頃より一七五〇年迄）には、その重心が東洋から歐洲に移つた。

ユダヤ民族は中世に歐洲文化に進入し、(五〇〇年より一〇〇〇年迄)その精神生活の全盛時代に達し(一〇〇〇年より一二〇〇年迄)、かくして永き苦難時代を經過した(一二〇〇年より一七五〇年迄)。第三の時期(一七五〇年以後)にありては、市民たるの權利を獲得し歐洲及びアメリカに於いて、國家的にも、また文化、經濟の點でも非常に影響するところ強大となり、一九〇〇年以後には、再び種々と攻撃される要素になつた。

(一) 回々教の支配に到る迄

エルサレム陷落より久しき以前に、ユダヤ人はローマ帝國の殆んど全領土に住居するやうになつた。政治的故郷を有せず、宗教的戒律の觀念的なる力によつてのみ結合されたるユダヤ人は爾來、放浪民族であり、他國人の下で生活する他鄕人なのである。ローマ帝國内に在住せる彼等は、紀元二一二年にローマ市民權を獲得した。キリスト教徒なるローマ皇帝が制限的なる法律を發布したが、しかもユダヤ人は市民の權利を享受したのであつた。

ユダヤ人に對する暴行は凡そ彼等が基督教信者を憎惡することによつて惹起されてゐた。

バビロニヤは、特に强大なるユダヤ人の殖民に割り當てられた。ネブカドネザールとの戰ひの捕虜なる彼等にとつて、この國は第二の故鄕であつたのである。ただ少數の者のみが歸國の權利を行使し、彼等の大半がバビロニヤに滯留して獨立の行政と司法權を有するに至つた。又アラビアは昔から多數のユダヤ人を居住させてゐた。ビザンチン帝國では、ユダヤ人の一部は、全く彼等自身の罪の故ではあるが、嚴格なる例外法規の下に苦んでゐた。既に早くより、その一部がここから黑海の北岸、卽ち今日の南ロシヤ（Kijew, Halbinsel Krim）に移住した。フランスでは、レエムの會議（六二七年—六三〇年）で特にアフリカ及び東洋の閨房へまでもユダヤ人が賣つた基督信者の奴隷及び女奴隷の盛んな取引を嚴禁した。ユダヤ人は既に紀元一世紀にスペインへ移住してゐたので、最初のスペイン宗教會議ではユダヤ人の强大なる影響を防衞しなくてはならなかつた。屢ゝ、國王によつて命ぜられた强制洗禮は、國家及び教會にとつて危險な要因となつたのである。

（二） 回々教成立當時から十八世紀の末迄

アラビヤに於ける多數のユダヤ人は、回々教の組織に强力なる影響を及ぼした。しかしユダヤ人がマホメツトを認めなかつた時、彼等は流血の慘事を伴ふ迫害を受けた。けれども、ユダヤ人は回々教の前進に際して常に援助を惜まなかつた。アラビヤ人によつてペルシヤ帝國が沒落して以後、東方のユダヤ人はもはや全體的に組織されなくなり、その精神的中心點が依然として歐洲に存するやうになつたのである。

アラビヤ人（Mauren）に侵入されたスペインでは、ユダヤ人のために新しい祖國が開かれる結果になつた。アラビヤ文學との接觸によつて、ユダヤ民族の精神文化にとつて一の最も輝かしい精華が生れた。基督教的武裝の前進が彼等に何等の損害も及ぼさなかつたのみならず、その上に彼等は名譽ある地位につくことができた。

けれども彼等の暴利と勢力ある地位への進出、彼等の華美好み、その傲慢と自負等の故

に、彼等に對する突發事件が止まなかつた。殊に、十四世紀以來、非常に增加するに至つた受洗せるユダヤ人(Marranos)は搾取者であり、且つ憎むべきものであつた。人々はユダヤ人をば國家及び教會に對する永續的なる危險存在と認めたので、一四八〇年に彼等を監督するために宗教裁判が實施された。一四九二年にはスペインのユダヤ人は國外に追放され、北アフリカ、イタリヤ、特にトルコの諸地方に轉住した。

イタリヤでは、事情がユダヤ人にとつて一般に有利であり、法王はしばしば彼等の保護者であつた。イタリヤの都市では、ユダヤ人は領主達に對して彼等の金力を用ひた。十六世紀になつてから、二、三の法王がユダヤ人の勢力を挫かうと試みた。それ以來、彼等の運命は波瀾を極めるやうになつたのである。

フランスでは、カロリンゲル王朝の下で、ユダヤ人は溫和な取扱ひを受け、カペティンゲル王朝の下でも同樣に平和な生活を營むことができた。後に彼等は王及び家臣から膏血を絞られ、かつ壓迫された。十字軍及びアルビ教徒戰亂以後、殺戮的迫害が始つた。一一

七一年にブロワ(Blois)への追窮の際、ユダヤ教禮拜の目的のために基督信者の子供を殺害するといふ非難が初めて起つた。その後、一三九四年にカール六世がユダヤ人を追放したので、その殆んどすべてはドイツへ轉住する結果となつた。

イギリスへは、ノルマン統治以來、ユダヤ人が移住してゐた。ユダヤ民族に對する憎惡感は、獅子王リチャード一世の退位一一八九年に際し、先づ第一に勃發した。エドワード一世は一二九〇年にユダヤ人の不動産を沒收して、彼等を追放した。オリヴァー・クロンウェルは一六五六年にオランダより轉住せるユダヤ人の各個人に對して、定住して取引を行ふことを許可した。一七五三年にユダヤ人が歸化しうるやうになつた時、國民の憤怒激發によつて、既に命ぜられてゐたこの法令も無効にさせられるの止むなきに到つた。

ドイツへはユダヤ人がフランス及びイタリヤから轉住したのであつたが、ドイツでは中世の初め、特にライン河畔及び南ドイツ、中部ドイツにユダヤ人集團が存在した。ドイツでも亦、ユダヤ人の地位が十字軍以來惡化するやうになつた。カイゼル・ヘインリッヒ四

世は一一〇三年のマインツ公安法（Nandfriede）でユダヤ人を保護した。ユダヤ人はまたシュタウフェン王朝の下では、「皇帝の侍僕」（Kaiserliche Kammerknechte）と見做されるに到り、皇帝に對して特殊なる交付金の要求及び皇帝への人格的從屬がこれと結びついてゐた。この保護法は屢ゝ皇帝から領主及び都市へ特典として授けられてゐた。ドイツ國力が益ゝ弱小となつたことによつて、中世の終り頃には、ドイツ各地方に於いてユダヤ人の差別待遇が惹起された。ドイツ都市では、ユダヤ人が自分達の市區（Ghetto）に住居してゐた。一般的絕望狀態が精神的敗頽を齎らすに到つた。祕敎的神祕敎が無數の信者を獲得して、救世主待望の信念が再び强大になつて來てゐた。その後、十七世紀の終りに初めて、合理論的啓蒙主義の影響下にあつて、ユダヤ人の位置が安全に保證されたのである。

オランダでは十六世紀の末に、スペインで受洗せるユダヤ人（Marranos）に避難地を與へた。スペイン以外の他の方面からも移住者が來て、ユダヤ人の人口が增加した。オラ

ンダは、宗教改革によつてユダヤ人へ大自由運動を齎した唯一の國土であつた。殊にユダヤ人の團體は、アムステルダムで全盛を極めた。ここでは嚴格なタルムードの正統派教が支配してゐた。ユダヤの學者僧侶（Rabbi）が無制限の權力を有し、最も重い刑罰を下すことができたのである。(例へばスピノザに對する處罰の如き)。

ポーランドへは、ユダヤ人が商人として既に十一世紀に移住し、十三世紀以來、彼等の富力とその影響が顯著になつてゐた。ポーランドは、西歐から追はれたユダヤ人のための避難所であり、彼等の集團は完全なる自治力を有してゐた。十六世紀の中頃に王權の失墜以來、ポーランドの國會はユダヤ人の地位を嚴格に制限し、次いで十七世紀に、特にポーランド領のウクライナがロシヤへ讓渡された事は、ユダヤ人に困難を齎す結果となり、ハンガリ、及び今日ルーマニアの領土になつてゐる地方へ轉住する者が多くなつて、十八世紀に於けるポーランドの分割と共に、ポーランド在住のユダヤ民族の統一が崩壞したのである。

(三) 十八世紀の末以降

この時期からユダヤ人にとつて新時代が始り、解放のための鬪爭と、その漸進的な成熟とがつづけられた。モーゼス・メンデルスゾーン (Moses Mendelssohn) によつてドイツへ誘導された完全なる內的改造、及びフランスに於けるユダヤ人の解放によつて開拓されたる外的變化が顯著な出來事であつた。一七八〇年には北米合衆國、一七九一年にはフランス、一七九六年にはオランダ、等がユダヤ人の市民的同權を布告し、又ドイツ聯邦では十九世紀初頭にユダヤ人の一部を解放した。一八四八年にフランクフルトの國民議會は、「ドイツ民族の憲法を宗派から獨立として」と宣言した。一八七一年のドイツ帝國憲法は、宗派の相違から未だに存立せる市民權及び公民權の一切の相違を廢止した。世界大戰後にユダヤ人はドイツ民主共和國に於いて政治的文化的に非常に强大なる權勢を獲得したのであつたけれども、一九三三年に國家社會主義が政權を繼承した時、この權勢は完全に破壞

された。オーストラリアでは、一八四九年の憲法がユダヤ人に同權を與へ、一八六七年の國法は皇帝直轄地全體に於いての例外法規を除去した。ハンガリーでは、一八六七年及び一八九六年に完全な解放を實施した。又イタリヤでは、一八七〇年の統一帝國の建設と共に解放が完結した。イギリスでは、ユダヤ人が一八四五年には市役所吏員に、一八五八年には國會議員に、一八五九年には官職に就任することが許可され、爾來ユダヤ人は政治及び文化の點で最高の地位に就くに到つた。

ロシアでは、十九世紀にユダヤ人が非常に嚴格に取扱はれてゐた。彼等は「植民地帶」に押し込まれ、絶えず更新されるユダヤ人法によつて最下等の職業に就くやうに制限され隨つて社會的には甚だ低い階級に落されてゐた。一八八〇年代にユダヤ人全體に對して、その生命財産への最も苛酷なる迫害（ロシヤ語で Pofrome）が加へられた。この恐ろしい體驗が、大多數のユダヤ人をアメリカへ移住させるに到らしめた。更にユダヤ人をして虛無主義によるロシア帝政の沒落、及び世界大戰中の帝政崩壞に際し、ボルシェヴィズム

運動に参與させるに到らしめたのである。

中世にスペインのユダヤ人が歐洲トルコへ移住したが、彼等はそこで商人及び稅吏として著しい活動を續けてゐた。このスペイン人（Spaniolen）の一部が十七世紀末にユダヤイスラム宗派（トルコ語で Demneh 即ち改宗者）を作り、この宗派の人々が十九世紀の末に青年トルコ運動の有力なる參與者となつたが、この運動は一九〇八年に絕對權力政體を倒して、精神文化的自由主義を企てたのである。今日のトルコ・ユダヤ人は概してイスタンブル（即ちコンスタンチノープル、その人口の百分の五がユダヤ人）とアドリアノプル（ユダヤ人三割以上）に住居してゐる。ギリシヤの都市サロニカ（Domenneh Saloniki）の重要居住地（ユダヤ人口は百分の二五）は、世界大戰以來ギリシヤ中で最もユダヤ人の多い市街となつてゐる。

北アメリカへは既に十七世紀の後半にユダヤ人が別々に移住してゐた。一七七六年の獨立宣言と共に、ユダヤ人は完全なる同權を獲得した。十九世紀の初めには、ドイツ・ユダ

ヤ人が移住したが、十九世紀の末に東方ユダヤ人（約三百萬人以上）の流入によつてその數がドイツ・ユダヤ人を凌駕した。今日、合衆國には約四、五百萬人（世界の全ユダヤ人の百分の二五以上）が居住してゐて、移民制限のみによつて集團移住が妨げられてゐるに過ぎない。特に東部の大都市（フィラデルフィアは人口の百分の一四、シカゴは百分の一一）にはユダヤ人が群居してゐる。

ニューヨーク市には、二百萬以上のユダヤ人が居住し、殆んどその人口の三分の一を占めてゐる。未だ同化せぬユダヤ人がニューヨーク市では各區で自國語（Jiddish）を通して又慣習によつて、隔離せる植民地を形成してゐる。その他には彼等は西歐文化に於けるが如く、彼等の順應能力によつて社會各層へ侵入し、その社會的權勢によつて强い影響を及ぼしてゐる。

ユダヤ人の總數は約千六百乃至千七百萬と稱されてゐる。その中で歐洲へ移住せるものが約一千萬であり、その殆んど大部分は東方ユダヤ人（Ostjuden）である。イギリス、フ

ランス、ドイツ、イタリヤ、ベルギー等ではその人口に對するユダヤ人の比率が百分の一以下であり、オランダでは百分の二に比例してゐる。大都市ではその比率が遙かに增大しアムステルダムでは百分の一〇、フランクフルト・アム・マイン（一九三三年以前）では百分の七、又ベルリン（同じく一九三三年以前）では百分の五、アントワープでは百分の六パリーでは百分の四、ロンドンでは百分の三、ブラッセルでは同上、等である。その中で僅かに約十五萬人がカナダに住んでゐる。南米全體には約三十萬のユダヤ人がゐるに過ぎぬ。アジアには約三十萬人がゐて、その殆んど凡てが西部アジア（パレスチナ、トルコ等々）に安住してゐる、アフリカでは五十萬のユダヤ人が殆んど皆、北部海岸の地中海地方に住んでゐる。

(四) 東方ユダヤ人

東部歐洲に住むか或ひは前世紀にそこから出たユダヤ人が、今では國際的ユダヤ人問題

の點で第一位にある。彼等は全ユダヤ民族の約三分の二（一千萬人以上）の數に達してゐる。ロシアでは、概してウクライナに定住し、（オデッサ人口の四割五分、キエフ三割五分）ポーランドではガリチアに最も廣く擴がつてゐる（レムベルク三割五分、クラカウ二割五分。）更に舊ロシアなるポーランドにも行き亙つてゐる。（ワルソウ、ロヅ各〻三割五分）ルーマニアでは、彼等はベッサラビヤに最も多く居住してゐる（各都市に六割迄）。またハンガリヤの首府（ブタペスト二割五分）及びオーストリヤの首府（ウィン一割一分）にゐる二十萬以上のユダヤ人の中の大部分は、東方ユダヤ人である。これに反してチエッコスロベキヤの首府プラーグには今では人口百分の五（三萬五千人）のユダヤ人しか住んでゐないけれども、文化史上では一の最も重要なるヨーロッパ・ユダヤ人の集團となつてゐて、その中の一部分のみが東方ユダヤ人である。尙ほまだ西歐及びアメリカの文化と緊密に接觸するやうになつてゐない東方ユダヤ人の精神生活は、彼等の宗敎及びタルムードの知識に基礎づけられてゐる。著しい增大の結果、近代都市的文化のために墮落させられたユダヤ

教にとつて、彼等がいはば貯水池になつてゐるのである。宗教的國民的生活の核心は、古きユダヤ教會堂（Der Cheder）である。彼等はまだ彼等の節儉宗的民族性に同化されてゐず、彼等はその民族的特性を宗教、文化、言語（Jiddisch）の中に保存しようとしてゐるが、しかし宗教的にも、社會的及び文化的にも同種の實質を形成してゐない。彼等は、宗教的に分裂し、社會的に壓迫され、その多くは政治に興味を有せず、かつ强いイデオロギーと現實に關する誤認に支配されてゐるところの、精神的靈的なるユダヤ部落的氣質（Ghettojudentum）のもとにある。數百年間に亙る永年の迫害のために、彼等は一方では過激派になり、他方では彼等の生活慣習に粘ばり强く執着してゐるのである。相變らず東歐洲に居住するユダヤ人の政治的目標は、民族的に少數なりと認められることにある。だが彼等はソヴィエート・ロシアを除く全東歐諸國で國民的文化的且つ政治的經濟的理由から、また之等の理由よりも僅少だが宗教的原因から、多かれ少かれ、反ユダヤ主義的壓迫の下にある。

（五） 經濟的文化的國家的生活に於けるユダヤ人

西歐に於けるユダヤ人の活動の點で市民權への要求を制限せることは、彼等をして事務のうちでも特に重要なる營利方法に就いて熱中させるやうにした。ユダヤ人解放以來、あらゆる商業上の業務部門へのユダヤ民族の比率が增大するに到り、ユダヤ人は私的經濟競爭場裡の條件に對しては、無遠慮なる順應能力を有してゐるのである。國際金融及び信用制度では、彼等は指導的であり、勞働によつて生活してゐる人口の廣範圍が、資本主義的ユダヤ民族に左右されてゐる。商業の場合と同樣に、自由な專門的職業、例へば辯護士及び醫師も亦、ユダヤ人が指導的であり、殊に大都市ではこの方面の有力な地位を占めてゐる。これに反して西歐に於ける手工業に對する比率的干與が甚だしく僅少になつてゐて、ユダヤ人の職人及び勞働者が此處では例外に屬してゐる。農業經營に關する職業に對しても同樣である。然るに文化生活（文學、藝術、演劇、映畫、出版）の點では、ユダヤ人が

法外に多數の代表者を出してゐる。この場合、信仰に緣のないユダヤ人が人口を害し乍らも特に人々の注意を喚起してゐるのである。これ等の自由主義的ユダヤ人があらゆる輿論的武器を占有し、且つ相互に巧妙に宣傳してゐることから生ずる危險よりも、史的成就並びに積極的なる基督敎世界觀に關する彼等の破壞的な、更にまた不正にして且つ多くは故意に分析的なる輕蔑的批判振りは、現代文化に對して遙かに危害を加へるものなりと言つてよい。

ユダヤ人が解放されて以來、彼等は國家生活に活潑なる關與をした。十九世紀以來、ユダヤ人は、イギリス、フランス、イタリー、合衆國に於いて指導的國家的地位に立つことは稀有ではなく、ただドイツでは民主的共和國（一九一九年――一九三三年）の時代に於いてのみ指導的地位に就いてゐた。殊に西歐、中歐、並びにアメリカには、政治的且つ文化的なる自由主義のユダヤ的指導者、就中、左翼自由主義の指導者、更にあらゆる極左的革命の指導者か多數ゐる。ユダヤ人がマルクス社會主義の創始者であり、且つ社會主義政

黨の多數の指導者である。最後に共產主義及びボルシェヴィズムの支配的地位に於ける彼等の關與は著しい。とは云へ、マルクシズム及びボルシェヴィズムは、一のユダヤ的運動と稱することはできない。しかし幸福（Glücksseligkeit）を追ひ求める現世的帝國への努力は、更にかかる國が反キリスト敎的特徵を求めるところのその努力は、言ふまでもなく原始ユダヤ的であり、自由なユダヤ主義にありては容易に無神論的且つ反神學的傾向に從ふわけである。ユダヤ系にして偉大なる英國の政治家ディスレリ（Disraeli）は、既に一八四四年に、革命的動亂に際してユダヤ人が强力に活動的に進出するであらう、といふことを指摘した。また、政治家として民主々義的自由主義の地盤に立ち、國際的名聲の高かつた偉大なるドイツ史家テオドル・モムゼン（Theodor Mommson）は、ユダヤ人を「解體の要素」（"Element der Dekomposition" 卽ち der Zersetzung, Auflösung）と稱した。だが、この場合に忘れてならぬ點は、社會的且つ文化的に分解作用を及ぼすユダヤ人はたゞ相變らず人種としてのユダヤ人に過ぎぬのであつて、彼等の宗敎に基づいての故

でないこと、又未だに彼等の正敎を信ずるユダヤ社會が明確なる分離線を引いて他から區別されると云ふこと等である。

更に積極的意義を有することは、民族性の問題に對するユダヤ人の統一的ならざる態度である。彼等が排他的なる宗敎的且つ社會的の結合を形成するところでは（東方ユダヤ人パレスチナ）、彼等はユダヤ民族的結成を强く力說してゐる。これに反して西歐及びアメリカの諸國のうちに同化せるユダヤ人は、何等の人種的もしくは國民的の制限を受けずに評價されることを重要視する。即ち、彼等にとつてユダヤ民族とは、一の宗敎的團體に過ぎないのである。

(一八)　ユダヤ人排斥論

世界金權政治並びに世界社會主義と世界過激主義に對して非常に影響力の大なるユダヤ民族の地位は、十九世紀以來ヨーロッパもアメリカでも既に强き反ユダヤ的輿論を喚起さ

せると共に、ユダヤ民族の政治的及び經濟的發展を防止するための運動を惹起せしめた。

我々はユダヤ人排斥論を次の二傾向に區別することができる。その第一の民族的傾向は單に人種的且つ民族的の相違の故にユダヤ民族と鬪ふものであり、第二の國政的に方向づけられたる傾向は、同一國家の人民の內部でユダヤ人住民の分け前が法外に強く且つ有害なる影響を及ぼす故に鬪ふものである。この第二の傾向が、ユダヤ人の人種性及び民族性の特質をばその有害且つ極端なる影響の原因とする限り、これも亦第一の傾向に關聯してゐる。

ユダヤ人排斥の第一傾向は、人間とその行爲との故でなくして、その民族が他人種なる故に鬪ふと言ふのであるから、これは隣人愛に反することであり、非人道的である。又この傾向は、神によつてかつて選ばれたるユダヤ民族の宗教との內的關聯の側から必然的に基督教の眞髓に逆行する(「アリアン的・ゲルマン的」宗教の企ての如し)。第二傾向が、一部のユダヤ民族の經濟組織、政黨組織、演劇、映畫、新聞界、科學、藝術、等への影響へ向つて、倫理的且つ法律的方法によつて鬪ふ場合には、これは直ちに人道的理據から許

されるものである。その積極策としては、人道的精神によつて社會生活を透徹せしむるにあり、その大半が道德的虚無主義に陷つてゐる「同化ユダヤ人」に對して、ユダヤ民族の積極的なる倫理的信仰的要因を强化するにある。

基督教會は誤まれる基督教的興奮及び經濟上の嫉妬より生ずる實踐的なるユダヤ人排斥に對して、昔からユダヤ人を保護して來た。他方に於いて基督教會は、經營上及び精神上に於けるユダヤ民族の不當にして有害なる影響に抗して、標準を定めることに着手し且つこれを支持して來た。また人間本質及び史的出來事に關しての誤れる理論に基づく現代のユダヤ人排斥論をば、基督教會は否認してゐる。かくして實際、常に神的基督教的救濟道に於ける「選民」(Anserwähltes Volk) として、ユダヤ主義を實現しなくてはならぬといふ卓越なる役割を强調することに依らうとしてゐる。

國家社會主義の勝利(一九三三年)は、ドイツ帝國に於けるユダヤ民族の地位にとつて痛切なる意義を有するに到つた。この勝利は、その定住地との關係を失つて數百年來、故鄕

なき民族となつたユダヤ人が、文化創造的に働くことを中止したといふことを結果する。ユダヤ人はあらゆる民族の歴史的進行の中にありて、母國人のうちですら血と大地とからの解放を促し且つそれによつて彼等の上に禍を齎すところの解體要素なることを表示した。ユダヤ人が解體要素なることは、特に十九世紀のユダヤ人解放以來明らかにされた。この根本原則から、國家社會主義がユダヤ人に對して闘爭し、この原則上に第三帝國の規範が立てられてゐて、それ故にこの規範が原則的には個人としてのユダヤ人に對して向けられることでなく、むしろユダヤ民族そのものに對し、然も宗教團結としてでなくて、人種としてのユダヤ民族に對して適應されてゐるものなのである。

（七）　ユダヤ國復興運動 Zionismus

（シオンの山、もしくはエルサレムの町がその語源）

即ちパレシチナに於けるユダヤ民族のための公衆的——法律的に保證されたる故鄕建設

に對するユダヤ民族內部の國民政治運動は、永年の間一聯のユダヤ的組織によつて支へられてゐるのみであつたが、歐洲大戰以來、英國政府によつて强力に助成されるに到つた。かやうな思想はユダヤ人分散の時代以來、彼等に附隨してゐたものであり、一八八〇年代までは右のユダヤ國復興運動のうちで支配的であつたのは、精神的もしくは宗敎的——文化的の態度のものであつたのである。ウインのユダヤ人、ヘンツル（Henzl, 1860—1904）が一八九六年に初めて、この運動を政治的に基礎づけた。即ち政治的——領土的手段（ユダヤ國家）によるユダヤ人問題の解決を企てたのである。外部的反對と內部的混亂及びその困難によつて最初から蝕かされて、シオニズムは幾多の變遷を經過したのであるが、これは非政治的にして宗敎的且つ救世主的立脚地に立つユダヤ人と、宗敎的な力に乏しいため自然にこの運動の理想から遠ざかる同化ユダヤ人との間の文化的對立によつて、遂にこの運動は惹起されなかつたのである。世界大戰の進行中、イギリスがパレスチナに全權を置いた時、この運動は力强い刺戟を受けた。一九一七年十一月二日のベルフォア宣言（Balfo-

ur-Declaration）によつて、故郷建設の目的のためのパレスチナに對するユダヤ民族の要求が正當と認められ、これは一九二二年に國際聯盟によつて保證された。アメリカ及び西歐の資本力あるユダヤ人の資金に促されて、一九一八年以來ユダヤ人のパレスチナ轉住が非常に增大するやうになつた。一九二〇年代には、特に多數の東方ユダヤ人が轉住し、世界經濟危機の勃發後には更に他の方面からユダヤ人が轉住し、一九三三年以後はその他にドイツのユダヤ人が轉住するに到つた。パレスチナに於けるかやうなユダヤ人增加に對して、その地のアラビヤ民族のみならず、更に益〻强化せる全アラビヤ獨立運動が初めから反抗しつゞけた。アラビヤ人との流血の鬪爭が一九三〇年にイギリス人をして、バルフォア宣言の制限を餘儀なくさせるに到らしめた。けれどもイギリスは未だに、宗教的國民的及び經濟的なる緊張狀態を調停することに成功してゐるものではない。今年中アラビヤ人の暴動によつて惹起されたかかる緊張狀態の尖銳化は、パレスチナをばユダヤ國とアラビヤ國とに分割する計畫に關する見解を喚起させるに到つた。今日では人々は、ユダヤ人の

國家をばイギリスによる統治狀態に置かうとしてゐる。

パレスチナに於けるユダヤ人の所有地は、一八九八年には二萬五千ヘクタール、一九一二年には四萬四千ヘクタール、一九二七年には十萬ヘクタールに達し、一九三四年には全開墾地の二割に及んでゐる。一九二五年にはユダヤ人の大學がエルサレムに開かれ、ヤフア（Jafa）の近くには純粹なユダヤ人町なるテル・アヴィヴ（Tel Awiw）が建設され、新組合形態の下に開拓事業が成就されるに到つた。大戰前のパレスチナに於けるユダヤ人の總數が約九萬人であつたのが、一九三四年には二十萬人（全人口の二割以上）に增大した。

（八）ユダヤ人の組織

一方に於いてユダヤ人排斥論の防禦のために、また他方ではユダヤ人の連帶性を養成するために、更に又一面に於いて全世界の全ユダヤ人のために、彼等の財政的及び精神的の

能力に相應する地位を守り、もしくはこれを强化する如き大團結が規定されてゐる。そのうちで最も重要なものは、一八六〇年にパレスチナで結成されたる「萬國ユダヤ人同盟」(Alliance Israélite Universelle)である。その機關誌は「法と平和」(Droit et Paix)と名づけられ、その根本的立場が同化的であり、主義上の國際性が著しくフランス的の方向へ向けられてゐる。一九一六年に建設されたる「アメリカ・ユダヤ人委員會」(American Jewish Committee)は各地で壓迫されてゐるユダヤ人を保護してゐる。一八七一年にロンドンに設けられたる「英國人系ユダヤ人協會」(Anglo Jewish Association)は特に、舊世界政府代表者との商議によつて、各地のユダヤ人を保護して同權を保證しようとし、一七六〇年に設定されたる英國人系ユダヤ人に對するアメリカ・ユダヤ人の援助のために努めてゐる。一七六〇年に設定されたる英國人系ユダヤ人の「代表委員會」(Board of Deputies)は原則として、大英帝國のユダヤ人のためにのみ出來たものであるけれども、しかし實際的にはその活動を他國へまでも擴張してゐる。一八四三年に北米合衆國に設置された、祕密組合制度と同系の

「Bne Briss の獨立組合」V. O. B, B. 英語では I. O. B, B.) 即ち同族聯盟は世界觀的文化的である。これは非常に相違せる政治的且つ宗教的傾向のユダヤ人が、純粹に倫理的なる原理のもとに結合されることを目的としてゐるものである。

第二章　世界文化線上のユダヤ人

ユダヤ民族が近代文化に貢献した事實を認めない者は、よもやあるまいが併しその往時に在つては、彼等が如何しても發見せねばならない安住の地と幸福とを求めて、不安定な流浪の旅を續け、多神敎徒である異民族から、絶えず宗敎的迫害乃至は凡ゆる嫌惡侮蔑を受け乍らも、哀れなる神の選民として、その驚くべき忍從と殆んど執拗に近い努力とによつて、他民族に見るやうな滅亡から免れ得たことも考へねばならない。

換言すれば、彼等を迫害放逐した聖書的同時代の民族は滅亡し、彼等のみ獨り現存し、他民族國家内に不思議な民族國家組織を形成して、世界を操縱しつゝあることを知るものである。

それにも拘はらず、その智的生活に於ては、商業や金融業の有力な地步に比して、僅かに舊約聖書とタルムード（Talmud）と稱せらるるユダヤ法典の研究に限られ、長期間にわたつて文化線上に飛躍しなかつた事實を知るものである。勿論これは餘儀ない結果であつて、無素質なるが故ではなかつた。それといふのは、一たび彼等がヨーロッパ諸國で解放されると、その天稟的才能は他民族の意表に出で、忽ちにして社會文化の創造的地位にまで進出したのを見ても容易に首肯出來るところである。

十七世期以前に於ては、彼等が餘儀なく獨占的に居住して居たイタリーその他の諸都市のゲットオ（Ghetto）と稱せらるゝ特別區に閉ぢ込められて、制限された卑賤な取引に從事し、全くキリスト文化と隔絕の狀態にあつたのを見た人々は、彼等がこの狹溢な地域より飛び出して、從來の地下潛行的生活から離れて、文化建設のため公然とキリスト敎徒と共同の働きをなし得るものとは夢にも想はなかつたに相違ない。

前章（三）に述べたやうに、ユダヤ人の解放と彼等の飛躍時代は十八世紀末以降のこと

であつて、モーゼス・メンデルスゾーン（Moses Mendelssohn）が一七四三年、ベルリンに出で、レッシング（Gotthold Ephraim Lessing, 1729—81. 詩人、戯曲家にして且つ批評家）の友となり、聖書をドイツ語に飜譯し、數册の哲學上の重要著述「啓蒙思想に貢献せるもの、併し彼の哲學は交遊のあつたカントの影響は少く、寧ろ同時代のクリスチヤン・ヴォルフ（Christian Wolff 1679—1754）の亞流を汲むと稱せられる」をなしたことに依つて、ユダヤ人の社會的乃至文化的躍進を開始したものと見られる。

當時の産業と商業の發達は個人主義的資本主義者により、中世に於ける諸社團の羈絆を脱し、遂にキリスト敎徒とユダヤ人とを接觸せしむるやうになつた。

それ故に、往時のユダヤ人が只消費階級の信用のみを支持して、高利貸の職業にまで墮落したのであつたが、今や更に生産者の信用をも支持し、彼等に資本を求むる諸産業の促進的地位にまで進出し、今日に於ける世界の大資本を一手に握る基礎を作つたわけである。

斯くの如きユダヤ民族間の經濟的地位の變化は、同時に、彼等の社會的地位にも急激な

變化を及ぼしたのであつた。

十八世紀後半に於けるフランスの哲學者等は「人間の平等 Egalite des Hommes」を宣言して居た。好都合なことには、この理想が法律上に實現されて來た結果、ユダヤ人の自由は一層擴大強化されて行つた。

そのうちに、ヨーロッパに於ては、產業と商業が益々重要性を帶びるやうになり、また市民階級が慾張りで案外間拔けな貴族階級の獨演舞臺を蠶食して行くたびに、ユダヤ人の社會的地位は次第に高められて行つた。

斯くて、キリスト敎徒とユダヤ人とを、永い間隔離させて居た諸般の障碍は漸次取り除かれ、キリスト敎徒との個人的交涉を通じて、ユダヤ人の活路は今迄キリスト敎徒の獨壇場とされて居た思想界にまで押し擴げられて行つた。

進步的ユダヤ人がヨーロッパ中の文献を片つ端から飜讀して得た知識は、素晴しいものとなつて再現して來た。

彼等は從來使用して來たユデオ・ジエルマン（Judeo-German）やスパニォルイッシュ（訛れるスペイン語 Spanolisch）のヤルゴン（亂語 Jargon）を捨てて、居住地の正確なる國語を使用し、且つ從來の傳統的獨自な風俗習慣を改めて、居住國のそれに親しみ、出來得る限りキリスト敎徒への接近を計つた。

斯うした彼等のキリスト敎思想文化への接近は、傳統を誇り來つたユダヤ敎精神の全的拋棄の一歩手前にまで立たされるに至つた。

だが併し、此時代の思想の世界はフランス及びドイツの自由思想家ヴォルテーユ（François Marie Arouet, 1694—1778° 本姓はアルーエにしてヴォルテーユは變名）、ホルベッヘ（Paul Heinrich Dietrich von Holbach, 1723—89）、ラ・メットリー（Julien Offray de La Mettrie, 1709—51）、ディデェロー（Denis Diderot, 1713—84）、ヴォルフ、レッシング、ライマルス（Hermann Samuel Reimarus, 1694—1768）等のもので、その無神論、極端な唯物論、理智的讚美、萬物に對する純理論的基礎の要請、科學に對する熱情及

び形而上學とすべての實證宗教とに對する反對論は、この時代のユダヤ教精神とは全く對蹠的立場に在つた。

それ故、多くのユダヤ人は、この懷疑時代には、その矛盾撞着の衝動に相當苦しんだ跡が殘されて居る。

勿論、この啓蒙學說は、元來、キリスト教に對して發生したものであつたが、ユダヤ教の受けた打擊の方がキリスト教のそれよりも寧ろ大きかつた。

既にして、キリスト教徒は、キリスト教の教理が學理的には虛妄であることを確信して居たが、然も依然キリスト教徒であることを廢めなかつた。ところが、ユダヤ人の場合はさうはいかなかつた。即ち、ユダヤ人はユダヤ教の教理、教儀を度外視しても尙ほ且つユダヤ教徒たり得なかつたので、彼等は自身を絕對自由に置くためには、改宗による表面的行爲を履行するより外はなかつた。

假りに、それが表面的行爲であつたとしても、この方法を利用した教養あるユダヤ人は

その結果に於て豫想外の効果を招來したのであつた。

當時、ベルリンはユダヤ人啓蒙の中心となつて居たので、從來特異な傳統的風俗習慣、言語、敎育、宗敎を固持して、間借的他民族の國中に宛然別箇な一國を形成して居るかの感を與へて居たベルリンのユダヤ人が彼等の特性を棄ててキリスト文化に調合して行つたことは、少くとも驚異に値することであつて、文化建設に協力參加した彼等の或者は宛然獨自の國民性をさへ喪失したやうに見えたことは別段不思議なことでは無かつた。

この國民性喪失的融合の結果は、その濃薄の度は別として、ユダヤ敎徒を各種の文化程度に分割せしめた。而して遂にキリスト敎徒の最高文化を建設せしめた結果、自民族の安身立命の建前上、多少この潮流傾向を抑止しやうとした形跡も無いではない。

併し、彼等は機を見ること極めて敏にして、如何なる障碍も彼等の努力には解決しないものとては無かつた。今日、彼等が凡べての角度から、自ら血塗らずして漁夫の巨利を占めつゝあるのは、當時から既に永遠の地盤を築き始めたもので、實に拔け目の無い、心を

許せない存在であつたのである。
勿論ユダヤ民族の全部がさうであつたと云ふのでは無い、少くとも彼等はユダヤ神政復古と世界征服の傳統的夢想に、萬難を排し、如何なる犧牲も惜しまず、手段方法の限りを盡して、目的貫徹のため全力を盡しつゝあることは爭はれない事實である。

その證左は別項で精細に述べることにして、兎も角、現在は彼等ユダヤ民族中、文化線上に在る者は四百萬人で、他の千二百萬以上の者は近代文化との接觸を悅ばず、依然獨自の傳統的生活を固持しつゝある七百五十萬人と、近代文化の影響を蒙むるも、依然ユダヤ敎精神を遵奉する者五百萬人で、前者はロシア、ガリシアのユダヤ人の大部分、モロッコ、アジア、ヨーロッパ・トルコ土着のユダヤ人に多く、後者は英國又はアメリカに移住せるロシア系ユダヤ人、ガリシア系ユダヤ人、アルジエリア及びキリスト敎を奉ずるバルカン諸邦のユダヤ人、オランダ在住の下層ユダヤ人、オーストリア、ハンガリー、東方ドイツ及びアルサス・ローレンの小都市ユダヤ人等に多く、共にその出生率は極めて高いのであ

るが、文化線上の活躍は未知數に屬するものである。
文化線上の四百萬人中、三百萬人のユダヤ人は裕福な實業家多く、ドイツ、英國及びその植民地、イタリー、フランス、オランダ、オーストリア、ハンガリー及び北米合衆國の大都市に於ける所謂ユダヤ中流社會のもので、他の百萬人は世界各國の大都市に於けるユダヤ人富豪及び全世界の大學教育を受けたるユダヤ人達である。
ユダヤ教徒の同化運動の起りは、古くは紀元前二世紀より紀元一世紀に亘るヘレニズム(Hellenism)時代及び紀元八世紀より十二世紀に至るアラビヤ時代に於ても同一の事態を認むるものであるが、この十八世紀以後のキリスト教との同化運動の如きは、ユダヤ民族にとつては正に前古未曾有のものであつただけに、その變革の範圍も廣く、他民族に與へた衝動も決して少くはなかつた。從つてその衝動はやがて恐怖を喚び、ユダヤ禍をさへ叫ばしむるに至つた。
兎に角、彼等は短日月にして、世界的に有名となれる幾多の傑物を生み、人類文化生活

の第一線に創造的地歩を確歩しつゝある。

今日ユダヤ人であることを知らずして、その功績を讃へつゝある者決して尠くはあるまい。左に掲ぐる無數のユダヤ人を見て、誰でも驚かざるを得ないであらう。

(二) 政治的方面

近世の世界各國に起つた革命の蔭には必らずユダヤ人の暗躍を見るが、然も公然異民族(ユダヤ人は異民族をば蓄生の意のユダヤ語でゴーイ Goi と呼んで居る)間に在て、その政府の重要なる地位にたち、或者は王室と血緣關係を結び、或者は貴族に列せらるゝ等侮るべからざる勢力を把持しつゝある。左に掲ぐる者は各國の一流政治家とされて居るユダヤ人である、

シヤフツベリー伯 (Anthony Ashley Cooper Earl of Shaftesbury, 1621—1683) 初代伯爵ヴィクトリア女王時代の英首相、チヤールズ一世の内亂に際しては初め王黨、一六

四四年以後議會軍に入り、元帥に任ぜられクロンウエル（Oliver Cromwell, 1599—1658）に屬したが一六五四年、マンク（George Monk, Duke of Albemarle, 1608—70）を助けて王政復古に大功を立て、チャールズ二世に仕へて一六六九年、カバル（Cabal）の一員となり、一六七二年大法官に任ぜられ伯爵家を創始、翌年免ぜらるゝや王黨に反對し反舊教運動に加盟、一六七五年叛逆罪に問はれ、三年間ロンドン塔に幽閉され、一六八一年モンマス（James Duke of Monmouth, 1649—85 チャールズ二世の庶子）の陰謀に加擔露顯してオランダに逃れ、アムステルダムに客死す。

三代目シャフツベリー伯（同名）1671—1713 は前記の孫に當り、政界に入りて後、病弱の故（肺患）を以てナポリに赴き靜養し乍ら、倫理、美學、宗教に關する著述をなし、美的直覺說を唱へ、大陸の學界に多大の影響を與へた。

七代目シャフツベリー伯（同名）1801—85 一八二六年、トーリ黨員として下院に入り、上院に入つて後は工場の改善、教會事業等に盡力した。

ビーコンスフィールド伯（Benjamin Disraeli, Earl of Beaconsfield, 1804—81）はユダヤ人商人の子として生まれ、アムステルダムにて教育を受け、歸國後二冊の詩集と七篇の長篇物語を書いて文名を馳せたアイザーク・ディスレリー（Isaac Disraeli 1766—1848）の子としてロンドンに生まれ、十七歳にしてキリスト教に改宗、十五歳以後家庭にて獨學、一八二一年より三年間辯護士事務所に働き、ロンドン上流社交界に出入し、一八二六年、小說 Vivian grey を著して、父讓りの文才を謳はれた。不幸にして當時健康勝れずして思ひ出づる儘の旅行に親しみ、文筆を友として日を送り、一八三一年以後初めて政治界に乘り出した。一八三七年トーリ黨員として下院に選出され、同黨の保守主義を難じ新時代には勞働者、農民等の權利を無視してはならぬことを力說、青年英蘭黨を組織し、トーリ民主々義を高唱して、一八四四年には Conningsby を又翌年 Sybil を著した。一八四六年、穀物法廢止に際して、保護貿易主義を唱へてピールの政策を抗撃し、トーリ黨を分裂せしめ、ウィッグ黨の勢力を增大し、地主階級の支持を得て、ピールを失脚せしめ、

保守黨の一幹部となる。ダービ內閣第一次（一八五二年）及び第二次（一八五八―五九年）の藏相となり、一八六五年頃保守黨の首領に推され、一八六六年のラッセル內閣が選擧法改正案に敗れて退き、第三次ダービ內閣出來るや再び藏相に就任、時勢の動きを看破し且つ與黨の下院に於て多數を制し得ざるを悟り、一八六七年八月、自ら選擧改正法案を提出して兩院を通過せしめ、國內を平穩にした。翌年ダービに代り首相となる。爲に黨內の信望を失ひたるも忽ち恢復して、再び一八七四年より一八八〇年まで首相の印綬を帶び、保守黨主義を以て勞働階級の爲の立法を行ひ、一八七五年にはスエズ運河の株式買收に成功、一八七七年にはインドを東インド會社から名實共に女王の手に移し、ベルカンに對してはトルコを援けて、ロシアを抑へ、翌年のベルリン會議には全權として出席、ロシアの全權ゴルチヤコフを抑へて圓滿裡に會議を總らした。一八七六年、勳功によりビーコンスフィールド伯爵に敍され、一八八〇年の總選擧に敗れて隱退した。

グラッドストーン（William Ewart Gladstone, 1809—98）

リヴァプールのユダヤ人商家に生まる。一八三一年、オックスフオド大學卒業、翌年選舉法改正後初めての選擧にトーリ黨に屬して當選、雄辯をピールに知られて、一八三四年より翌年まで大藏次官、植民次官、一八四一年には商務次官兼造幣局長、一八四二年、關稅の改正に力を致し財政的手腕を示した。翌年には商務大臣となり、又その翌年には植民大臣となり、一八四六年、自由貿易主義でピール派に屬し辭職、同年より五二年に至る在野時代次第に自由主義に傾き、一八五二年より五五年までアバディーン內閣の藏相となり、平和主義の立場からクリミヤ戰爭に反對して辭職した。一八五九年から六六年まで、パーマストン內閣の藏相、首相死すや自由黨の下院院內總理を兼職、一八六六年には首相ラッセルを援けて選擧法改正案を出して失敗辭職、此頃より保守黨のデイスレリーと對立して、自由保守兩黨の交互內閣時代となつた。

彼の組織した內閣は第一次一八六八年から七四年まで、此時は藏相兼任、第二次は一八八〇年から同八五年まで、此時も初め藏相兼任、第三次は一八八六年二月から七月まで、此

時は國璽尙書兼任、第四次は一八九二年から同九四年で、此時も國璽尙書兼任であつた。アイルランド國教廢止法案（一八六九年）アイルランド土地法案（一八七〇年）義務教育制度勵行、陸軍及び大學の改革、文官任用令改正を通過せしめ、著書も多數あり、平和主義を愛好する自由主義政治家として世界に知られて居る。

レーディング侯（Rufus Daniel Isaacs, Marquess of Reading, 1860—）一八八七年辯護士、一八九八年女王附狀師、一九〇四年自由黨員として代議士當選、一九一〇年檢事長となり、次で檢事總長として始めて入閣の例を開いた。一九一三年、ユダヤ人として英國に於ける最初の大審院長となり、一九二一年より同二六年迄インド總督、一九一四年男爵、一九二六年累進して侯爵となつた。一九三一年、マックドナルドを首相とする擧國一致內閣に一時自由黨を代表して外務大臣となつた。

レスタ伯モンフオール（Simon de Montfort, Earl of Leister, 1206—65）

モンフオール・ラモーリキ伯（Simon, Conte de Monfort l' Amaury 1160—1218）な

る武雄名高きユダヤ人フランス貴族を父とし、イギリスの女性を母とする英國貴族、ヘンリキ三世の寵を得て王妹を娶り、レスタ伯に叙せらる。後王の不興を蒙むるや一二五八年の王と貴族との爭ひに、推されて貴族の首領となり、王に迫りて、所謂 Provisions of Oxford を承認せしめ、更に戰つて王を捕虜にした。彼は翌一二六五年國會を召集した（英國下院の起り）間もなく皇太子エドワード（後のエドワード一世）とイーヴシェム（Evesham）に戰つて敗死す。

モンタギユー（Edwin Samuel Montague, 1879—1924）

一九〇六年自由黨議員として下院に入り、一九一〇年より同一四年までインド事務次官、一九一七年より同二二年までインド事務大臣として、インド總督チエルムスフオード（Frederic John Napier Thesiger, Viscount Chelmsford, 1868—）と議し、兩人連名の報告書を發表した（これが一九一九年のインド憲法の原案となつた）併し彼の親印的態度は英國の帝國論者の非難するところとなり辭職。

ヘンダーソン（Arthur Henderson, 1863—）グラスゴーに生まれた鑄型工、勞働組合の幹部となり、一九〇三年、ダーリントン市長及び下院議員に撰ばれ、以來勞働黨領袖として活動、一九〇八年より同一〇年迄及び一九一四年より同十七年までの同黨首、一九一五年の擧國一致內閣に文相として入閣、一九一六年無任所大臣、一九一七年、訪露歸國政見の相違により辭職、一九二四年一月から十一月に至る第一次勞働內閣の內相、一九二九年の第二次勞働內閣の外相、然るにイギリス空前の財政難打開のため首相マックドナルドが擧國一致內閣を組織し、失業保險を低下して局面轉換を計らんとするに反對し、一九三一年辭職し擧國內閣に反對する勞働黨の新首領となり、一九三二年は軍縮會議々長として、ジュネーヴに活躍、同年十月勞働黨首を辭し、其後名譽幹事たり。

ラムプソン（Sir Miles Wedderburn Lampson, 1880—）一九〇三年外交官となり、アジア各地に駐在、一九二六年以來駐支公使となり、一九三一年から同三二年まで滿洲事變、上海事變に暗躍す。

スノーデン (Philip Snowden, 1864—) 一九〇六年以來下院に入り、一九二四年、第一次勞働内閣の藏相に就任、後在野黨を率ゐて保守黨政府に對抗し、自由黨との連絡に努めた。一九二七年獨立勞働黨から分離し、一九二九年五月再び第二次勞働黨内閣の藏相となり、同年ハーグに於ける賠償會議にヘンダーソンと共にイギリス代表として活躍した。一九三〇年の大英帝國會議に各國が關稅障壁を高めつゝあるに鑑み、帝國内にも保護貿易を行ふ必要ありとの議に對し、傳統の自由貿易策を執つてこれに反對した。一九三一年の聯立内閣に藏相、次で國璽尚書となり、男爵を授けらる。

モンド (Mond) 英勞働相。

シムプソン (Bertram Lenox Simpson, 1877—1930)
英國の駐支海關長、支那大統領政治顧問を歷任、極東旅行に關する著あり、天津にて支那人刺客に射殺さる。

サミユエル (Sir Herbert Louis Samuel, 1870—)

一九〇二年、自由黨員として下院に入り、一九〇五年內務次官、一九〇九年、ランカスター公領尙書、一九一〇年より一九一四年まで遞相、一九一五年聯立內閣の遞相、後一時內相となつたが、一九一六年末アスクウイスと共に辭職、大戰後ベルギーの救濟に盡力し、一九二〇年、パレスタインの最高委員となつた英國自由黨領袖。

サイモン (Sir John Allsebrook Simon, 1873—)

一九〇六年より同一八年及び二二年以來自由黨所屬下院議員、一九一〇年より同一三年まで檢事次長となり、Sir の稱號を受く、一九一三年より同一五年まで檢事總長として入閣、一九一五年內相、翌年徵兵法に反對して辭職、一九二七年サイモン委員會長に任ぜられた(一九一九年のインド憲法に於ける十年後に自治を與ふべしとの約束に從ひ、この憲法の改正に迫られ、その調査のため兩院議員中から委員が任命された)、一九三一年、マックドナルドの擧國一致內閣に自由黨を代表して外相として入閣。

ドラモンド (Sir James Erio Drummoud, 1876—)

外務省に入り、一九一二年アスキス伯の私設秘書となり、一九一五年再び外務省に戻り、一九一九年國際聯盟の成立と共に初代の聯盟事務總長として今日に至る。

右は英國系ユダヤ人の一部であるが、次にアメリカに眼を轉ずることにする。

アメリカ歴代大統領はその多くはユダヤ人の蔭武者を持つて居た。最も知られて居る者としては歐洲大戰平和會議指導者たりしウイルソン（Thomas Woodrow Wilson, 1856—1924）大統領に於けるバラディ（Baladi）の如きがそれで、ユダヤ人との血緣關係の無い者はユダヤの秘密結社マッソン團の加盟者であつたことが曝露されて居る。ウイルソンの熱心な研究者が彼の戶籍上にユダヤ人の血の流れを發見したと、發表して居るが、その眞僞は筆者の知るところでないから之を避けるが、二十九代大統領ハーディング（Waren Gamariel Harding, 1865—1923）はユダヤ種であることが證せられて居る。今の大統領ルーズヴェルトもユダヤ人顧問の包圍のうちに置かれて居ることを忘れてはならない。

ストラウス（Strauss）米國勞働商務卿。

モルゲンソー（Morgenseau）米國大藏大臣。

ゴムパース（Samuel Gompers, 1850—1924）

ロンドンに生まれ、一八六三年渡米し、葉卷工組合を組織、一八八一年、アメリカ勞働聯合組合（American Federation of Labor）の創立發起人となり、翌年以來會頭、協調主義を以て組合を全國的に擴大强化した。文筆にも親しみ、一九二四年に著はしたSeventy years of life and labor が特に知られて居る。

ボラー（William Edgar Borah, 1865—）

一八八九年辯護士登錄、一九〇七年以來アイダホ選出の共和黨の上院議員で屢々外交委員長となり、大戰中ウイルソンの外交を痛擊した。大戰後押收したドイツ人の私有財產の返還を主張し、又非戰論の鬪士で、ケロッグの提唱した不戰條約の成立に盡力した。又排日の巨頭として知られて居る。

ストラウス（Strauss）駐土大使。

フェッセンデ（Fessende）上海工部局長。

シンプソン（Simpson）駐支公使

ブランデス（Brandes）北米合衆國最高法院七總裁の一人。

ベルン（Bern）米國財政家。

ベルナルド・ベルシユ（Bernard Barsch）米國財政家。

イエッシユ・イシドール・スタウス（I. Isidore Stauss）駐佛大使。

ブリット（W. C. Bullet）駐ソ大使。

モルデカイ・エゼキエル（M. Ezekiel）米國農務省財務長官。

アレキサンダー・サークス（Alexander Sarkus）N・R・A財務官。

ロシカ・シユナイダーマウン（R. Schneidermaun）N・R・A勞働問題婦人部長。

シドニー・ヒルマヌー（Sidney Hillmanu）N・R・A勞働問題一般部長。

サミユエル・ローゼンマウン（Samuel Rosenmaun）N・R・A委員會官選委員長。

チャールス・イー・ヴィザンスキイ(Charles E. Vizanski) N・R・A法律顧問。
ジエームス・ワルベルグ(James Walberg) 國庫顧問。
ハーバート・ファイス(H. Feiss) 聯邦準備銀行管理局統計官。
サミュエル・ゴールデンワイザー(Samuel Goldenwiser) 同統計官。
ナサン・アール・マルゴール(Nathan R. Malgaul) 內務省顧問。
ラ・グアデア(La Guadia) ニューヨーク市長。
ハーバート・レーマン(H. Lehmann) ニューヨーク州知事。

フランスに於ては、フランス革命前後に多數のユダヤ人が政治的暗躍をしたが、餘り表面には出なかつた。が然し何人もフランス革命史を繙く者は影に躍つたユダヤ人を見逃してはならない。

彼のナポレオン(Bonaparte Napoléon I, 1769—1821) 一世の如きも、ユダヤ人に躍らされ、彼等同族の虐遇されつゝあるロシア遠征までさせられたではないか。サンイドラ

ンの會議の如き問題は別項に精細に解くつもりであるが、兎も角、フランス系ユダヤ人は相當な地位を得つゝあることは云ふまでもない。

そのうち有名な政治家としては――

クレミユー（Isaac Adolphe Crémieux, 1796―1880）

一八三〇年パリーで辯護士、一八四八年假共和政府法相、ルイ・ナポレオンのクーデターに際し投獄さる。一八七〇年再び法相、一八七五年上院議員となる。

ミルラン（Alexandre Etienne Millerand, 1859―）初め辯護士、新聞記者等を職業とし、一八八五年、社會黨選出の代議士となり、一八九三年、ヴィヴィアニ（René Viviani, 1862―1925）と共に、改革派社會黨の機關紙「小共和國」（Petite République）を主宰す。一八九九年より一九〇二年まで、ワルデック・ルッソー内閣の商相として入閣、漸次右傾的となる。一九〇五年、老廢者扶助法を通過せしめた。一九〇九年より同一一年まで勞働相となり、一九一〇年には鐵道從業員の罷業を鎭壓し、一九一二年以來陸相として大

戰遂行に努力、ジョッフル將軍（Joseph Jacques Césaire Joffre, 1852—1931）と共に議會の軍隊監視に反對して一九一五年十月辭職、一九一九年三月より翌二〇年一月まで、アルサス・ローレン高級委員、同年一月より九月まで首相兼外相としてドイツを壓迫す。一九二〇年九月大統領に選擧され、傳統を破つて政界表面に活躍し、ポアンカレー（Raymond Nicolas Landry Poincaré, 1860—）を扶けて、ドイツに償金支拂を强要し、ルールを占領し、又內政に關與したので、左翼聯合の大反對を買つて任期の中途一九二四年六月大統領辭職を餘儀なくされた。其後元老院に入り右派の領袖として活動す。

ガンベッタ（Léon Michel Gambetta, 1838—82）

幼時隻眼喪失、一八五九年パリ辯護士クラブ會員、一八六九年マルセイユ・ブルヴィル市の代表議員となる。進歩的自由思想家である。ナポレオン三世セダン降服に際し一八七〇年共和宣言に加はり國防政府の內相となる。輕氣球にてパリー脫出、大いに奔走當時五ケ月間フランスの獨裁權を握る。

其後パリー郊外に歿する迄政界に活動。

パンルベー（Paul Painlevé, 1863—）

本來數學者で、一八九五年以來ソルボンヌ並にエコール・ポリテクニックの敎授、ライト（Wilbur Wright, 1867—1912）の飛行術を後援し、一九一四年來軍事航空會議々員、一九一〇年社會共和黨に屬し代議士となり、一九一五年より同一七年まで陸相、同年九月より十二月まで首相兼陸相、一九二一年、左翼聯合を率ゐ、一九二四年、下院議長、次で、第二次（一九二五年四月より十月まで）第三次（同年十月より十一月まで）の短命內閣を組織をした。其後數度陸相に就任、數學、航空、政治に關する著書多數あり。

クロック（Crocq）前藏相。

アブノール（Abnord）國際聯盟事務總長。

ハース（Haas）國際聯盟交通部長にして、支那政府交通顧問。

レーゼ（Lese）ブリアン（Aristide Briand, 1862—1932）の秘書長。

モンフオール・ラモリ伯（Simon, Comte de Montfort l'Amaury, 1160—1218）は一一九〇年から十年間十字軍に參加、一二〇八年以來アルビジョア派の異端を討伐し、ツールーズ伯レーモン二世（Raymond II, Comte de Toulouse, 1222 歿）を一二一三年、ミユラに破る。

ドレフュス（Alfred Dreyfus, 1859—）

アルサスのミュルハウゼン市の富裕な製造業者の子、一八九三年、砲兵大尉參謀本部附の時、國防機密文書をドイツに賣却の嫌疑で逮捕されたドレフェス事件の本人、軍法會議の結果、一八九四年、イール・デュ・ディアーブル（惡魔島）に終身禁錮となつた。結局世を騷がせたこの事件も幾變轉して解決し、ユダヤ大富豪ロスチャイルドの辯護者たるルーベ（Emiles Loubet, 1833—1939）大統領となるや彼は赦されて（一九〇六年）少佐に任ぜられ、且つワルデック・ルッソー内閣の大臣に拔擢された。蓋し彼の罪狀は、同じユダヤ人なるドイツ社會黨首領カール・リープクネヒト自らよく證言せるところである。

オーストリア及びハンガリーでは――

エーレンタール伯（Aloys, Graf Lexa von Aehrenthal, 1854―1912）

一八七七年交外官となり、一八九五年にブカレスト、一八九九年にはペテルスブルグに駐在、一九〇七年外相となる。ロシア外相イスヴォルスキイとのブフラウ會見の約束を無視して、一九〇八年、ボスニア・ヘルツェゴヴイナ併合を遂行（歐洲大戰直接の導火者とさへ稱されて居る）ロシアとの親善を犧牲としてセルビアを威壓した。一九一二年、イタリアを援けて、バルカン戰役の戰勝に基くセルビアのアドリア海岸進出に干渉し、遂に之を制壓してセルビアの排墺感情を激成せしめた。

ベーラ・クーン（Béla Khun, 1886―）

ハンガリーの共産主義者、クラウゼンブルグの勞働者疾病互助會事務員となり、後通信員となつた。歐洲大戰に將校として出征し、ロシアの捕虜となり、赤衞軍の指揮者となる歸國後一九一九年三月、共産主義宣傳の廉で逮捕されたが、ハンガリー勞働者委員會の政

府樹立と共に外相となり、政府の中心をなす。同年八月政府瓦解と共にオーストリアに逃れ更にロシアに赴き、一九二一年までクリミヤの行政廳委員となり、以後第三インターナショナルの實行委員會の一員となつた。

イタリーでは――

ルツアッティ (Luigi Luzzatti, 1841—1927) は、ベトヴア、ローマ等の國法學敎授より政界に入る。一八七〇年、下院に入り、議會の財政通として名あり、一八九一年より翌年まで、又一八九六年より同八年まで、大藏大臣となり、一八九八年、佛伊間の通商條約に關する商議を整へた。一八九九年、パリー學士院會員に選ばれた。

一九〇三年から五年まで、再び藏相、一九一〇年から翌年まで首相となつた。イタリアの經濟問題に關する多くの著述がある。

ソンニーノ男 (Sidney, Barone Sonnino, 1847—1922) は外交官としてヴィーン、ベルリン等に赴任、一八七一年辭して、國家學に關する研究に沒頭、一八八〇年下院議員と

なり、首相クリスピの下に藏相としてイタリーの財政整理に貢献した。一九〇六年より同九年までに二回首相となり、一九一一年より同一九年まで外相として三國同盟を裏切つて協商國側に參加し、オーストリア、ドイツに宣戰した。一九二〇年元老院議員に任ぜられ、ローマに死す。

等があり。新興チェスコ・スロヴェンスクでは、前大統領マサリック博士や現主權者ベネシュが在る。

マサリック（Thomas Garrigue Masaryk, 1850—1937）

一八八二年プラーグ大學哲學敎授、一八九一年青年チェック黨の後援により現實黨の首領として代議院に入つたが、青年チェック黨との提携破れて一八九三年政界引退、一九〇〇年チェック人民黨の首領となり國民的平等權を基礎として、ドイツ人との協調に努力した。一九〇七年再び議員となり、ドイツ人にも親敬された。世界大戰勃發後外國に赴き祖國獨立に東奔西走し、一九一八年チェッコ・スロヴァキア初代の大統領となり一九二〇年

及び一九二七年再選された。

ベネシジュ（Edvard Beneš, 1884—）

一九〇八年プラーグ大學國民經濟學教授、一九一五年、チェック獨立のため、スイス、フランス等に在つて活躍す。一九一八年、新獨立國の外相となり、一九二一年より翌年まで首相を兼攝歐洲外交界を暗躍、マサリックの後繼者となる。

目下國際聯盟に活躍するスペイン代表マダリアーガ（Madarioga）や衞生部長にして支那政府衞生顧問ポーランドのライヒマン（Reichmann）や十九ケ國委員會議長にして白國代表たるイーマンス（Paul Hymans, 1865—）等皆ユダヤ人である。次にロシア及びドイツのユダヤ人政治家であるが、紙數の都合に依り次項に讓ることにする。

前にも述べたやうに、ドイツはユダヤ人啓蒙の中心地であつただけに、他の何れの國よりも、多くの最も優れたユダヤ人を輩出し、文化線上の各方面に相當强固な地盤を作ることが出來た。

學界は云はずもがな、政治的動向を巧に左右して、世界の政治體制に大きな歪みを與へた、あの科學的社會主義はドイツのユダヤ人マルクスの生むところであつたばかりでなく在來の自由主義的思想との間に出來た混血兒は、續々殖えて、今日人類の敵として最も忌むべき共産主義の溫床となり、その鬪爭手段としての革命運動の反復はその實現への機會を度々與へて、心ある者の心膽を寒からしめて來た。

時代思想の政界に及ぼす影響の重且つ大であることは今更云ふまでもないが、近世時代思想の策源地がドイツであり、その頭腦がドイツ在住のインテリユダヤ人であつたことは辭めない事實であらう。

然もこのドイツ系ユダヤ人によつて生み出された近世時代思潮の主流は人類生活を複雜化せしめ、敵愾心を煽り、破壞を敎へ、自由に誘惑して放縱に陷らしめ、糜爛せる享樂の迷路に追ひ込んで、反省の猶豫を奪ひ、焦慮と矛盾に人間を狂ひ死させやうとして居る。

斯うした方面の解剖は別項に於て詳說するから、ここでは差し控へ、ドイツ系ユダヤ人

の政界列傳を竝べて見やう——

シムソン（Martin Eduard von Simson, 1810—99）はケオエニヒベルグに生まれた。彼は出生地の大學で法律を學び、一八四八年、フランクフルトの國民議會に列し、やがて議長に推された。一八四九年四月、首席使節として、プロシア王ヴィルヘルム四世に帝冠を捧げて拒絶され、ために一時政界を引退した。

一八五二年以來、判事の職に就いたり、學問に專心した。一八五九年、プロシア下院に入り、翌年議長となる。一八六七年、北ドイツ聯邦議會の議長となり、一八七一年一月、ヴェルサイユに於ける皇帝戴冠式に、新帝國議會の名に於て、プロシア王ウィルヘルム一世に帝冠を捧げ、一八七四年まで議長を勤め、一八七七年議員を退め、一八七九年より同九一年まで、大審院長として在職。ユダヤ人として最初の政治的高い地位に立つた。

シュティネス（Hugo Stinnes, 1870—1924）はミュールヘイムに生れた。ドイツ財界の大企業家であり、歐洲大戰末期のドイツ首相であつた。一八九三年シュティネス有限會

社を設立したのを手初めに、二三の鑛山會社に關係して之を合併擴張した。世界大戰の好機に乘じて軍需品請負となつて、忽ち暴富をつくり、次で戰敗後の革命紛亂を利用して、ドイツ産業の殆んどあらゆる方面、即ち石炭、石油、製銅、電氣、自働車工業、纎維工業、海運、貿易、對外投資及び銀行その他に手を延ばして君臨し、巨億の財貨を獨占するに至つた。勿論諸外國のユダヤ人財閥と連絡のあつたことは見逃すわけにいかぬ。

一方、一九二〇來以來、人民黨（Volkspartei）に屬して議員となり、ドイツ・アルゲマイネ・ツァイトゥング（Deutsche Allgemeine Zeitung）及び商工新聞（Handels und Industrie Zeitung）の持主となつて、言論界に雄飛し、一時はドイツの政界及び經濟界を風靡したが、餘りにも雜種雜多な彼の事業は、遂に内部的衝突を來して、その統制を失へるところへインフレーションの急襲に頓坐して終つた。そして間もなく死んだが、死の直後遺族の内訌起り、頓坐せる事業の立直しの暇もなく、一九二五年に至つて支拂困難に陷り、遂に倒産した。

シュタール (Friedrich Julius Stahl 1802—61) はミュンヘンに生れた。ドイツの政治學者及び政治家として知られて居る。新教に改宗したが年月は詳でない。一八四〇年ベルリン大學の敎授になつたが、その以前一八三四年にはエルランゲン大學敎授になつて居た。特に彼は法律哲學者として世界的に名をなして居る。即ち彼の說は、法律を以て神の世界秩序を維持するための、民族若しくは民族共同體の生活秩序であるとなし、國家を以て神の攝理に基く道德的共同體なりとし、この理論を以て絕對君主制の結論を導いた。然も彼の根本原理とするところは、多數ではなくて、權威であるといふのである。彼の地位は歷史的法律學派にもヘーゲル學派にも屬するものとされて居る。

彼の政治的經歷はドイツ保守黨の黨首であつたことを記したら、略ゝ想像出來るであらう。

エーベルト (Friedrich Ebert, 1871—1925) はドイツ共和國初代の大統領として洽く知られて居る。古都ハイデルベルグに生まれ、長じて鞍職工となつたが、次で酒場を兼ね

た安宿の主人公となり、此所で將來雄飛の機會と地盤をつくつた。一八九三年、ブレーマー・フォルクスツァイトゥング（ブレーマー國民新聞 Bremer Volkszeitung）の主筆となり、一九〇五年には社會民主黨の幹事長となり、一九一二年同黨議員として、初めて帝國議會に入つた。次いで一九一七年には同黨副總理となり翌年總理となつた。この時の議會には全院委員長、同年十一月九日にはマックスに代り首相となり、革命後人民代表委員會の首腦者として、ドイツ假政府の政權を委任された。國民會議々員に選出され、一九一九年、臨時大統領に選擧されて脫黨し、一九二二年、新憲法の規定により、選擧を經ずして初代大統領に指名され、任期終了前に死んだ。

シャイデマン（Philipp Scheidemann, 1865—）は初め印刷職工となり、一八九〇年以後は新聞記者となり、社會民主黨に關係、一九〇三年、同黨議員として帝國議會に入り、一九一一年同黨幹部となる。一九一八年、宰相マックス公內閣の無所管大臣、同年十一月革命の臨時政府閣僚、バイエルン假大統領として活躍、一九一九年には新共和政府の首相

となつた。その後、ヴェルサイユ條約を締結の際、署名を拒絶して、横暴なる聯合國の強制に反抗して辭職す。一九二〇年より一九二五年までカッセル（Cassel）市長となり、一九二〇年以來國會議員である。

ラッサール（Ferdinand Lassalle, 1825—64）はブレスラウ（Breslau）に生まれ、父は絹織物商であつた。既にベルリン大學在學中より、ヘーゲル學派の左傾鬪士として知られて居た。一八四八年、過激な演説をしたので、時の官憲に六ケ月の禁錮を申し渡されて服罪、一八五七年以來、ベルリンに居を構へ、學術研究をすると共に、自由主義に對する勞働者階級の誤信の克服に意を注ぎ、勞働者の使命を高調したと稱さるゝ、勞働者綱領（Das Arbeiterprogramm）を一八六二年に公表した。が併し時の政府は勞働者煽動罪に問ふた。

ところが、公判廷に於ける彼の雄辯と之を印刷した小冊子とは彼の勢力を次第に勞働者間に扶植せしめた。一八六三年、普通選擧を標榜して、アルゲマイネ・ドイッチェ・アルバ

イターフェライン（Allgemeine Deutsche Arbeiterverein）即ちドイツ一般勞働者組合を組織し、再び勞働者に結束を促した。一八六四年、一女性との戀愛關係から貴族に決鬪を申し込み、その際の重傷が原因となつて遂に死んだ。

彼はドイツの社會主義運動に强烈な刺戟を與へたが、彼の世界觀はかなり觀念的でありマルクス流の科學的指導精神が缺けて居た爲に、國家社會主義や社會改良主義となり、彼が冷酷なるリードの賃銀鐵則によつて勞働者の被搾取狀態を說明し、國家的補助を受ける勞働者生產組合によつて、賃銀法則の撤廢を期したやうなことはその好例である。彼の思想はロードベルツス（Johann Rodbertus, 1805—75, プロシアの大地主、法律家にして經濟學者）の影響を最も多く受けて居ると稱される。彼には又哲學者としての著書もある。

マルクス（Karl Heinrich Marx, 1818—83）は科學的社會主義の創始者であり、國際プロレタリアートの革命的階級鬪爭論理及び實踐原理の確立者として知らざる者は無い。彼は一八一八年五月五日、プロイセン領ライン州のトリエル（Trier, Rhein, Preussen）

に孤々の聲を擧げた。辯護士から法律顧問官となり、一八二四年、彼が六歳の折改宗した父は相當富裕であつた。

彼はボン大學とベルリン大學で法律及び哲學を研究し、一八四一年、エピロス哲學に關する論文により、イエナ大學から學位を得た。學生時代にはヘーゲル派の理想主義者であつたが、ヘーゲル派左傾の人物と接近するうちに、次第に無神論的になり、革命的傾向にまで進んで行つた。大學卒業後、ボン大學教授にならうとしたが、友人フォイエルバッハ(Ludwig Andreas Feuerbach, 1840—72, 唯物論哲學者、自由主義刑法學者、Paul Johann Anselm Ritter von Feuerbach の子) 及びバウアー (Bruno Bauer, 1809—82 ドイツの神學批評家) が共に政府の反動政策により教職を失つた事實に直面して斷念し、一八四二年、ライン州急進ブルジョァジーの機關紙ライン新聞 (Rheinische Zeitung) の編輯者となつたが、間もなく政府に禁壓された。翌年七年間の婚約者であつたイエンニイ(Jenny von Westfalen) と結婚してパリーに去り、此所でルーゲ (Arnold Ruge, 1802

—80，ヘーゲル學派左黨の哲學者）等と獨佛年報（Deutsch-Französische Jahrbuch）を出し、一號で廢刊したが、これに一切の現存物に對する假藉のない批判を下した論文を書いた。次で一八四四年以來、急進社會主義的な「前進」（Vorwärts）誌を發行した。當時既に彼は經濟學、フランス派社會主義、フランス革命史等の研究を進めて居たが、一八四四年、エンゲルス（Friedrich Engels, 1820—95，マルクスの科學的社會主義創始共同者）と相識り、以後四十年間にわたる密接な同志としての交遊が始められた。彼等二人は最も熱心にパリーの革命家團體に參加し、一八四五年一月終に、プロシア政府の壓迫のためパリーを追放され、ベルギーのブリュッセルに赴いた。此所で彼は秘密結社共產主義者同盟に加盟した。そしてその委囑を受けて、エンゲルスと共に、一八四八年、共產黨宣言（Das Kommunistische Manifest）を起草發表した。これはパリー滞在以來、種々の小市民的社會主義を清算し、革命的プロレタリア社會主義卽ち共產マルクス主義の理論と實際との根本原理を全的に表現したものであつた。

一八四八年の二月革命後ベルギーを追放され、ドイツに於ける三月革命後、一年間程ケエオルンで新ライン新聞を發行したが、ドイツより再び追放され、パリーを經て、一八四九年ロンドンに行き、死ぬまで此所に亡命生活を續けた。彼は一八五〇年より十年間實際運動をもやつた。著書頗る多い。

ハーゼ（Hugo Haase, 1863—1919）はドイツ獨立社會民主黨創立者の一人である社會主義者であつた。

一八九七年以後、社會民主黨代議士として同黨中央派に屬し、ベーベルの死後は社會民主黨の指導者の一人となつた。世界大戰にはレデブール（Georg Ledebour, 1850—，ドイツ社會主義政治家）及びカウツキー（Karl Johann Kautsky, 1854—，經濟學者、歷史家にして社會主義政治家）と共に戰時豫算に同意し、後平和主義的態度となり、次でベルンシュタイン（Eduard Bernstein, 1850—，社會主義者）、カウツキー等と共に、社會民主々義共働團並びに獨立社會民主黨を創立した。

一九一八年のエーベルト第一次政府の外相となつたが、翌年愛國の將校に襲撃され射殺された。

ヴイルヘルム・リープクネヒト（Wilhelm Liebknecht, 1821—1900）はギーセンに生まれ、學生時代から革命的民主々義者であつた。一八四八年の革命運動に參加せる爲、政府の逮捕を怖れてロンドンに亡命した。此所でマルクス及びエンゲルスの精神的訓練を受けて、科學的社會主義者になつた。

一八六九年、ベーベル（Ferdinand August Bebel, 1840—1913, 社會主義者）と協力して、社會民主黨を創立し、一八七四年、初めて國會議員となる。一八九〇年以來、黨の機關紙フオアヴェアツ（Vorwärts, 前進）の主筆となり毒筆を揮つた。彼は徹頭徹尾ドイツ軍國主義に反抗した爲に度々投獄されたが、遂に讓らなかつた。彼は外國語辭典を編纂したほど各國語に通じ、思想的には理論家としてよりも實際運動家として知られた。

カール・リープクネヒト（Karl August Ferdinand Liebknecht, 1871—1919）は父ヴ

イルヘルムの入獄中にライプチッヒ（Leipzig）で生まれた。法律及び經濟學を修めて辯護士となつた。早くよりドイツ社會民主黨の左傾派に屬し、靑年勞働者を煽動して反軍主義を高潮し、一九〇七年、軍國主義と反軍國主義（Militarismus und Antimilitarismus）を著述發表して、遂に反逆罪に問はれた。

一九一四年、世界大戰の勃發に際し、社會民主黨所屬議員中、唯一人率先して戰時豫算に反對した爲、賣國奴とされ投獄された。

彼はこの頃よりスパルタクス團即ち後のドイツ共産黨の組織に着手して居た。一九一八年のドイツ革命は彼を獄より解放したが、右翼黨に對し、プロレタリア獨裁を主張して、鬪爭を開始した爲、その酬ひとして、ローザ・ルクセムブルグと共にベルリン郊外で慘殺された。

ルクセムブルグ（Rosa Luxemburg, 1871—1919）はドイツ革命運動の女性指導者にして、マルクス主義理論家として活動し、忌まはしい國際共産黨の共同設立者であつた。

彼女はポーランドに生まれ、一八九〇年、スイスに滯在して、ポーランドの革命運動に理論的支持を與へ、其後ドイツに歸り、ポーランド運動者の間で活動した。

一九〇五年のロシア革命中、ワルソーに潜入して逮捕され、ドイツに追放された。

ボルシェヴィキーを支持して、一九〇七年ロシア社會民主黨第五回大會にポーランド代表として出席、スチュットガルト國際大會以來、益々ボルシェヴィズムに接近し、ドイツ社會民主黨左派にあつて、黨の政策から離れ世界大戰以來國際主義的態度をとつた。ツェトキン（Clara Zetkin, 1857—, ザクセン生まれのドイツの婦人共産主義者）、メーリング（Franz Mehring, 1846—1919, ドイツのマルクス主義者）と共に、雜誌インテルナチョナーレ（Internationale 國際）を發行、カール・リーブクネヒトと共にスパルタクス團を組織した。戰爭反對で投獄された際、獄中で、ユニゥス（Junius）といふ變名で書いた小冊子、"Krise der Sozialdemocratie" は當時有名であつた。之れは國際共産黨に關する著述であるが一九一八年十一月革命後、彼女はリーブクネヒトと共同して、赤旗（Rote

Fahne）を創刊し、次いで同年十二月ドイツ共産黨を樹立しドイツ勞働者の共産主義的左翼を指導した。

一九一九年一月革命の慘敗で、一月十五日カール・リーブクネヒトと共に慘殺された。著書多數あり。

ラーテナウ（Walther Rathenau, 1867—1922）は工業家エミール・ラーテナウの子としてベルリンに生まれた。

技師として父のもとに働いて居たが、一九一五年父が死に、その後をついで、電氣會社A・E・Gの社長となる。一九一四年、プロシア戰時內閣の組織に際し、原料品部を設けて、缺乏勝ちな戰時原料の需要供給を圓滑ならしめた。一九二一年、ドイツ聯邦復舊大臣となり、フランス復舊大臣ルーシュール（Louis Loucheur, 1872—，フランスの政治家、鐵道技師、大戰に際し巨富を獲た。軍需大臣、過激左黨領袖、廢荒地域復興大臣、商相、藏相等歷任）とヴイースバーデンに會議し、フランス荒廢地復舊に要する物資交付を約束し、

一九二二年、外相となつて、ジュネーヴ經濟會議に參與し、同時にラッパロでロシアのクラッシン（Leonid Borisovitch Krassin, 1870—1826）と獨露再保條約を締結した。

彼は經濟政策並に哲學に長じ、資本主義と社會主義との協調、又益々機械化せんとする經濟生活上の精神化に努力し、一方政治家として戰敗直後のドイツの難局打開に狂奔し、列國の猜疑を避けんとした時局拾收の第一人者であつた。一九二二年外務大臣在任中、六月二十四日ベルリン市中で極右派のため射殺された。

カウツキー（Karl Johann Kautsky, 1854—）は今のチエック・スロヴァク（當時オーストリア領ボヘミアの首都）に生まれた。

第二インターナショナルの指導的理論家として知られて居る。ウイン大學で歷史及び哲學を修め、エンゲルスの直接指導を受けて、マルクス主義の理論家となつた。一八八三年ドイツ社會民主黨の學術機關紙新時代（Die Neue Zeit）を創刊、一八八五年より同八八八年まで、その編輯者としてベルンシュタイン等の修正派マルクス主義者と抗爭して、正統

派マルクス主義の理論的指導者の地位に在つた。

ビスマルクの社會主義鎭壓令が撤廢された直後の一八九一年、エルフルト（Erfurt）に開かれたドイツ社會民主黨大會のため、有名なエルフルト綱領（Erfurter Programm）を起草した。世界大戰には帝國議員として、一時政府を支持したが、一九一五年、反對して黨所屬議員團から除名された。一九一七年、獨立社會黨を組織して、多數派に猛烈な反對をした。

同年十一月のロシア革命にはレーニンの無産者獨裁論に反對して論戰し、社會民主々義の立場を擁護した。一九一八年エーベルト第一次革命政府の外務次官となつた。ドイツ社會民主々義の元老として、ソヴェート攻撃の著書を澤山書いた。

コーン（Korn）第一次エーベルト共和政府の司法大臣。

ヘルツヘルド（Hezheld）は同司法次官。

ベルンシュタイン（Eduard Bernstein, 1850—）はベルリンに生まれ、一八七二年ド

イツ社會民主黨に加入、一八八一年より同九〇年まで、雜誌「社會民主」(Sozialdemokrat)主筆として、政府を攻撃し、追放されて一八九〇年より一年間、ロンドンに滯在した。

次いで一九〇二年より同六年まで、及び一九一二年帝國議會に選出されて議員となつた。

修正派社會主義(Revisionismus)の首領として活躍せるため、正統派マルクス主義者に敬遠され、一九一六年の黨分裂の際は獨立派に屬して、戰爭是認の多數派に反對したが、後一九一九年多數派に合流して、エーベルト第一次共和內閣の大藏次官となつた。

彼はドイツ社會主義者中の學者として認められ、その著書も多數ある。

プロイス(Hugo Preuss, 1860—1925)はドイツの法律學者及び政治家として知られた。一九〇六年、ベルリン商科大學教授兼學長となる。進步國民黨に屬して、植民政策及び市町村政に關與し、一九一〇年ベルリン市參事會員、一九一八年十一月十五日、大戰後の新政府及び國民議會のため、憲法の草案を起草し、一九一九年のマイマール憲法(フェルファッスング)の基礎を與へた。一九一九年二月より六月まで內務大臣、一九二一年以後プロイセン地方議會

の議員となる。著書多し。

フロインド（Freund）はプロイスが内務大臣たりし時の内務次官。社會民主黨員。

コーヘン（Cohen）はエーベルト第一次共和政府の新聞局長であつた。社會民主黨員。

ローゼンフエルド（Rosenfeld）はプロイセン第一次革命政府の司法大臣。社會民主黨員。

ハイネマン（Heinemann.）はローゼンフエルドの次官。社會民主黨員。

シモン（Simon）はプロイセン第一次革命政府の大藏大臣となつた。社會民主黨員。

ヒルシュ（Hirsch）は同内務大臣にして社會民主黨員。

ブッシュ（Busch）は同じく文部大臣にして社會民主黨員。

ブラウン（Braun）は後にプロシヤ社民黨内閣の首相となつたが、最初のプロイセン革命内閣では農商務大臣であつた。

ゾルフ（Wilhelm Solf, 1862—1937）はベルリンに生れ、初め言語學を修め、その後外

務省に入り、一九〇〇年サモア島（Isla, Samoa）知事、一九一一年には植民大臣となり、一九一八年、外務大臣として敗戰後の植民地喪失の殘務を整理した。

一九二一年以來、同二八年まで駐日ドイツ大使として知られ、又親日家として日獨文化の交渉に幾多の功績を殘した。

次にロシアであるが、ロシアは曾てユダヤ人を相當に虐待したので、ロシアに在るユダヤ人のみならず、全世界のユダヤ人はロシア帝政の崩壞にあらゆる手段を弄し、遂に歐州大戰（それは勿論ユダヤ人の工作したものであり、彼等は信仰上から、所謂ヘルマゲドンの戰の準備戰と見做した）に絶好の機會を捉へ、遂にその目的を達した。

この歴史を慘虐の血で染めたロシア大革命が、ユダヤ人指導者の手で行はれたことは、一九二二年に於けるロシア支配階級中の代表役員五四五名中、ユダヤ人が四四七名を占めて居た事實でも容易に判明するところである。このユダヤ人達が六十數萬のロシア共產黨員を操縦し、三百萬の全世界共產黨員を味方として、一億二千萬のロシア國民を支配し、

更に全世界の赤化に汲々として居る事實を知る者は、怖れさらんとするも怖れずには居られない。

ユダヤ人とロシアの問題は別に特記するの要があるので、次に近代史を狂はしたロシア・ユダヤ人政治家の檢討に移ることにする。

レーニン（Nikolai Lenin, 本名 Vladimir Iliitch Ulianov, 1870—1924）はソヴエート・ロシアの建設者として、又共産主義の最初の實現者としてロシアを血で塗つた人間として全世界知らない者のない怖ろしい存在であつた。彼は一小學校長であるユダヤ人を父としてシンビルスクに生まれた。

兄であるアレクサンドル・ウリヤノフはペテルスブルグ大學に在學中、アレキサンドル三世の暗殺計畫に連坐して、一八八七年絞首死刑に處された。彼の復讐の念はこの時に強く植えつけられたといはれる。此時彼は十七歲であつた。

次いでカザン大學に入り、自由主義的學生運動に參加し、傍らマルクスの資本論を熱心

に研究した。

一八九一年、社會主義宣傳者として放校處分を受けたが、後にペテルスブルグに入學を許され、法科を卒業した。

彼は在學中より、熱心なマルクス主義者として革命運動に參加し、原始共產主義を提唱し、マルクス主義に反對するナロードニキ（Narodniki）に反對して、無產階級が社會主義の眞の原動力なりと說いた。

一八九〇年、マルクス主義の勞働階級解放同盟を組織して、ペテルスブルグで活躍し、一八九七年、シベリアへ三年間の流刑に處された。流刑中、「ロシアに於ける資本主義の發達」を書き、一九〇〇年、刑期滿了と共に國外に亡命した。

スイスでは、プレハノフ（Georgii Valentinovitch Plechanov, 1857—1918, ロシアのマルクス主義理論家、メンシエヴイキ派政治家）、マルトフ（Martov, 1873—1923, ロシアの社會主義運動者）等と「火花（イスクラ）」（Iskra）を發行し、ロシアに密送してマルクス修正主

義者及び經濟主義者と論爭した。

一九〇三年、ロンドンで、ロシア社會主義勞働黨（一八九八年結成）の第二回大會が、開催されたが黨員資格の問題で、ボルシエヴイキ（多數派）とメンシエヴイキ（小數派）とに分裂した。彼は黨員を革命の實行運動に參加する者のみに制限し、無産階級の主な同盟者を農民とすべし、と主張して、多數派の首領となつた。

イスクラ（火花）は當時メンシエヴイキに握られて居たので、この編輯部を脱退して、一九〇三年、新しく機關紙ウペリヨード（前進、Uperiod）に據つて、改良主義、調協主義に反對し、理論、實行の兩方面から盛んに排撃した。

一九〇五年、第一革命を惹起せしめ、モスコーに潜入して革命を指導したが、敗れて翌年國外へ亡命した。其後、雜誌「プロレタリア」、「社會民主黨」、「スヴエズダ（星）」等を發行し、又、一九一二年以來、日刊新聞「プラウダ（Pravda, 眞理）」を發行した。

パリーではボルシエヴイキ勞働學校を設立して、闘士の養成に努め、國外からロシアの

勞働運動を指揮した。反動時代に、メンシエヴイキが地下運動を放棄して、議會による合法的淸算主義を提唱するや、敢然として非合法主義と革命必然性を絕叫して、之に對抗した。

一九一四年、歐洲大戰勃發と共に、オーストリア政府に逮捕され、スイスに追放されて一九一七年まで滯在した。その間チンマーワルド、キーンタールの國際非戰會議に出席し愛國社會主義者に對抗して、第三インターナショナルの設立を企てた。

一九一七年三月、ロシア革命の勃發と共に、ドイツより革命資金を得、密閉列車でペテルスブルグへ入り込み、ブルジョア民主革命をプロレタリア革命に轉向せしむることに努力し、その革命理論を農民、勞働者、兵士の間に宣傳し、革命臨時政府の戰爭繼續に反對し、勞働者、農民、兵士のソヴエート樹立を煽動した。次いで、同年十一月には、同民族出身のケレンスキイ臨時政府を倒し、自らは人民委員議長に選擧され、ソヴエート聯邦の基礎を確立した。

一九一九年、國際會議の同志チンマーワルド、キーンタール等と第三インターナショナル設立、モスコーにその第一回大會を開いた。以來死ぬまで、ソヴエート聯邦の事實上の獨裁者、ロシア共產黨、インターナショナル共產黨の指導者として、歷史的存在となつた。多數の著あり。

その死に際しては、王侯にも優る國葬を以て一世を驚かし、完全なる復讐を實現して終りを告げたが、彼の思想と地盤とは容易に倒れさうもなく益々惡の花を咲かせて居る。

トロツキイ (Leon Trotskii, 本名, Lev Davidov Bronstein, 1877—) はエリザベートグラードのユダヤ農民の子として生まれた。

オデッサ大學に學び、後ニコラエフに移り革命運動に參加した。ウクライナ勞働者同盟に加盟し、一八九八年に逮捕されてシベリアに流刑となつた。一九〇二年に脫走し、同五年まで、イスクラの編輯に從事、同年第一次ロシア革命の際はペテルスブルグのソヴエート執行委員長であつたが、革命に失敗して捕へられ、次いで追放された。一九〇七年には

得意の脫走を試み國外へ亡命した。ロンドンの社會民主黨大會に出席し、次いでヴインに移り、レーニン等とプラウダ紙を發行した。

世界大戰當時はパリーに潜入し、ナーシエ・スロヴオを發行した。一九一六年、フランス政府に逮捕され、スペインに追放。一九一七年の三月革命後漸く歸國出來た。ケレンスキイの臨時政府より、ボルシエヴイキ加擔の罪名で禁錮二ケ月に處せられた。十一月革命にはレーニンと共に中心となつて活動し、革命成功後は外務人民委員長、陸海軍人民委員長等に歴任、一九二三年一時失脚、一九二五年、最高經濟會議幹部となり、一九二六年、ジノヴイエフ等と共に新反對派を組織して、新經濟政策に反對せるため、その地位を奪はれ、一九二七年には共產黨より除名され、トルキスタン及びトルコへ流刑にされた。

各國を流浪しながらも、ロシア内部に指令し、絕えず反幹部派の革命運動を起し犧牲を出して居るが、之に憤慨した彼は目下メキシコに在つて、刺客に脅かされ乍ら、スターリン一派を攻擊し、之に呼應の不平黨はソヴエートの基礎を搖がして居る。スターリンもト

ロツキイの生存する間は枕を高くして眠れないと云つた狀態である。

カーメネフ（Kamenev, 本名、Lev Borisovitch Rosenfeld, 1883—1936）はモスコーで、ユダヤ人技師を父とし、私塾の敎師を母として生まれた。中學卒業後、工藝學校に入つたが、二年で退校を命ぜられ、一九〇一年、ロシア社會民主黨に加盟した。

一九〇五年の革命後、國外に亡命し、一時トロツキイと一諸でウインでプラウダ紙の編輯同人となつた。世界大戰で再びロシアに戻り、一九一七年の革命では重要な役割を演じた。革命政權確立と共に、人民委員會議長代理、黨中央委員、勞働及び防衛會議々長等の要職にあつたが、一九二六年以來、トロツキイと共に新反對派領袖としてスターリン（Josiph Stalin, 本名チュガシュヴイリ Dzhugashvili, 1879—）以下の幹部派に對立して勢力を失ひ駐伊大使に左遷され、更に黨籍をも奪はれたが、一時復活して、スターリンに再び疑はれ遂に一九三二年再除名され、一九三六年八月二十三日、ジノヴイエフ等と共に死刑の宣告を受けた。

ヨツフエ (Adolf Abramovitch Joffe, 1883—1927) はクリミヤに生まれた。年少にして醫學に志し、且つ革命運動にも參加し、一九一二年逮捕されてシベリアへ追放された。一九一七年歸國し、十一月のロシア革命に參加し、革命成功後、ソヴエート外務人民委員となり、ブレスト・リトウスク會議に全權として手腕を揮ひ、一九一八年には第一次駐獨大使に任ぜられ、一九二二年、長春露支會議ソヴエート全權として活躍す。

一九二三年(大正十二年)日本へ東京會議ソヴエート全權として來朝、後藤新平と折衝したるも、病氣のため會議中途で歸國し、次いで駐墺大使となつたが、後一九二七年十一月七日謎の自殺を遂げた。

ステクロフ (J. M. Steklov, 本名ナハームケス Nahamkes. 1873—) はキエフ大學聽講生として研究に從事し、一八九四年、社會民主々義運動參加のため逮捕され、シベリアへ十ケ年の流刑に處せられた。一八九九年、國外に逃亡し革命運動に參加す。一九〇三年、ロシア社會民主黨分裂後、ボルシエヴイキに加入し、一九二五年までソヴエート聯邦中央

執行委員會の機關日刊紙イズヴエスチヤ主筆であつた外、度々全露中央執行委員であつた。

ジノヴイエフ (Grigorii Zinoviev, 本名はアラドミルスキイ・フツヘルバウム、Aladmirski Hucherbaum, 1883—1936) はノヴオミルゴロドで生まれ、ベルンで化學を研究し、次いで法律を學んだ。一九〇一年、社會民主黨員となり、一九〇七年には同黨の中央委員となつた。其後、逮捕、逃走、亡命、歸國の生活を繰返しながら、黨の機關紙社會民主々義に投稿し、一九〇九年にはその主筆となつた。

一九一七年の革命運動にはその中心となつて活躍し、成功後黨の各種委員となり、殊に第三インターナショナルの成立後はその議長であつたが、一九二六年、トロツキー等と共に新反對派領袖の一人として、新經濟政策に反對し、スターリン、ブハリン等と衝突して中央委員會政治部委員を免ぜられ、更に一九二七年黨籍も除名されたが、翌年復歸した。併し反幹部派陰謀事件で、カーメネフ等と死刑の宣告を受けた。

ラデツク（Karl Radek, 本名ソベリソン、Sobelison, 1883—　）はオーストタリ・ユダヤ人として生まれた。

ポーランドやドイツの革命運動に參加したが、大戰勃發數ケ月後スイスに移り、一九一七年、ロシアの三月革命後はボルシエヴイキ代表として、ストツクホルムで活躍した。次いで歸國しロシア共產黨に加入した。

十一月革命後、ブレスト・リトヴスクの媾和會議にソヴエート代表の一員として出席、一九一八年のドイツ革命に際しては、ソヴエート執行委員代表として、ドイツ共產黨創立大會に參加した。スパルタクス團叛亂の失敗で逮捕され、一九一九年、ロシアに送還された。

一九二四年、第三インターナショナル執行委員となり、ソヴエトト聯邦共產黨中央委員在職中にカーメネフ、ジノヴイエフ等と新反對派を構成して、新經濟政策に反對せるため一九二六年の黨大會で除名處分になつた。

後、間もなく赦されて復黨したが、ソヴエート言論界の第一人者として、イズヴエスチヤ紙外報部長在職中、並行本部事件で同志十七名と逮捕され、一九三七年一月二十九日、ソコルニコフ等と死一等を減ぜられて、禁錮十年に處せられた。

ブハーリン（Nikolai Ivanovitch Bucharin, 1888— ）は公立中學教師の子としてモスコーに生まれた。モスコー大學で法律を研究し、更に一年間ウイン大學に留學した。此所での研究は後年の「金利依食者經濟學」に少からず影響したと云はれる。年若くして革命運動に參加し、一九〇六年ロシア社會民主黨に加盟、一九〇九年、革命運動參加の理由で逮捕され、北ロシアへ流刑に處された。間もなく脫走して、ドイツに行き、一九一二年レーニンと初めてクラカウで會ひ、以來レーニンの最も信頼する同志の一人となつた。

一九一七年三月のロシア革命起ると同時に急いで歸國して之に參加し、革命成功と共に最近まで引續きロシア共產黨中央委員に選ばれ、且つコミンテルンの執行委員となつた。一九一八年、黨中央機關紙「プラウダ」の編輯者となり、一九二七年、コミンテルン執行

委員長に推された。ところが一九二九年以來右翼的偏向のため失脚して不過の地位に在つた。イズヴエスチヤ主筆となり、反革命事件で一九三七年逮捕された。政治に關する多數の著述がある。

ルイコフ（Alexei Ivanovitch Rykov, 1880—　）は一般に純粹のロシア人のやうに云はれて居るが、實はロシアに在るユダヤ農民の子であることが明である。丁度スターリンはクルヂア人でユダヤ人でないと云つてるやうなものである。

中學時代からマルクス主義にかぶれ、カザン大學在學中、革命運動に參加して放校處分を受けた。その後ボリシエヴイキに屬して、革命運動を續けた。一九一七年の十一月革命にはソヴエート大會委員、全露中央執行委員及びロシア共產黨中央委員として活躍した。

一九二四年、レーニンの死後の後繼者として、人民委員會議長となつたが、一九三〇年末、ブハーリン等と右翼偏向者として罷免され、スターリンに其地位を奪はるゝまで、ロシア共產黨內の最古參者として重きをなした。

スターリン（Josiph Stalin, 本名ヂュガシュヴイリ Dzhugashvili, 1879— ）はチフリスに生れた。郷里の神學校生徒となつたが、一八九八年の革命運動に參加して放校され、ロシア社會民主黨員となつた。

一九〇〇年、レーニンやプレハノフ等の組織したイスクラ團に加入し、一九〇二年、逮捕され、翌年シベリアへ流刑されたが、逃亡して再び捕はれ、又流刑處分を受け、又々逃げ出して黨のため盡力した。

一九一七年の三月革命で歸國し、黨機關紙の編輯員となつた。一九一九年より翌二〇年迄、勞農監督人民委員長、又一九二〇年より同二三年まで、革命軍事委員となつて、國內各地の反革命軍を撃破した。革命後引續いて共產黨中央委員を勤めたが、常に幹部派に屬して、黨內の諸潮流と抗爭し、一九二四年には先づトロツキイを追ひ出し、一九二七年にはカーメネフ、ジノヴイエフ等を斥け、一九三〇年にはブハーリン、ルイコフ等の右翼派を追ひ出して、ソヴエート機關及び共產黨機關の實權を握り、絕えず清淨工作と稱して凡

ゆる邪魔物を、或は銃殺にし或は追放して多數の犧牲者を出し、一方國家補强工作に專念して世界赤化の夢を見て居る。

コロンタイ（Alexandra Michailovna Kollontai, 1872— ）はソヴエート・ロシアの婦人評論家並びに女性政治家として知られて居る。

彼女はスイス、フランスに遊學し、第二インターナショナルに加入して婦人運動に從事した。一九一七年のロシア革命でボリシエヴイキに屬し、中央委員に選ばれた。一九二三年以來、ソヴエート・ロシアのノールウエー及びメキシコ駐在公使を經、その後又ノールウエー公使になつた。社會學的論著の外、多くの物語りも書いて居る。

リトヴイノフ（Maxim Maximovitch Litvinov, 1876— ）は一九九八年、ロシア社會民主黨に入黨し、一九〇一年、逮捕投獄された。後脱獄してスイスに亡命し、イスクラ誌編輯部員となり、ボルシエヴイキに加入、一九〇三年には秘かに歸國し、一九〇五年、クラッシン等と社會民主黨機關紙「ノヴアヤ・ジーズニ」を創刊した。再び亡命して、歐

洲大戰中は反戰運動に努力した。十一月革命後、最初の駐英大使となり、次いで外務人民委員部參與其他を經て、歐米の外交事務に當り、各種の國際會議又は國際聯盟、軍縮準備會等に全權として出席し、ソヴィエート外交部の花形として活躍して居る。

ボグダーノフ (Bogdanov, 本名は Alexandre Alexandrovitch Malinovskii, 1873—1928) はロシアの哲學者であり、又經濟學者として知られた。

モスコーで革命運動に參加した。一九〇四年から同七年まで、ロシア社會民主黨內のボルシエヴィキ派の指導者の一人であつたが、その後、同派のレーニン的傾向を離脱して、議會から社會民主黨フラクションを召還しやうとする最後通諜派を糾合したため、一九〇九年にボルシエヴィキから除名された。

爾來、革命運動から次第に遠隔り、一九一七年の十一月革命にも參加しなかつた。併し後にはソヴエート最高國民經濟會議々長となつた。

彼が一九〇七年に書いた「經驗一元論」はマツハ (Ernst Mach, 1838—1916, オースト

リアの物理學者にして哲學者、ウイン大學の數學物理學、哲學敎授、上院議員。彼の哲學はアヴエナリウスに近い實證哲學で、眞理の規準を思惟の經濟にありとした）やアヴエナリウス（Richard Avenarius, 1843—96, バリー生まれのドイツ哲學者、經驗批判主義）の思想を完成しやうとしたものであつた。

ケレンスキイ（Alexandrovitch Feodrovitch Kerenskii, 本名はアーキルビス、Achilbis, 1881—　）はサマラ縣に生まれた。

初め辯護士となり、一九一二年、初めて國會議員となり、社會主義愛國者に屬した。一九一七年の三月革命に際し、ルヴオフ公（Georgii Ievgenievitch Lvov, 1861—1925）內閣の司法大臣、陸海軍大臣を歷任して、同年七月の聯立內閣には首相兼陸相となり、聯合國と提携して對獨戰爭の遂行に努力した。併し一面ユダヤ人同族の擡頭に資し、ロシア人の損害を大ならしめた。

同年九月十五日に至つて、共和國を宣言して自ら假政府の大統領兼全軍總師となり、レ

ーニンの靈操ひとなり、ユダヤ人迫害に怨恨重なるロシア帝政を崩壊せしめた。

併し過渡期には都合のよい存在であつた彼も、政治的には微温的社會主義者であつたため、その功績にも拘はらず、迫力、實行力を缺き、ボルシエヴイキの十一月革命で逐はれロンドンに亡命した。次いでパリーに居を移し、表面反ボルシエヴイキ運動を續けた。

ルナチヤルスキイ（Anatol Vassilievitch Lunatcharskii, 1875—　）は純粹のロシア人でユダヤ人ではないとして居るが、スターリンやその他の者と同じやうに、ルナチヤルスキイとはロシア人を裝ふ變名で、本名をマンデリスタウム（Mandelistaum）と呼ぶ立派なユダヤ人である。

彼はキエフで生まれた。一八九七年、モスコーの社會民主黨結社に加盟して逮捕され、次いで追放された。

一九〇四年、ジユネーヴでボルシエヴイキ機關誌ウペリオド（前進、Wperjod）の編輯同人となり、一九一〇年、過渡社會民主團體に參加し、ロシア社會民主黨のインターナシ

ヨナル派に屬した。

一九一七年の十一月革命後歸國し、教育人民委員長（文部大臣）となつた。

一九一一年には「宗敎及び社會主義」二卷、一九一九年には「勞働者階級の文化問題」等の政治に關する著書の他、劇作として、一九二二年に「解放されたドン キホーテ」、一九二〇年に「オリヴァ・クロムウエル」、一九二六年に「宰相と錠前屋」等を發表した。

マルトフ（Martov, 本名はツエーデルバウム Julii Ossipovitch Zederbaum, 1873—1923）は一八九二年に勞働解放團のペテルスブルグ支部設置、一八九五年、レーニンと共に勞働階級解放鬪爭聯盟を組織した。一九〇〇年國外に逃亡し、レーニンと「イスクラ」誌を創刊した。

一九〇五年、歸國して、當時のペテルスブルグ勞働評議會で大いに活動した。一九〇六年、追放の刑に處されたが、一九一三年再び歸國し、大戰中はスイスに滯在して、反戰派社會主義者を指導して活躍した。

一九一七年四月歸國して、メンシエヴイキ派と行動を共にした。そのうちにメンシエヴイキが禁壓されたため、一九二一年に國外へ去り、ベルリンに居を構へて、露字新聞「社會主義の使者」を發行した。ベーデンのシエーンベルグで死んだ。著書としては「ロシア社會民主黨の歴史」がある。

コップ(Kopp)は生粋の共産主義者で、絶えず革命運動に狂奔し、外國に亡命中、一九一七年の十一月革命に歸國し、革命成功後はベルリン駐在ソヴエート代表として活躍した。

ガネツキイ(Ganezkii)、本名はフアルステンベルグ(Falstenberg)と云ひ、初めコッペンハーゲンで銀行業に從事して居たが、その後革命運動に參加し、一九一七年のロシア革命後、ソヴエート聯邦國立銀行理事となつた。又、リガ駐在ソヴエート代表等に歴任したロシア共産黨幹部。

グリンケル(Grinkel)は第三インターナショナル及びロシア共産黨本部の幹部。

ポトウオイスキイ(Potovoiskii)はソヴエート革命軍事會議委員であつた。

エムシャーノフ（Emshanov）は交通人民委員長（交通大臣）であつた。

メンジエンスキイ（Menjenskii）は全露チエカ（特別警務委員會）の幹部として、多數の貴族、富豪、反革命分子等を殺戮せしめ、殺人鬼の如く怖れられた人物であつた。

モロトフ（Viatcheslav Michailovitch Molotov, 1890—　）はモスコーに生まれた。一九〇六年、ロシア社會民主勞働黨に加入し、少年時代より革命運動に參加した。ボルシエヴイキの機關紙「プラウダ」の發刊編輯にも參加し、逮捕投獄さるゝこと六回、その間二回の流刑處分を受けた。

一九一七年、十一月革命後、ソヴエート機關及び共產黨內部の要職に就き、一九二四年人民委員會の政治部員となり、スターリンの信望篤く、一九三〇年、スターリンがルイコフの追ひ出しに成功すると直ぐ後釜に据えられ人民委員會議長（首相）に就任した。次いで勞働國防議長、實施委員會議長を兼任した。

クラツシン（Leonid Borisovitch Krassin, 1870—1926）はシベリアのトボルスク縣に

生まれた。高等工業在學中から革命運動に參加し、度々禁錮追放された。一九〇七年ベルリンへ亡命し、一九一七年の十一月革命後はボルシエヴイキに屬し、ブレスト・リトウスク條約締結の際はレーニン、トロツキイを輔けて功勞あつた。その後、赤衞軍の食糧委員となり次いで商工大臣となつた。一九二〇年以來、外國貿易人民委員長となり、現職のまゝ英ソ通商條約締結のため渡英し、一九二二年にはジュネーヴ會議に出席、一九二五年以來駐英ソヴエート大使となり、ロンドンで客死した。

ヤキール（Yakiel. 1896—1937）は一九一七年共産黨に加盟し、チェキン軍討伐に參加して赤衞軍を組織した。一九二五年、ウクライナ軍管區司令官、一九三〇年、國防人民委員會委員となり、次いで一九三五年キエフ軍管區司令官に轉任、一九三七年五月九日の陸軍大異動でレーニングラード軍管區司令官に榮轉した。勳功により三個の赤旗勳章を授與されて居る。元帥トハチエフスキイ、ウボレヴイツチ、コルク、エーデマン、フエルドマン、プリマコフ、プートナ各將軍と共にソヴエート反革命の故を以て逮捕され、六月に全部銃

殺された。

ウボレヴイツチ（Ubolewitch）は一八九六年、リタウエンのユダヤ農民の子として生まれた。一九一六年、ロシアの士官學校を卒業し、翌年共產黨に入つた。一九二二年、シベリア事變當時、極東軍最後の軍司令官として日本軍の撤退交渉に當り、功績によりコーカサス軍司令官となり、次いでモスコー軍管區司令官に拔擢され、續いて赤衞軍補給部長となり、白露軍管區司令官となつた。一九三七年六月、反革命陰謀事件で銃殺された。

プートナ（Putna）は歐洲大戰當時少尉として從軍し、ロシア革命後、第三次日本駐在武官として赴任後、フインランド、ドイツ駐在武官を歷任し、滿洲事變後に極東軍副司令官に任ぜられた。その後、ロンドン駐在ソヴエート武官として在任中、合同本部事件の關係者として一九三六年逮捕され、一九三七年六月トハチエフスキー元帥等と銃殺された。

ヴオロシーロフ（Klémenti Evlemovitch Vorosilov, 1881—　）は現在ロシアの元帥としてソヴエートの兵馬の權を委ねられて居るが、幼少にして勞働者となり、一八九六

年、十五歳の時旋盤工となり、その後革命運動に參加し、一九〇四年以來ボルシエヴイキ中央委員として活躍した。爲に數回投獄流刑等に處せられた。

一九一七年の三月革命には大いに活躍し、各地の反革命軍を赤衞司令官として討伐した一九二一年以來、共產黨中央委員會政治部員となり、一九二五年以來、陸海軍人民委員長(陸海軍大臣)、革命軍事會議々長として今日に至る。

ブリユツヘル(Bluecher)元帥は極東軍司令官として對日戰略に狂奔し、極東軍を强化し、不遜の態度を度々示して來たが、赤衞軍内の勢力家として知られて居る。

ローゼンゴルツ(Arkadi Paulovitch Rosengolts)は一九三〇年以來、ソヴエート聯邦の外國貿易を切つて廻した手腕家であるが、一九三七年六月十四日、他に轉職せしむるとのことで突然解職された。續々發表されつゝある反幹部派の陰謀と反革命運動の犧牲と見られて居る。

以上の外、ラーリン(Larhin 本名ルーリエ)、リーリナ(Lielina 本名クニギツセン)、

グラードネフ(Gradnev 本名サークス)、ローシチン(Rossitin 本名グコウスマン)、イリイン(Ilyin 本名チーゲル)、ナウーモフ(Naumov 本名ギンツエルガー)、スウエルドロフ(Sweldorov 本名ローゼン)、レヴイトウスキイ(Levitovskii 本名ツエデルベウム)、ゼンコヴイツチ(Zenkovitch 本名ラドウース)、パヴロヴイツチ(Pavlovitch 本名ヴエリトマン)、スハーノフ(Suhanov 本名ギムメル)、スロンツエフ(Slontchev 本名ブレイフマン)、カムコフ(Kammkov 本名カーツ)、ザコルスキイ(Zagorskii 本名クラフマリ)、キエヴインスキイ(Kiewinskii 本名グリユーベウム)、レベデフ(Lebedev 本名ボリヤンスキイ)、ルミヤンツエフ(Lumiantchev 本名ルーリエ)、ウラヂミルスキイ(Uladimirskii 本名キルシユフエルド)等のユダヤ人達がそれぞれソヴエート聯邦機關乃至は共産黨の要職に就いて、ユダヤ人勢力の根を强く張つて居るが、未だ多數の不明ユダヤ人の存在することは事實である。

最近のモスコー通信によれば、ソヴエート・ロシア共和國人民委員ブブノフ(Andre

Bubnov) が教育活動の組織的破壞の罪で罷免されたと報じて居るが、若し事實とすれば
ブブノフは一九一七年の革命當時のロシア共産黨中央執行委員(所謂ボルシエヴイキの星)
の一人であるから、當時の二十四名中十名は死亡し、十名は銃殺され、或は逐はれて殆ど
全滅したことになる。

(二) 經濟的方面

前にも述べたやうに、キリスト教徒とユダヤ人との社會的交渉が、資本集中時代の開始
によつて大變化をもたらした。五百年の長期に亙つて、單に窮乏せるキリスト教徒に金錢
を貸し付け(高利貸)又はその商品を安く買ひ蒐め、相互の利潤を以て各方面に賣り捌く
ことを、ユダヤ人財政の通例とした彼等は文化創造への參與と共に、大いに生産業を助長
し、資本主義の發達を促進した。

それで、從來高利貸の資本であつたユダヤ人の金錢は商人及び實業家の資本となり、且

つユダヤ人自身の生産機關關與はキリスト教徒に對し、假令一時的にもせよ、好感を與へるに至つた。

中世期に於てはユダヤ人に對する法律上の保證確實でなかつた爲、彼等は勢ひ高利を要求せねばならなかつたが、ユダヤ人に對する法律上の保護確定に從つて、彼等の不當利子要求者は漸次減少するやうになつた。

機を見ること敏であり、不屈の努力を續けた彼等が、キリスト教徒同志の戰爭に軍需品を供給し、軍事費を貸し付け、巨富を得たにも拘はらず、キリスト教國は互ひに損傷疲弊して倘省るところ無かつた。

彼等は同族の智識によつて創造された無限の文化を巧みに利用し、世界到るところの開發をなし、經濟的基本を確立し、投資せる大資本は他民族國をして護らしめ、歐洲大戰によつて遂に世界の富の七割を確保するに至つた。

世界大戰にかいて何等の血税をも拂はずして得た彼等の巨利は實に千億ドルであつて、

ドイツの如きは戰前のユダヤ人財産がドイツの全財産の百分ノ三に過ぎなかつたが、大戰後は二十段も三十段も一足跳びして、百分ノ七十五となつたと云はれて居る。歐洲大戰により、勝てるも負けたるも財政的窮乏の爲呻吟しつゝあつたにも拘はらず、彼等は何等の犧牲を拂ふことなく巨富を得て、他民族の疲弊を嘲笑して居る。

フランス革命後、フランス在住ユダヤ人約二十萬人の財産は四千萬人のフランス人財産の二倍以上であつたが、更に世界大戰の結果は世界純ユダヤ人千六百萬人以上のうち、百萬に充たない者の所有する全財産は十七億人類の所有するものより多いのである。

今日は勿論のことであるが、彼の七年戰爭、十字軍の遠征などで、歐洲列國の財政危機に頻するや、各國は競ふてユダヤ人富豪を拔擢して大藏大臣や內務大臣に任じてその破産を救ひ、その代償として今日見るやうなユダヤ人の政治的雄飛の端緒たらしめたことは前記政治的方面で明なところである。即ちフランスに於けるエリオツト、英國に於けるアーロン、ドイツに於けるロートシルド、オーストリアに於けるシロム等がその例であつた。

歐洲大戰では、ロスチヤイルドが英佛その他の財政援助にあたり、ハアルフエリツヒはドイツの全覇權を握り、國立銀行總裁として辣腕を揮ひ、各國競ふてユダヤ人の援助を乞ふたことは、彼等にとつて思ふ壺であり、笑止千萬なことであつたに相違ない。

若し今日英國よりユダヤ人を驅逐するとせば、英國は破產し、十五萬人のユダヤ人をロンドンが失へば、世界一の大都會が寂しい貧民窟として殘されるであらう。

大富豪ロスチヤイルドは自家用の汽船で旅行し、アメリカの銀行家シツフは二萬二千二百哩の私設鐵道を經營し、その社長たる會社は十三億ドル（約五十億萬圓）の資本金を擁すといふ。又ニユーヨークの一ユダヤ商人で一ケ年の商取引十億ドルに達する者もあり、ニユーヨークに居住するユダヤ人百萬長者のみでも百名以上を算へられて居る。

ロートシルド家 (Rothschild)

此財閥の祖はマイヤー・ロートシルド (Maier Amschel Rothschild, 1743—1812) で、マイン河畔のフランクフルトで生まれた。

彼は初めラビ（ユダヤ立法學者でユダヤ人として名譽になる地位）にならうとしたが、志を變へてハンノーヴアの銀行に勤務し、多少の蓄財をしてフランクフルトに歸り、兩替店を開いて次第に財産を殖した。

一八〇一年、ヘツセン大公ヴイルヘルム一世の御用を拜命して地位を得、一八〇六年に同公がフランス軍侵入の難を避けた時、自己の財産を損することなしに大公の財産の安全を確保して益々信用を得て、後年世界一の大富豪となる基礎を作つた。五子あつて長男は本店を、次男はウイン支店を、三男はロンドン支店を、四男はナポリ支店を、五男はパリー支店を營み、父の遺志を繼いで合名會社を組織し、互ひに相勵み相扶けて、英、獨、墺、佛、伊の經濟的機關を把握して世界の金融界を支配するに至つた。

長男アンゼルム（Anselm Mayer, 1773—1855）。

次男ソロモン（Solomon, 1788—1855）。

三男ナタン（Nathan Mayer, 1777—1836）は一八〇〇年ロンドンに移り、歐洲列強の

國債募集上の商議者として、諸國の財政上に大活動をした。又ワーテルローの戰機を摑んで投機上に大成功をした。その子リオネル（Lionel Nathan, 1808—79）は數回下院議員に選出されたが、ユダヤ人の故を以て制規の宣誓をしなかつたため、一八五八年まで議席を持たなかつた。又リオネルの子ナタニール（Nathaniel Mayer, 1840—1915）は一八八五年に男爵に列せられた。

四男カール（Karl, 1788—1855）。

五男ヤコブ（Jakob, 1792—1868）。

ヴアンダービルト（Cornelius Vanderbilt, 1794—1877）はニューヨーク港の渡船業で成功した。一八一七年、同市とニューブランスウイツク間航行の世界最初の汽船を所有した。

一八二四年、會社組織となし、次いで沿岸航行を開始した。一八六七年以來鐵道事業にも關係し、ニューヨーク、シカゴの幹線を支配した。遺志によりナツシユヴイルにヴアン

ダービルト大學を創立した。今日子孫の繁榮は大したものである。

アスター (John Jakob Astor, 1764—1848) はドイツ系アメリカ富豪である、一七八三年渡米し、毛皮商を始め、本店をニューヨークに置き、土地ブローカーで成功した。コロムビアのアストリア町は一八一一年に彼の建設せるもので、死後、遺産の一部を以て圖書館が建てられた。

長子を William (1792—1875) と云ひ、その孫ウイリアム・ウアルドルフ (W. Waldorf, 1848—1919) は英國に移住し、一八九一年 Pall Mall Gazette 紙を經營、一九一七年子爵に叙せられた。ウアルドルフの妻ナンシイ・ウイッチヤー (Nancy Witcher 1879—) は夫を扶けて政界に活動し、一九一九年婦選施行後最初の婦人代議士となり、その後五回の總選擧に當選し、保守黨に屬した。又一八九〇年に死んだウアルドルフの父は當時米國第一の富豪と稱されて居た。

ロックフエラー (John Davison Rockefeller, 1839—1937) がユダヤ人である無いの

議論には全く反對するが、

　モルガン (John Pierpont Morgan, 1837—1913) はそうであつた。

彼はコネクチカット州に生まれ、一八五七年銀行業に從事して以來、漸次發展してモルガン商會を創立した。一八九八年以來歐洲の公債を北米の金融市場に引込み、破產汽車會社の救濟に成功し、一九〇〇年には鋼鐵トラスト、一九〇二年には船舶トラストを組織しその他の產業をも併せ、金融界、產業界で絕大の支配權を行使した。各大學に莫大な寄附をした外に、美術骨董の蒐集でも有名であつた。その子は現に北米鋼鐵組合の會頭である。

英國一流の諸會社及び大銀行は殆んど全部前記ロスチャイルドの外、**フリユーリング** (Frübling)、**ゴツシユン**(George Joachim Goschen 1831—1907, イングランド銀行總裁を經て議會に入り、一八六八—七一年商相、一八七一—七四年海軍大臣、一八八〇—一年駐土特命大使、一八八六—九五年自由聯合黨領袖、一八八七—九二年ソールズリー內閣の藏相となり、六回の豫算編成、國債借換、金貨改鑄等を遂行した。一八九五—一九〇〇

年再び海軍大臣、彼の財政論に關する著述多々ある）家やセリグマン(Seligmann)、モンターギユ（Montagu 前掲）やシユロエダー（Schröder）等の財閥經營であつて、その投資網は英領內は固より、南北米、アジア諸國にまで張られて居る。

日露戰爭で日本の外債を一手に引き受けた鐵道王クーンロエブ・シッフ（K. Schiff)、香港第一の富豪サー・チエルヂエーター(Sir Cherujater)や上海一流の富豪ムードン（Moudon)、カトリ(Catri)、エヅラ（Ezra）及びハルビン第一の富豪ソスキン（Soskin）等みなユダヤ人である。

サスーン（David Sassoon, 1792—?）はバグダッドに生まれた東洋商業史上重要な人物である。一八三二年、ボムベイに移住し對支貿易を開始し、專ら廣東を取引地とし、阿片及び棉の輸入をした。香港が英領となるや、その子を派遣し、同地に總本店を又各地要點に支店を設置し、英國の東方商業擴張上多大の功があつた。死後は Sir Albert Sassoon 次いで Sir Edward Sassoon 相續し、三代間に巨富を築いた。後同株式會社の總本店を

ロンドンに移し、今尙東方の商事を支配して居る。E. D. Sassoon は舊本店の傍系會社を香港に設立し、その本部をボムベイに置き、同地に五大紡績工場を有して居る。
今日世界の貨幣制度は殆んど全部と云つていゝほどユダヤ人の編み出せる金制度に縛られて、地球は宛然ユダヤ人の金網の中に入れられて終つたかの感を呈して居る。
各國の政治的動向も基準もみな等しくユダヤ人財閥の利害によつて、都合のいゝやうに左右されて居るが、この實例を吾人は今度の支那事變にハツキリと觀ることが出來る。
支那の抗日戰繼續と日本の徹底した討伐とに對する關係列國の微妙な動きは相當興味深い問題であるが、然も最も注目に値するは、ユダヤ勢力の陰謀性と間接的侵略の事實問題である。
彼等は嘗て日清戰後、淸國帝制を破壞せんとして、列强間に支那分割論を提唱せしめたが、日本は斷乎之を斥けて、東洋の平和確保に身を捧げ來つたことは今更云ふまでもない。併し執拗な彼等は財政的苦境に立つ諸政權を各國を通じての投資によつて攪亂し、遂に骨

拔きにし終つた。

狂へる支那に於て、國民政府の統一國家への夢には財政的援助を與へ、窮乏の下層民及びインテリ階級には共産主義の痲酔剤を嗅がして人民戰線の羈に導入しつゝある。

國民政府の國家統一工作は、益々國際資本の奴隷化を意味することであり、その財政は英米佛その他の外國資本を背景とせねばならない狀態に陷りつゝあるが、英國資本(對支)はサッスン(Sasson)、アーノルド(Arnold)及び前記ホンコン、上海のユダヤ財閥の握るものであり、從來の事實に徴すれば、英國の對支政策は本國の意志よりも現地の實力如何に左右されて居ることが判明して居る。

事變前に着手して行き惱みの儘である國民政府の幣制改革に對する英國の援助も洗つて見れば、ユダヤ人サッスンとリースロス(Rhysalos)の合作に外ならないのである。

元來、支那に於けるユダヤ財閥の根據地は國際都上海であり、金融機關は勿論のこと、同地で有名な土地建造物の大部分はサッスン、エヅラ、カトリ、ムードン等のユダヤ人財

閥の手に握られて居る外、外國系言論機關、文化機關としての瓦斯、水道、電氣、軌道等殆んど關係を持たないものはなく、支那の心臓は既に彼等のものとなつて居ることを悲しまずには居られない。

斯る鵺的存在のユダヤ人によつて、人類は如何に益し、又如何に苦しみつゝあるかを吾人は知らねばならない。

序ながら附記するが、一九三一年九月の滿洲事變直前の列國對支投資總額は、レーマー計算によれば、三十二億四千二百五十萬米ドルで、その中英國の十一億八千九百二十萬ドル、全體の三十六パーセント七を占め、日本は十一億三千六百九十萬ドルで全體の三十五パーセント一を占めてるが、日清戰爭以來の血稅投資は到底列國を束にしても及ぶものでなく何千億ドルか殆んど計算には表はすことが出來ない。

又、最近の清掃工作でソヴエートのユダヤ勢力が驅逐されたやうに考ふることは尙早で御大スターリン、外務大臣リトヴイノフ、交通大臣カガノヴイッチ(Kaganovitch)、赤軍

の總帥ウオロシーロフ元帥、内務人民委員エヂョーフ（Edjov）その他多數のユダヤ人達の健在であることを忘れてはならない。そして東洋平和の確立のためには、あの手この手で策動するユダヤ人の魔性を見破る眼力を備えなければ、如何に支那の抗日を一掃し、國民政府を倒し、一二外國の勢力を驅逐し得ても、幾度か前轍を踏まねばならないことを覺悟せねばなるまい。

(三) 探檢的方面

近代文化の促進は機械文明の發達と共に、諸探檢家による未踏地の探檢と資源開發によつて一段とスピードを增したことは誰しも知るところであるが、然も探檢界の先驅者に多くのユダヤ人の存在することを知つて居る人は幾人も無いであらう。

最近ソヴエートの學者が北極探檢を繼續して居ることや、飛行機によつてソ米の最短航空路を開拓のため北極を飛んで成功したことも未だ耳新らしいことである。

吾人はその蔭にユダヤ人學者の努力を見逃すことが出來ないものである。

先づその代表的人物を掲げて、その功績を見やう。

コロンブス（Cristobal Colon Columbus, イタリー語では Cristofolo Colombo, 1446—1506）はジェノアに生まれ、夙に航海に從事し、大西洋の航路に精通したトスカネリ（Paolo Toscanelli da Pazzo, 1397—1482, イタリーの天文、地理の學者で醫者であつた）の說に從つて、西航するのがインドへの捷徑であると信じ、實現のため諸國王を說得して步いたが顧られなかつた。その後漸くスペイン女王イサベラ（Isabella, 1451—1504）を動かし、三艘の船を艤裝して、一四九二年、ポルトガルから一路西進し、同年十月十二日、バハマ諸島に屬するグアナハニ島に上陸し、更に附近を航海して、キューバ、ハイチ等の諸島を發見し、翌年本國に歸航して一世を驚嘆せしめた。仍て一四九三年、船十七艘に千二百人を分乘せしめて、再び第二航海に向ひ、多くの新島を發見したが、キューバをインドの一部と思ひ違ひをし、以上の探檢を中止して、敵の讒誣に對抗するため急遽歸航

した。一四九八年の第三回航海には、トリニダート島より南アメリカの一角に觸れた。然るに新地渡航の射利的冒險の徒輩は豫期通りの巨利なきため、幻滅の悲哀を感じ、一方コロンブスの嚴酷、殘忍、貪婪の性格を謗る聲やまず一五〇〇年、彼はその二弟と捕縛されて、本國へ送還されて終つた。

併し女王の信任は變りなかつたので、一五〇二年、最後の航海に出で、ホンヂュラス海岸に沿うて南下し、パナマ附近に達しながら、不幸にして船坐礁のため、大いに苦しみ漸く歸航した。最早本國では彼を顧るものなく、身心共に衰へ、窮迫の裡にバリヤドリードで遂に死んだ。彼の遺骸はその後セビリヤ、ヘイチ、ヘベナ等を轉々として、一八九九年改葬され、セビリヤの大會堂に篤く葬られて居る。數年來、彼の研究者が、彼が海賊であつたといふ文獻を發見し世を驚かした。

因に彼の母親はスザンナと呼ぶユダヤ女であつた。又彼のアメリカ發見に要した資金はイサベラ女王だけの援助で足りた筈はなく、その大部分はスペイン在住ユダヤ人の支出せ

るもので、ユダヤ商人はコロンブスと同船してアメリカに赴き、その後オランダ人と稱して米國に往來し、又は移住した者は大部分オランダ在住のユダヤ人であつた。勿論、今日アメリカ大陸に住む多數のユダヤ人は各國より移住した者である。

ヴアムベリイ（Armin Hermann Vambéry, 1832—1913）はハンガリーの軍人で且つ東洋學者（特にトルコ）であつた。

彼は一八四八年の革命に將校として活躍し戰後トルコへ逃れ、中央アジアの大部分及びペルシアを旅行し、トルコ民族の風俗習慣、言語等を踏査した。歸國してブタペスト大學教授となつた。又中央アジア探檢旅行中の精細なる報告、トルコ語に關する著書を數册出した。

エミン・パシヤ（Emin Pasha, 本名は Eduard Schnitzer, 1840—92）はドイツ生まれのアフリカ探檢家であつた。

一八六四年以來、アジアトルコ地方を旅行し、一八七五年には英領スーダンに行きゴル

ドン（Charles George Gordon, 漢名戈登、1833—85, 長髪賊平定で知られた）將軍の信任を得、遂に赤道州の知事に起用された。マーヂ（Mahdi）の亂には外部との連絡を五箇年も斷たれ大いに苦戰したが、一八八八年、スタンリイ（Sir Henry Morton Stanley, 1841—1904, イギリスのアフリカ探檢家）に救助され、彼と共に東アフリカを探檢した。一八九〇年以後はドイツ領東アフリカの開發に盡力し、カルメスに赴かんとして一八九二年十月二十日、途中土蠻に殺された。

スタイン（Sir Aurel Stein, 1862—　）はブタペスト生まれのユダヤ人で、英國の考古學者、探檢家として知られた。

彼は初めインド政府に勤務し、教育事業に携はつた。一九〇〇年より二年間、インド政府より派遣されて、新疆省ターリム盆地を探檢し、特に和闐附近の古蹟を精査し、種々の遺品、古壁畫、古文書、圖書、佛經典等を發見した。殊に木簡のやうな、紙の發明以前の文記は珍中の珍であつた。

一九〇六年より八年まで、再びターリム盆地、甘肅省の西邊、燉煌千佛洞に多數の繪畫、古書、古經典を發見し、之を蒐めて歸つた。一九一三年より一六年まで、三度探検に上り前記二回の探検地方を再調査の上、蒙古の西部より、パミール山中、アフガニスタン方面まで踏査し、古代歐亞の通路發見に努めた。

一九三〇年、アメリカ、日本を經て同地方の第四回探検に出掛けた。第一回以來の蒐集品はロンドン大英博物館、デリーその他のインドの博物館に保管された。學術上の功績により貴族に列せられ、考古學課評議員に推薦された。

オツペンハイム（Oppenheim）は中部メソポタミヤでフエニキア文化の中心であつたヒツチト（Hittites）帝國の埋沒した首府を發掘して名をなした。

ナンゼン（Fridtjof Nansen, 1861—1930）はノルウエーのオスロ近在で生まれ、北極探検で知られた政治家であつた。

クリスチヤニア大學を卒業後、一八八二年動物標本を採集のため、グリーンランドに赴

き、歸國してベルゲンの自然博物館主任に任ぜられ、一八八八年より翌九年まで、グリーンランドを東より西へ横斷し、一八九三年にフラム（Fram）號に乘つて、北極探檢に向ひ歐亞の北岸を廻り、ニユー・シベリア島沖で流氷に乘り上げ、一八九三年、北緯八十六度十四分の地點まで達し、當時での記錄を作つた。この時、彼は船より氷上をフランツ・ヨーゼフランドまで引返して多營し、一八九六年春、英國の北極探檢家ジャックソン（Frederick George Jackson）の來るに會ひ救助された。

一九〇五年以後、政界に入り、ノルウエーのスエーデンより分離に盡力し、一九〇八年、イギリスへの最初の使節となつた。

一九二〇年、世界大戰の捕虜歸還に關する國際計畫主管者となり、一九二一年、ロシア饑饉救助の最高委員となり、一九二三年、ローザンヌ會議では、民族問題解決の試案として、ギリシヤ、トルコ兩民族の人種交換を提議し、それを實現させた。

一方、一九二〇年以來、クリスチヤニア大學海洋學敎授に就任した。一九二二年にはノ

ーベル平和賞を授與され、七十歳でオスロで歿した。

オツペルト (Julius Oppert, 1825—1905) は東洋學者として知られたドイツ系ユダヤ人である。ハンブルグに生まれたが、一八四七年、フランスに歸化し、ハイデルベルグ、ボン、ヴイン等の諸大學で、アラビア語、サンスクリット等を研究した。

一八五一年、フランス政府より、學術踏査のためフレネル (Augustin Jean Frenel, 1788—1867 物理學者) 等とメソポタミアに派遣され、歸つてその報告を出版した (Expédition scientifique en Mésopotamie, 2 vol. 1853—63)。

一八五七年、公立圖書館でサンスクリットを講じ、一八七四年、College de France の教授となつた。著作極めて多く、楔形文字解讀者として苦心の一人であつた。パリで死んだ。

その著の重要なものは、一八五二年出版の Les inscripton des Achénienides、一八六〇年の Elements de la grammarie assyrienne、一八七七年の Documents juridiques

d'Assyrie et de la Chaldée 等である。

スウエン・ヘディン（Sven Anders Hedins, 1865—　）はスエーデンの地質學者、探檢家として知られた。

一八八五年より九一年まで、ペルシア、メソポタミヤ地方を踏査し、一八九〇年より翌年まで、ペルシア宮廷に使した。一八九三年より九七年まで、オレンブルグより北京まで新疆のノプノル地方及び西藏を經て大旅行を決行し、一八九九年より一九〇二年まで、逆に蒙古のゴビ砂漠を橫斷して、西藏を通りタリム河を下つて再びノプノルに歸着し、アジア大陸橫斷の大旅行に成功した。

その功績によつて、貴族に列せられ、學士院會員となり、一九二四年より翌二五年までスエーデン王立學士院科學部長に就任した。日本にも立ち寄り、帝國大學その他で講演した。その探檢報告書は十數冊に及び、殆んど各國語に飜譯されて居る。

リンドバーグ（Charles Augustus Lindbergh, 1904—　）は北米のミシガン州に生

まれた。ウイシコンシン大學で機械工學を研究し、一九二二年、ネブラスカ航空會社に飛行研究生として入社、その後各州を巡回飛行で訪れ、曲藝飛行などもやつて居た。一九二四年、ブルックスの陸軍飛行學校に入學し、同年九月、ケリー陸軍飛行學校に進み、卒業後、航空郵便會社の主任飛行士となつた。

一九二六年、大西洋横斷飛行計畫に着手し、翌二七年午前七時五月二十日五十二分、ニューヨークからパリーへ向け横斷の壯途に上り、翌日午後十時（ニューヨーク午後五時）パリーに着陸、最初の大西洋無着陸横斷に成功して、一躍して有名になつた。その後陸軍大佐に任ぜられ、一九三二年、夫人と一諸に北大平洋を越えて、日本にも飛來した。

アンドレー（Salmon Augut Andrée, 1854—97）はグシナに生まれた。スエーデンの氣球乘として知られた。

彼はストックホルム工業專門學校で敎育を受け、卒業後、特許局試驗官となり、一八九七年、二人の同行者と氣球で、スピッツベルゲンを發して、北極探檢に向つたが、行衛不

明になつた。一九三六年に至つてその遭難場所が發見され、遺骸や多數の所持品等も故國に持ち歸られた。

(四) 藝術的方面

國民の文化的價値は、單にその智的性質によつてのみ決せらるゝものではない。それはその藝術的乃至は道義的性質に依り決せられねばならない。

他國民に比して、ユダヤ民族のこの方面の進步が劣等であれば、それだけ彼等の文化的價値は優れたものとはなり得ないと云ふ結論に逹する。

ユダヤ人の智的性質に關しては、ツオルシヤの著「人種問題を論じて、特にユダヤ民族の理論的根據に及ぶ」に於て、徹底的に論ぜられて居るやうに、又、アウエルバッハ、フイッシュベルグ、エルキント、アンドレー、ユット、ワイセンベルグ、ゾーフエル、ルシヤウ等の批判的乃至は科學的論著によつて、證明されて居るやうに、その智的才能の高い

ことは爭ふ餘地もないが、その藝術的乃至は道義的性質も、公平なる見地よりすれば、キリスト敎徒に優るとも劣るものでないことは後に述べる人物評に於て、明白に肯定出來るであらう。

キリスト敎徒に比して、小數であるユダヤ民族が人類文化生活の指導的地位にまで達して居るといふことは、從前の彼等の環境より考察するも、民族的適性を裏書きするものと云はねばならない。

ツオルシヤンがその著書に云つたやうに、從來ユダヤ人のために設けられた職業が、一切斯樣な藝術的天稟を助長しなかつたことを考ふれば、ユダヤ民族の藝術的進展は益々スピードを增加するであらう。彼等は商業乃至取引に制限されたる力を集中し、他民族との間に激烈な生存競爭を繼續して來たことは、將に悲壯な事實であつた。

一旦解放され、啓蒙運動により、キリスト敎徒に伍して、互角の地歩を占めるや、その刻苦勉勵、明晰なる心意、鋭敏なる判斷力等によつて、解放されたとは云へ、未だそこに

は幾多の外歴的諸困難に耐えて、短日月にしてよく指導的地位に立ち得たことは、蓋し偶然のことでは決して無いのである。

若し高い文化が高い民族の自然的隨件であると想像することが、正當であるとするなれば、高い文化を創造し得るユダヤ民族は、昔ながらの劣等民族で無かつたことが、事實の上で證明されるわけである。

優等な民族的資性は文化の必須條件であり、民族は文化を培ふ溫床である以上、經濟的繁榮と政治的躍進をさへ具備するならば、その民族の創造する文化は、想像以上の域に達することは必然である。

同一民族が種々の時代と、種々の國々とに於て獲得する文化の程度は、その外的條件の相違によつて生ずるものであるから、今日のユダヤ人に與へられた諸條件は、少くも解放以前とは雲泥の差があり、從つて、最も優秀なる傑物を輩出し得る環境に置かれて居るといふことにもなる。

スピノザ（Baruch de Spinoza, 1632—77）はオランダ最大の哲學者であつた。

彼は强制的にキリスト敎に改宗させられたユダヤ人を父として、アムステルダムに生まれた。初めユダヤ敎的敎育を受けたが、ユダヤ經典の傳統的解決に滿足せず、自由派キリスト敎徒と交はり、且つタルムード、カバラ及び中世期のユダヤ哲學等を研究した。

一六五一年以來、彼自身の哲學的思想の發展が始まり、一六五四年、父の死後、ラテン語、ギリシヤ語、自然科學等に親しみ、又デカルト（René Descartes, 1596—1650, フランスの哲學者にして數學者）の哲學を研究した。

一六五六年、新思想の故でユダヤ敎會から破門され、追放されて轉住し、一六七〇年より死ぬまでヘーグに居を構へた。彼の生計は友人の年金によつて維持されて居たが、自ら小額に甘んじてレンズ磨きで生計を補ひ、一六七二年、ハイデルベルヒ大學よりの招聘をさへ斷つて、眞に哲人に相應しい孤獨の生涯を送つた。

彼の哲學はデカルトの物心二元論を改造し物心を唯一の實在の屬性に過ぎずとなし、然

も神はこの實在そのものに外ならず（汎神論）、この神卽ち自然は嚴密な必然的法則によつて支配され（機械論）、この必然性を直觀知によつて認識することにより、神に對する愛（amor Dei intellectualis）に到達するのが至善である（理性論）とした。

このやうに、彼のいふ神卽ち自然及び世界過程の必然性論は當時無神論乃至は唯物論と解釋されたが、彼の思想を貫くものは神秘主義にまで高揚される、神に對する敬虔な情熱であつた。多數の著書がある。

モーゼス・メンデルスゾーン（Moses Mendelssohn, 1729—86）はユダヤ人を父としてデッサウ（Dessau）に生まれた。

初め、ベルリンの商家の家庭敎師となり、後に見出されてその支配人となつた。レッシングと親交を結び、又カント（Immanuel Kant, 1724—1804, 批判哲學の樹立者）と文通して居た。ソクラテスの再來と云はれた彼はドイツ啓蒙期に於ける哲學者として、又ユダヤ人をして文化線上の創造的地位に引き上げた原動力であつたことは、既に述べたやう

である。

ベルグソン (Henri Louis Bergson, 1859—　) はパリーに生まれた。一八八一年、パリーの師範大學を卒業し、一九〇〇年、Collége de France の哲學教授となり、一九〇一年には名聲と共に Institut の會員になり、一九一四年には學者の名譽とされて居た Académie 會員に擧げられた。

彼は哲學に於ける合理主義、主知主義に反對し、實在にはよらず、直覺によつて捉へらるべきものであつて、それは純粹持續 (Durée pure) 即ち眞の時間であり、生命であり、自由である。理智は實用を主とする働きであり、實在を固定化し且つ機械化し、その眞の姿を捉へ得ぬとなした。

この説は二十世紀初期に大きな影響を與へて居る。

ハイネ (Heinrich Heine, 1797—1856) はデュッセルドルフで生まれた。兩親は貧しかつたので、叔父ソロモン (Solomon) の援助を受け、富者たらんとして商人を志したが失

敗し、方針を變へて各地の大學に法律を學んだ。

一八二五年、キリスト教に改宗し、次いでロンドン、ミュンヘン、上部イタリア等に滯在した後、當時自由主義の中心地であつたパリーへ行つた。その頃從妹アマリエ（Amalie）に對する失戀の苦しみを味ひ（彼の抒情詩中に散見する愛の告白は殆んどこの經驗によつたものと見て差支へない）、歸鄕せんとしたが、一八三五年のドイツ聯邦會議の決議は、青年ドイツ派（彼もそのブラック・リストに載せられて居た）の國外逐放を決定したため、容易に歸國することが出來なかつた。

一八四一年、フランス婦人と結婚した。一八三七年より四八年まで、フランス政府より年金を受け、一八四五年から脊髓病に苦しみパリーで死んだ。その墓は當時藝術家の巢であつたモン・マートルの墓地に在る。抒情詩集、散文等の名著多く、世界に與へた影響は今日に至るまで大きい。

フルダ（Ludwig Fulda, 1862—　　）はドイツの自然主義作家として活躍し、その後

達筆の喜劇作家として認められた。シイラー賞を授與された一八九三年の作「タリスマン」(Talisman) は素晴しい舞臺成功を收めて代表作とされた。

尙、彼は飜譯家として知られ、詩人でもあつた。

ヴエラスコ(Velasco)はアメリカの劇作家として知られ、多數の作品を發表して居る。

キングスリイ(Charles Kingsley, 1819—75)は英國の宗教家、文學者として知られた。ケンブリッヂ大學に學び、一八四四年以來副牧師並に牧師として、ヘンプシアのエヴアズリーで一生を送つた。

一八六〇年より同六九年まで、ケンブリッヂ大學の近世史教授となつた。一八四五年より同五〇年まで、獨自な方法で社會問題を取扱つた小說アルトン・ロック (Alton Locke) 二卷を書き、一八五一年にはキースト (麴、yeast) を發表し、勞働階級の向上に熱意を打込み、モーリス (William Morris, 1834—96, 英國詩人) と同じく宗教心から超越したキリスト教社會主義者であつた。

その著、キリスト教社會主義者（Christian Socialist）及び人民政策（Politics for the people）の中には無數の當時の時事問題を論じて居る。

彼の書いた小說中、一八五二年のヒパテイア（Hypatia）は初代のキリスト教時代とギリシア哲學との葛籐を描き、又「おーい西行きだ」（Westward Ho!）は一八五五年に發表されたものであるが、エリザベス朝の北米發見に關したものであり、一八六六年のHereward the Wake はアングロ・サクソン民族とノルマン人の抗爭を取扱つた時代物であつた。

一八六九年より七〇年まで、西インド諸島に渡り、その結果が美しい作品「最後」（At last）となつた。

晩年ウエストミンスターのキヤノンに任ぜられた。

ヘンリイ・キングスリイ（Henry Kingsley, 1830—76）は前記チヤールズ・キングスリイの弟である。

彼はロンドン、オックスフォード兩大學に學び、一八五三年より同五八年まで、オーストラリアに住み、歸國後、植民地生活を描寫した物語、ジエフリイ・ハムリン(Geoffrey Hamlyn)を一八五九年に發表し、次いで、クリミヤ戰爭を題材にした傑作「漆黑(レーヴン)の靴(シュー)」(Raven Shoe 全三卷)を一八六二年に公にした。

ヘンリエツテ・ヘルツ(Henriette Herz, 1764—1847)はドイツの才媛として知られ、彼女の美貌と機智とは、當時の名士を女王の如く操縦したと云はれて居る。

彼女の父は富裕なユダヤ人醫師であつた。一七七九年、醫師ヘルツ(Marcus Herz, 1747—1830 ユダヤ系)と結婚した。ベルリンに在る彼等の邸宅には、ドイツ精神界の名士エンゲル(Johan Jakob Engel, 1741—1802, ドイツ啓蒙時代の通俗哲學者)、彫刻家シヤドウ(Johann Gottfried Shadow, 1764—1850)、ゲンツ(Friedrich von Gentz, 1764—1822, 著作家にして政治家)、フンボルト兄弟(兄、Karl Wilhelm, Freiherr von Humboldt, 1767—1835, プロシアの學者にして政治家、弟は地理學者、Alexander von Hum-

boldt, 1769—1859)、ドイツのローマン派文藝批評家シュレーゲル兄弟（兄は August Wilhelm von Schlegel, 1767—1845, 弟 Friedrich, 1772—1829)、著述家ファルンハーゲン（Varnhagen von Ense, 1785—1858）等が出入し、殊に神學者であり哲學者であるシュライエルマッハア（Fridrich Ernst Daniel Schleiermacher, 1768—1834）とは盛んに思想的交換をした。彼女のキリスト教改宗は一八一七年であつた。

エンゲル（Johann Jakob Engel, 1741—1802）はメクレンブルグに生まれた。初め神學を研究し、後には古典語學、哲學、數學を研究し、一七七六年、ベルリンのギムナジウム（gymnasium、中學、高校共併の大學豫備校）の哲學及び美學教授となり、後にアカデミー（Akademie）會員、フリードリッヒ・ヴイルヘルム三世が王子であつた時の教師となり、又當時の文學者仲間の牛耳を握り、ドイツ啓蒙期の學者として大いに活動した。

その劇作「世界の爲の哲學」（Philosoph für die Welt, 全三卷、一七七五—一八〇〇年）は有名なものである。

ダヌンツイオ (Gabriels Dannunzio, 本名はポルト・ラウヴイン Porto Lauwin, 1863―　）はイタリアの詩人、小說家、軍人、飛行家、愛國者として知られて居る。ローマ大學の出身である。二十才の時、詩集四篇を出し、小說の處女作は一八八九年に書いた Il Piacere（適意）であつた。

一八九〇年には彼の天才大いに圓熟し、小說では Il trionfo della morte（死の勝利、一八九四年）、詩では Il poema Paradisiaco（樂園の詩、一八九三年）等の傑作を發表した。一八九八年にはフランスの名女優ユダヤ出身のサラ・ベルナール及びイタリアの名女優ヅーゼ・ケキ（Eleonora Duse-checchi, 1859—1924, 藝風はベルナールと對蹠的であつた）のために、La citta morta 及び Il sogno d'un tramonto d'autunno 等を書いた。

歐洲大戰當時は經濟的必要からフランスに居たが、一九一五年春歸國し、從來の唯美主義の態度から、政治的實行家に躍進し、各地で愛國心を鼓吹し、身を軍籍に投じて、騎兵、

歩兵、海軍と順次勤務して、最後に航空隊に入り、一九一六年、彈丸に撃たれて一眼を失つた。

一九一八年、ヴィン上空に侵入し、一九一九年、フイウメ（Fiume）駐屯のイタリア軍が反佛暴動のため壓倒されるや、一軍を率ゐて同市を占領し、十五ケ月間、獨立都市國家を形成した。彼は熱烈なフアッシストで、一九二四年、皇帝エマヌエル（Vittorio Emanuele III, 1900—　）から、モンテ・ネヴオソ公（Monte Nevoso）の稱號を與へられた。

一九二四年作の Le Faville del Maglio は自序傳ともいふべき散文詩である。

最近のローマ通信に左の如き報道がある——イタリーのガルタ湖畔に蟄居の熱血詩人ダヌンツイオは最近、硫酸液に身體を溶かして死ぬ、と自殺決行を發表したが、マルコニー侯（Guglielmo Marooni, 1874—1937, 電氣技術家、無電發明家、イタリア元老院議員、ノーベル賞受領者）逝去の後任として、翰林院總裁になつたので、自殺無期延期を發表し

たと。兎も角變つた存在である。

アヴイチエブロン (Ibn Gebirol イブン・ゲビロルはアラビヤ名である。Solomon Avicebron, 1020—1070) はアラビア人であるとする者多いが、純粹のユダヤ人である。

彼はスペインの哲學者として知られたが、その住居はマラガであつた。

彼の思想には新プラトン學派的神秘主義が顯著である。それは神としての第一實體からその意志が分出し、その他すべてのものは質料と形式とより合成する、神的意志に達するには、哲學的思索ではなく、恍惚境に於ける直觀によらなければならないといふのであつて、そのスコラ哲學に與へた影響は多大であつた。

アヴエリング (Edward Aveling, 1851—98) は元來自然科學者で、初めケンブリッヂのニユー・カレッヂ (New Colledge) で化學及び生理學を敎授して居たが、カール・マルクスに傾倒してからは、熱烈な社會主義者となり、英國に於けるマルクス主義の解說者となつた。マルクスの死後、兼ねて想思の仲であつたマルクスの末女エリーナー (Elenor,

1856—98）と結婚し、夫婦で實際運動を指導し、マルクスの資本論を英譯した。然し、彼の私行上の缺陷は遂に愛妻をして、毒を仰いで自殺せしむるに到つたと傳へられて居る。

アグイラー（Grace Aguilar, 1816—47）はユダヤ人を兩親として、ロンドン近郊に生まれた。生來蒲柳の質で、主としてデヴオンシアに居住した。ドイツのフランクフルト・アム・マイン（ユダヤ人の多い）で三十一才の若さで死んだ。

英國の女流作家としての作品に、マジック・ウエールス（Magio Wealth, 不可思議な富）スピリット・オヴ・ユダイズム（Spirit of Judaism、ユダヤ主義の精神）、ゼ・ジューイッシュ・フェイス（The Jewish Faith, ユダヤ人の信仰）、ホーム・インフルエンス（Home Influence, 家庭の影響）、ア・マザース・レコムペンス（A mother's recompense, 或る母の償ひ）及びゼ・ヴェール・シーダース（The vale ceders, 老ひ杉）等であつた。

ダルベルグ・アクトン（John Emerich Edward Dalberg,Lord Acton, 1834—1902）卿は英國の歴史家として知られて居る。

彼はナポリで生まれたが、その母はドイツ婦人であつた。パリーで教育を受け、後ドイツに遊學した。

法皇過誤説に反對し、自由主義舊教徒の首領となり、自説を發表した。

一八五九年より同六五年まで、英國下院の議員となり、自由黨に屬した。グラッドストーンの推薦によつて、一八六九年、男爵となつた。又、一八九五年、ケンブリッヂ大學の欽定講座教授となつた。彼のケンブリッヂ近世史はアクトン監督下に編纂されたものである。近世史に關する著多し。

ウアツセルマン（Jakob Wassermann, 1874—　）はドイツの小説家である。

一八九七年、處女作チルンドルフのユダヤ人（Die Juden von Zirndorf）を、次いで一九〇〇年には、若いレナーテの物語り（Die Geschichte der jungen Renate）を發表して、一躍文壇の寵兒となつた。又、一九〇八年の「道化師長屋」（Kasper Häuser）は傑作の一つであり、一九二一年の作品「Mein Weg als Deutscher und Jude」（ドイツ

及びユダヤ人としての我が進路）はドイツ系ユダヤ人としての覺悟と發展の路を示したものである。この外、長短數十篇の小説は廣い讀者層を獲得して居た。

カイザー（Georg Kaiser, 1878―　　）はドイツの戯曲家として名あり、表現派作家中の最多作家である。

彼の作品は根本に於て冷靜な理智的なところがあるが、その技巧は强い感動的効果を與へて居る。又、その題材、様式は共に多面多角的なところがある。

代表作としては、一九一四年の「カレーの市民、Die Bürger von Calais」、一九一六年の「朝から眞夜中まで、Von Morgens bis Mittelnachts」、一九一七年の「珊瑚、Die Koralle」、一九一八年の「女の贄、Frauenopfer」、一九一九年の「地獄、道、地球、Hölle, Weg, Erde」、一九一八―一九二〇年の「瓦斯、Gas」、一九二三年の「相竝んで、Nebeneinander」、一九二四年の「行商、Kolportage」及び一九二六年の「二人オリイヴア」等がある。

オニール（Eugene Gladstone O'neill, 1888—　）はアメリカの生んだ最初の世界的劇作家である。父ジエームズは旅役者であつた。彼も父の稼業を手傳ひ、その後、新聞通信員となり、更に二ケ年の海上生活をしたが、一九一二年から翌年にかけての、病氣療養中を一轉期として、劇作家になつた。

一九一四年、Thirst（渴）を發表して知られ、一九一六年自らの關係せる Provincetown 劇團により、初めて一幕物、Bound East for Cardiff（カーディッフへは東方にきまつてる）を上演した。海上生活その他の過去の體驗を材料として力作を發表した。その中でも、一九二〇年の「地平線の彼方へ（Beyond the Horizon）」、アンナ・クリスティ（一九二二年）、又一九二七年の「變つた間狂言、Strange Interlude」は同年度の優秀作として、Pulitzer 賞を獲た。

彼の作品はストリンドベリ（August Strindberg, 1849—1912, スエーデンの戯曲家にして且つ小說家）、ヴエデキンド（Frank Wedekind, 1864—1918, ドイツの戯曲家）や

ドイツ表現派の影響最も多く、性格に對する見方はフロイド（Sigmund Freud, 1865—オーストリアの精神病學者）に負ふところ多い。ロマンチシズムとリアリズムとの融合、題材の傳統を脱した取扱は作品を特色づけ、その作品は世界中廣く讀まれて居る。

日本でも彼の作「ダイナモ（Dynamo）」等が上演された。ダイナモは彼の一九二八年の作である。前記作品の外に、一九一九には、キャリビーの月（The Moon of the Caribee）、一九二一年の、皇帝ジョーンズ（Emperor Jones）、同じく、相違（Different）と藁（The Straw）、一九二二年作の毛深い猿（The Hairy Ape）、一九二四年の、希望と楡（Desire and the Elms）その他がある。

オツペンハイム（James Oppenheim, 1882—　）は北米ミネソタ生まれの小説家、短篇作家、詩人として知られて居る。

コロムビア大學に學び、セッツルメント事業に關係した。一九一六年から翌年まででではあつたが The Seven Arts を編輯した。

彼の作品はホイットマン（Walt Whitman, 1819—92, アメリカの詩人）、聖書等の精神的影響が大きい。作品としては、一九〇九年に「月曜の朝と他の詩文」（Monday Morning and other poems）と一九二四年の「海」（The Sea）等の詩集があり、小説は一九一〇年、野生の燕麥（Wild Oats）、一九一四年に、有閑女房連（Idle Wives）、一九一五年に發表の「戀しき」（The Beloved）等である。又短篇としては、一九〇九年のドクターラスト（Doctor Rast）その他がある。

オーベル（Daniel Francois Auber, 1782—1871）はフランスの歌劇作家であつた。彼はケルビーニ（Maria Luigi Carlo Zenobio Salvatore Cherubini, 1760—1842, イタリアの音樂家）に認められて、正規の教育を受け、一八二五年には歌劇 La Maçon（石工）を作り、次いで一八二八年には La muette de Portici（ポルティチの狩獵小屋）等を作つた。

この歌劇は當時の一種の革命氣分に迎合したものであつた爲に、大いに歡迎され、政治

外交にも多少の影響を與へたやうである。

ヴエデキンド（Frank Wedekind, 1864—1918）はハンノーヴアに生れた。

自然主義全盛時代であつたにも拘はらず、彼の戯曲家としての態度はその影響を受けず獨自の路を進んだ。

彼は人生一切の根本的な原動力を性的衝動に認め、その威力の前には人間は無力であるといふ根本觀念を以て、彼の藝術の基調となした。近來ナチス政府は彼の作品を一掃せしめたと聞いたが、どの程度かは知ることが出來ない。

その作品は有名過ぎるほど有名な（春の目さめ、Frühlingserwachen, 1891）、を初めとして、「地靈、Erdgeist, 1895）」、「パンドーラの箱、Die Büchse der Pandora, 1903」、「フランチスカ（Franziska, 1911）、ビスマルク（Bismark, 1915）等の外、獨自な思想を取扱つた論文、小說等がある。彼はその思想及び樣式の上から表現派の先驅と稱せられて居る。

カソーボン（Isaac Casaubon, 1559—1614）はジュネーヴに生まれ、一九八二年、同地の大學でギリシア語の講座を受け持つた。エティエンヌ（Henri Estienne）の娘と結婚し、二十人の子女を擧げた。

一六〇〇年、パリーに移り、同大學の Lectureur de roi に任ぜられ、古典學者として名を賣つた。一六一〇年、イギリスに渡り、ジェームズ一世の好遇を受け、俗人でありながらカンタベリーの牧師に任命され、年金を賦與された。翌年歸化して、死後ウエストミンスタアに葬られた。著書としては、神學、日記等がある。

ガーディナー（Samuel Gardiner, 1829—1902）は英國の歷史家、オックスフォード大學に入つて研究し、ロンドン大學史學教授として、終世國史（特に十七世紀の內亂革命時代）を研究した。

彼の研究は公正ではあつたが、マコーレ（Thomas Babington Macaulay; Baron Macaulay of Rothley, 1800—59, 英國歷史家）やグリーン（John Richard Green, 1837

—83, 英國の史學者）に比べて、光彩と氣力を缺くと云はれた。

カメラリウス（Joachim Camerarius, 1500—74, 本名カムマーマイスター Kammermeister）はドイツの人文主義者、體育家として知られ、その出生地はバンベルグであつた。一五二一年、ウイツテンベルグでメランヒトン（Philipp Melanchton, 1419—1560, ドイツの宗敎改革者、本名はシュワルツエルド Schwarzerd）と、又一五二四年、ベーゼルでエラスムス（Desiderius Erasmus, 1466—1536, ネーデルランドの人文主義者）と識り、人文主義を修め、一五二六年、ニュールンベルグの高等學院長兼ギリシヤ語敎師、一五三〇年、同市を代表してアウグスブルグ告白の起草に際し、メランヒトンを輔佐した。一五三五年、古典研究所をテユービンゲン大學に、一五四一年にはライプチッヒ大學に同じく創立して、その長となつた。

彼はギリシヤ、ラテン諸作家の出版註釋をなし、又體操を奬勵した。

その子、同名（1534—98）はドイツの醫者であり、植物學者であつた。

サスーン（Siegfried Sassoon, 1886—）は英國の詩人である。ケンブリッヂ大學に學び、歐洲大戰に參加し、功により十字章を授けられた。詩集としては、「戰ひの詩集」（Collected War Poems）、諷刺詩（Satirical Poems）等が最も代表的のものである。

ザングウイル（Israel Zangwill, 1864—1926）はユダヤ人を兩親として、ロンドンに生まれた。

ロンドン大學を卒業し、初めは牧師、後ジャーナリストになつた。ユダヤ民族主義者で、劇、詩、小說、エッセー等を書き、「ゲットオの子等、Children of the Ghetto」、ゲットオの悲劇（Ghetto Tragedies）、シュノーラーの王（The king of Schnorrers）、ゲットオの夢想家（Dreamers of the Ghetto）はユダヤ物語りとして廣く知られて居る。

右の外の作品として、マスター（Master, 主人）、僻みなし（Without Prejudice）、背ける娘（A Revolteb Daughter）、我等は近代的だ（We Moderns）等がある。

ウアルトン（Izaak Walton, 1593—1683）は一六二四年、ロンドンで吳服屋を開業し

たが、漸次巨財を獲たので、一六四四年、傳記作者となつて活動した。又彼は魚釣りに造詣深く、釣魚の父とまで稱せられた。

次に音楽及び美術界方面であるが、殊に音楽界に至つては、ユダヤ系楽系を削除したらば、近世音楽界は零になるであらうほど、重要人物を輩出して居る。左に之を掲げて見やう。

メンデルスゾーン・バルトルデイ（Felix Jakob Ludwig Mendelssohn-Bartholdy 1809—47）は哲學者モーゼス・メンデルスゾーンの孫として、ハムブルグに生まれた。十五才のとき、シエークスピア（William Shakespeare, 1564—1616）作、眞夏の夜の夢（Midsummer night's Dream）の序曲を作曲し、ウエーベー（Karl Maria von Weber, 1789—1826, ロマン楽派の先驅者）の指導により、ローマン主義の作曲をするやうになり、ゲオテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749—1832, ドイツ最大の詩人）に愛されて、文學的教養や古典主義の感化を受けた。

一九二九年、バッハ（Johann Sebastian Bach, 1685—1750, ドイツ最大の作曲家）のマタイ傳受難曲を指揮して、この隱れて居た樂聖を世に紹介した。後、イギリス、スコットランド、イタリアの諸國を遊歷、樂想を豐にした。歸國後、ベルリンの Singakademie（音樂學校）の長たらんとして成らず、デュッセルドルフに行き、その後一八三五年にライプチッヒに移り、同地の呉服陳列館（Gewandhaus）の音樂會指揮者となり、一八四三年には多數の音樂家を集めて、ライプチッヒ音樂學校を創設した。この間、プロシア王の招聘を辭して、歿するまで此地を離れなかつた。

ブラームス（Johannes Brahms, 1833—97）はバッハ（Johann Sebastian Bach, 1685—1750, ドイツの大作曲家、長男 Wilhelm Friedemann, 1710—84, 次男 Karl Philipp, 1813—93, 三男である Emanuel, 1714—88, 四男 Johann Christian, 1735—82 も皆作曲家である）、ベートーヴェン（Ludwig von Beethoven, 1770—1827）と共に、音樂史の三つのBと云はれた。

彼はヘムブルグに生まれ、父は樂師であつた。その樂才は一八五三年、シユーマン(Robert Alexander Schumann, 1810—56, ローマン樂派の主張の一部分を代表するドイツの大作曲家）の音樂新誌「Neue Zeitschrift für Musik」上に於ける推薦によつて一般に知られた。

一八六二年、ヴィンに赴き、以後殆んど此所で生活し、此地で歿した。

音樂史の彼の地位は所謂ローマン樂派でもあり、又形式上の古典派でもある。その作品から來る感銘は一種の粗野味を伴へる寂しい美しさ、時として田舎人見えた道化味をも含んで居る。

ワグナー（Wilhelm Richard Wagner, 1813—83）は知らない者もないドイツの樂聖にして劇詩人であつた。

彼はライプチッヒで生まれ、早く父を失ひ、母の再婚したドレスデンのガイヤー(Ludwig Geyer）も彼の九才の時、不幸にして死んだので、止むを得ず母は彼を連れてライプ

チッヒへ戻つた。

幼少の頃より詩才豊富にして、シエークスピアを理想として居た。中學時代から音樂に興味を持ち、正式な授業を受け、大學在學中に、ピアノ曲、シンフォニー、大合唱曲を作り、一八三四年、漸くデンマルク劇場の管絃樂團に關係し、一八三六年、歌劇「戀愛禁物 Liebesverbot」を上演する機會を得たが、不幸にして失敗した。後、オストプロイセンのキオニヒスベルグやベルトのリガの劇場に就職したが、共にその地位安定せず、私かにパリーに逃れて漸く生計を立てた。

パリーでは Rienzi と Der Fliegende Holländer とを作曲し、前者はドレスデンで、後者はベルリンで上演された。これは稍々成功であつた。一八四二年、ドレスデンに移り、一八四五年にタンホイザア（Tannhäuser）と男聲大合唱曲（Liebesmahl der Apostel, 最後の晩餐）を作曲、グルック（Christoph Willibard Gluck, 1714—86, ドイツの歌劇作曲家）のアウリスのイフイゲニイ（Iphigenie in Aulis）の加筆をし、一八四六年に

はベートヴェンの第九シンフォニーの演奏等をした。

一八四九年五月革命に加擔し、逮捕を怖れて、ワイマールのリスト (Franz von Liszrt, 1811—86, ハンガリー生まれのドイツ大音樂家) の許に走り、次いでチューリッヒに落着いた。一八五〇年、ローヘングリン (Lohengrin) の上演、一八五九年、トリスタン (Tristan) の作曲を完成した。

一八六〇年、各地で自作オペラを上演せんとしたが、パリーで一部批評家の攻撃を受け Tannhäuser の上演を三回ぎりで止めねばならなかつた。一八六四年、ベヴァリア王ルードヴィッヒ二世の寵遇を得て、ミュンヘンに住み、翌六五年、Tristan und Isolde を上演した。

一八三六年に結婚した女優ミンナ・プラーナ (Minna Planer, 1809—66) と一八六一年離婚して、獨りで居たが、一八六九年、リストの娘で、ビューロー男 (Hans Guido Freiherr von Bülow, 1830—94, 音樂家) の妻になつて居たコジーマ (Cosima) と結婚し

た。

この間、一八六八年に Meistersinger von Nürnberg を上演し、彼の地位は確實なものとなつた。又、從來の劇場が彼の樂劇の上演に適しないので、理想的劇場を建てやうと努力し、一八七二年、バイロイトに地を得て、ベートーヴェンの第九シンフォニー曲を一流の音樂家を集めた管絃樂團で演奏し、基礎を確立した。

一方、ワグナー協會を設立して資金を集め一八七六年から、祝祭樂劇三部作 Der Ring des Nibelungen（序曲 Rheingold, 第一部 Walküre, 第二部 Siegfried, 第三部 Götterdämmerung）を上演した。その後、この劇場で、Parsifal を演奏し、以後の彼の作品は殆んど例外なしに全部此所で演奏された。

樂劇（Musikdrama）の歌詞は皆自作で、此點、彼は大詩人であり、哲學者であり、且つ美學者であつた資格を示すものである。

ジーグフリード・ワグナー（Siegfried Wagner, 1869—）は樂聖ワグナーの子である。

一八九八年以來、バイロイト劇場の指揮者となり、一方歌劇の作曲に努力した。作品は相當多く、一八九九年の Der Bärenhänter、一九〇二年の Herzog Wildfang 一九一一年の Schwarz Schwanenteich 等が代表作で、ドイツ神話を題材とし、民族的色彩濃厚である。

マイヤーベーア (Giacomo Meyerbeer, 1791—1864, 本名は Jakob Liebmann Beer) はベルリンで生まれた。主にパリーで活動した歌劇作曲家である。サリエリ (Antonio Salieri, 1750—1825, イタリーの音樂家、ベートーヴェン、シューベルト等の指導者) に慫慂されて、歌劇作曲家を志し、一八一六年、イタリーに行きロッシーニ (Gioacchino Antonio Rossini, 1792—1868, イタリーの音樂家) の歌劇を研究し、イタリー的旋律を採り入れた歌劇四五を試みに上演して見たが、十分な成功を見なかつた。その後、パリーに行き、歌劇 Robert le Diable を一八三一年に上演した。この歌劇は、旋律はイタリー風、和聲はドイツ風、リズムはフランス風といつたやうな折衷的のものであつたがため

に、大いに歡迎されて成功した。

一八三六年に發表した歌劇 Les Huguenotos（ユグノー教徒）によつて、彼の地位は愈々確定的のものとなつた。

その後、健康を害し、Afrikanerin（アフリカの女）の上演準備中パリーで客死した。

オッフエンバッハ（Jacques Offenbach, 1819—1880）はドイツで生まれ、パリーで活動した歌劇作家である。

彼の代表作は「ホッフマン物語 Les contes Hoffmann」であるが、全體的に見て、彼の輕歌劇はその當時のパリーの生活をよく表現してるやうである。

ゴールドマルク（Karl Goldmark, 1830—1915）はオーストリアの音樂家として知られた。多數の室內樂、管絃樂曲を作曲したが、何れも近代的音色を出すことに成功して居る。

特に歌劇、サバの女王（Die Königin von Saba）及び序曲サクンタラ（Sakuntala）

は有名の作曲である。

ヨアヒム（Joseph Joachim, 1831—1907）はドイツのヴァイオリン大家として知られた。

一八三八年、ヴィン音樂學校に入り、卒業後、ライプチッヒでハウプトマン（Moritz Hauptmann, 1792—1868, ドイツの音樂理論家）及びメンデルスゾーンの指導を受け、ゲヴァントハウス管絃樂團の樂長となつた。次いでリストと識り、各種の地位を經て、一八六八年、ベルリンの高等音樂學校（Hochschule für Musik）に、妻アマリエ（Amalie 當時の有數なアルト歌手）と共に招聘された。

彼はベートーヴェンの晩年の作である管絃樂四重奏の演奏に長じて居た。少いが作品もある。

一九〇七年八月十五日、ベルリンで歿した。

ジンバリスト（Efrem Zimbalist, 1899—）ロシア生まれのヴァイオリン名手として世

界一の稱がある。

ペテルスブルグの音樂學校でアウエル教授（Leopold von Auer, 1845—1930, ハンガリーのヴァイオリン教授、ドント、ヨアヒムの弟子、門下生にはエルマン、ハイフエッツ、ジンバリスト等あり）に學び、一九〇七年、ベルリンで初演奏をして知られ、世界中を演奏旅行して居る。妻アルマ・グリユック（Alma Glück）は有名な歌手である。

ミッシア・エルマン（Misha Erman, 1891—）はジンバリストと同じくロシアで生まれ、アウエル教授の門下として出藍の譽を荷ふものである。一九〇四年以來、世界中を演奏旅行し、目下アメリカに住居を持つて居る。

ハイフエッツ（Jasha Heifetz, 1901—）オーストリア生まれのヴァイオリン名手で、一九一三年以來、世界各地演奏旅行中である。

ソロモン（Joseph Solomon）は英國の畫家として知られて居るが、履歴は目下調査中

イスラエルス（Josef Israels, 1824—1911）はオランダの畫家として知られた。彼はフ

ロュンヘンの富裕なユダヤ銀行家の子として生まれた。

パリーで修業し、一八四八年歸國し、スペイン王の命に從ふことを拒むオランイエ公ウイルレムと題する唯一の歷史畫で有名となつた。然し貧しいオランダ漁民達の生活に深く感動し、漁夫や同じ貧窮の農民や日雇人等を描いてオランダのミレーと稱されるに至つた。代表作として、破船者、此世にひとり、歸り行く羊の群れ、等がある。

リーベルマン（Max Liebermann, 1847―）はドイツの畫家として知られ、ドイツ印象派の先驅者、初めパリーでムンカッツイ（本名 Michael Lieb, 1846―1900, Munkaczy, ハンガリ最大畫家、ユダヤ人）やミレー（Yean Francois Millet, 1814―75, フランス畫家）の刺戟を受け、更に、メンツエル（Adolf Menzel, 1815―1905）、マレー（Hans von Mareés, 1815―1905）、ライブル（Wilhelm Leibe, 1844―1900）の影響下に進み、後にはフランス外光派の感化のもとに、ドイツ印象派を確立した。

ピツサロ（Camille Pissaro, 1830―1903）は聖トーマ島に生まれた。

彼はモネー（Claude Monet, 1840—1926）と共に、印象主義の代表的畫家として知られて居る。

彼は風景畫に於て印象派の理論を發展させた。後輩畫家に與へた影響は大きい。セザンヌ（Paul Cézanne, 1839—1906, フランスの畫家）も彼の影響を受けた。

アンネンコフ（Annenkov, 1889—）はソヴエートの畫家にして、永くパリーに滯在し、立體派や表現派の影響を受けその作品にはトロッキイやルナチヤルスキイの肖像畫がある

アントコルスキイ（Mark Antokolskii, 1843—1902）はツルベツコイと並稱されるヨーロッパに名を謳はれた近代ロシアの最優秀な彫刻家であつた。

彼はパリに居を構へて活動した。作品は適確綿密な寫實に基いて、それに彼の想像力に富んだ内生活の力强い特性を反映させて居る。

ピヨートル大帝紀念像や死にゆくソクラテス等が代表的力作とされて居る。

その他目下調査中のものだけでも相當にある。次はユダヤ人である事は判つて居るがそ

の事蹟、生年月等不明のものである――文學者として、ロイベン・ブラウデス、ビヤリック、ナウム・ソコロフ、ヤコブ・コーヘン、ジエー・ダヴエヴ、ジエー・ペルシヤトスキイ、アイザック・ワイス、メーヤー・フリードマン、サミユエル・クラウス、ダブルユー・ベヘー、アブラハム・ベルリナー、ダビデ・ノエルマルク、ヨーゼフ・クラウスナー、アハド・ハーム、アブラハム・ゴールドフアーデン、アイザック・リネッキイ、シャロム・アブラモウイッチ、エリヤクム・ツンザー、ヤコブ・デーネソーン、シャロム・ラヴイノウイッチ、シモン・フクーグ、モルデカイ・スペクトル、エン・エムシヤイケヴイッチ(以上ドイツ及びロシヤ)。

又、詩人、音樂家、劇作家として(ロシアだけ)、ダビデ・フリシマン、エリエゼル・ベン・イエユダ、イシドル・シンガー、ダビテ・フイヒマン、ズイ・シノール、アイザック・カツエルソン、ダビデ・シモン、シモン・ギンスベルグ、エン・ビネス、エー・ルボシツキイ等がある。

又、女優としては、特に世界的に令名のあつた三人——ベルナール、ラシエル、ルビンスタインを擧げることが出來る。

サラ・ベルナール (Sarah Bernhardt, 1844—1905, 本名、Rosine Bernard) は近代寫實以前の舊派の藝風を傳へる最後の女優であつた。

一八六二年、初舞臺を踏み、間もなくフランス劇場の一員に加はつた。當時旣にラシエル、マルス (Anne Françoise Hippolyte Boutet-Monnell Mars, 1779—1847) 以來の優秀な悲劇女優と謳はれたが、一八八〇年、同劇場を去り獨立一座を主宰した。その後屢々諸外國に客演を試みて、全ヨーロッパの劇界に名聲を馳せた。

その演技は内面的深さを缺くが、然も柔い名調子と華奢で纖美な肢體とは悲哀そのもののやうな顏貌とは、緩急自在の妙味と共に、觀客の心に迫るものがあつた。

ユーゴー作エルニナのドンナ・ソル、サルヅー (Victoien Sardou, 1831—1908, フランスの劇作家) の nos intimes (1862), La famillie Benoiton (1865), Patrie (1869),

La Tosca (1887), Thermidor (1891) 等、及びロスタン (Edmond Rostand, 1864—1918, フランスの詩人、劇作家) 作の「鷲の子」の主役等が當り役であつた。

又、彼女の椿姫がアメリカの映畫發展に與へた影響は大きいと云はれて居る。

エリーザ・ラシエル (Elisa Rachel, 1820—58) はユダヤ人行商の娘としてスイスで生まれた。一八三八年、パリーのテアトル・フランセで初舞臺を踏み、ラシーヌ(Jean Baptiste Racine, 1639—99, フランスの悲劇詩人) やコルネイユ (Pierre Corneille, 1606-84, フランスの劇詩人) の悲劇作品を演出して、大いに成功した。古典悲劇を新しく演じて生かした女優として、演劇史上重要な地位を占むるものである。

イダ・ルビンスタイン (Ida Rubinstein) はニコライ二世 (Alexandrovitch Nikolai II, 1868—1918, ロシア最後のツアー) の寵を集めた、ロシア優秀な舞踊家であつた。パリーに移り、バクスト (Léon Bakst, 1860—1924, ロシアの畫家) の設計になる庭園をもつ豪壯な邸宅に住して、凡ゆる豪華をつくし、舞姫としては世界一富裕であつた。

ダヌンツイオ作の「サン・セバステイアンの殉教」、又近作では、ストラヴインスキイ(Igor FeodorovitchStravinskii, 1882—, ロシアの音樂家)の「仙女の接吻」やラヴエル(Maurice Ravel, 1875—, フランスの音樂家)の「ボレロ」等を踊つて問題を提起した。

次に述べるのは、映畫とジャズ音樂であるが、今日比較的安價な娯樂としての映畫は全世界に普及されて居て、旅興業師を通じて、かなりの山間僻地でも、映畫を見ることの出來る世の中である。隨つて映畫を通じて受ける文化的影響も大きい反面に、その弊害も決して少くないことを見逃すわけにいかない。

今日世界各國が自國の政策遂行に映畫を利用して居ることは、その輸入される映畫によつて、明らかにされるところであるが、又自國の主義主張、道徳觀、社會觀等をも巧みに映畫に織り込んで、對外的宣傳に利用しつゝあることも事實である。

この重要な宣傳機關である各國の映畫會社を檢討するとき、ユダヤ人資本と關係を持た

ないものは、殆んど無いことを知るものである。殊にソヴエートの如きは、國家經營である
るだけに、共産主義を以て、世界を赤化せんとする目的遂行のため、彼等の拂ひつゝある
苦心は想像以上で、指導者、演出者、技術者となつて居るユダヤ人は、三者一體となつて、
その效果を擧げつゝある。

併し、娯樂としての映畫は何といふても、アメリカの作品が一等地を拔いて居る。
曾て、アメリカのユダヤ人研究家が、アメリカの重要都市に於ける三十七の大劇場は、
近々十ケ年間にして、悉くユダヤ人に握られた、といふて居るが、映畫會社もその例に洩
れないといふよりは、ユダヤ人により創設經營され、監督、演出者も殆んど彼等の握る職
場であると云ふことが出來る。

ユダヤ人アドルフ・ヅウカーの經營するパラマウント（Paramount）映畫會社、リユー、
ルイズ・メーヤー及びカール・レムールの三ユダヤ人共營のメトロ・ゴールドウイン・メ
ーヤース（Metro-Goldwyn-Mayers）映畫會社、同じくスケンクの經營するユナイテ

ド・アーチスト（United Artist）映畫會社、社長をヅーカー、副社長をラスキーとするフェーマス・プレーヤース・ラスキー（Famous Players Laski）映畫會社の四社がそれである。

從つて、彼の有名な監督ルビッチ、スタンバーグ、グリフィスその他洩れなく、監督はユダヤ人で、その非凡な手腕を縱橫無盡に發揮して居る。

又、女學生の書齋に、ニキビ書生のアルバムにまで飾られて騷がれて居る、映畫ファンの人氣者フェヤバンクス、チャップリン、ピックフォード、ロイド、キートン、シトローハイム、ファイトその他少しでも知られた者は皆ユダヤ人である。

トーキー會社としては、ウエスターン・エレクトリック（Western Electric）會社、レヂオ・コーポレーシャン・オヴ・アメーリカ（Radio Corporation of America）會社（この會社はヴィクター蓄音機會社の姉妹會社である）、トービス・クラングフイルム・システム（Tobis Klangfilm System, トービス社がシーメンス Siemens, 及びアルゲマイ

ネ Allgemeine 二社の特許權を合して、ベルリンに根據を置く新會社を創立したもので、オランダ系ユダヤ人の獨占である）を見ることが出來る。

又、一九二一年のニューヨークで開催された活動寫眞館主大會で、出席者五百名中、ブリンガム博士（Dr. Bringham）一人を除いて、他は悉くユダヤ人であつた、とは同博士の述懐である。

ジャズ音樂はアメリカ・インデアン敎化の任務にあつた白人宣敎師が、敎會で始めたものとされて居るが、一般化されたのは、ユダヤ人俗謠音樂家ユリアス・ウイッドマルク（Julias Widmark）によつてであつて、更に、イルビング・ベルリンデ（Irbing Berlinde）とロシア系のイズトア・ベルリナー（Iztor Berliner）といふ兩ユダヤ人によつて鼓吹され、ニューヨーク・ユダヤ人の後援によつて、今日の亂痴氣旺盛を極むるに至つたものである。

この音樂は阿片と同じで、人類が錯雜混迷の社會的乃至は經濟的現象に周章狼狽して、

殆ど精神病化しつゝあるに對し、享樂的刺戟を與へて一時一切を忘れしめ、この刺戟痲痺劑なくしては一日も生くる氣持の無いやうに差しむけるには役立つものらしいが、高尙なる傳統的國民性を毒することは、識者の等しく認むるものである。

グリフイス（David Wark Griffith, 1880—？）はケンタツキーに生まれた。新聞記者旅役者、職工等を經て、一九〇八年、脚本作家兼俳優として、ヴァイオグラフ社に入社し、後に監督となる。

彼はカット・ベック、クローズ・アップ等の手法を創始して、映畫の表現力を豐富にすると共に、劇的構成に留意して、今日に於ける藝術としての映畫劇の形體を完成した。作品としては、「國民の創生、イントレランス、世界の心、散り行く花、渇仰の舞姫、愛の花、東への道、嵐の孤兒、男女の戰」等がある。

スタンバーグ（Joseph von Sternberg, 1894—）はウインに生まれた。七歲のときに渡米し、ニューヨークで小學校を終へ、ベルリン大學に學び、再渡米した。

「救ひを求むる人々」によつて、チャップリンに認められ、一九二六年、メトロ・ゴールドウイン・メーヤース（M・G・M）社の監督となり、その後パラマウント社に轉じて、「暗黒街、最後の命令、非常線、女の一生、サンダーボルト、モロッコ、間諜X二七、上海特急」等を發表し、天分を發揮し、又ウーファ社に招かれて、「嘆きの天使」を製作し、トーキー映畫監督として異才を示した。

ルビッチ（Ernst Lubitch, 1892—）はドイツ系である。初めラインハルトの許で舞臺に立ち、一九一二年、喜劇俳優として映畫界に入り、後監督として一九二二年に渡米するまで、「パッション、ファラオ、カルメン、寵姫ズムルン、山猫リシュカ、ロジタ」等を作製し、渡米後は「結婚哲學、禁斷の樂園、愛國者」等を作り、トーキーとしては、「ラヴ・パレード、モンテ・カルロ、陽氣な中尉さん」を製作した。現在の最も才能ある映畫監督の一人として知られて居る。

ストローハイム（Erich von Stroheim, 1885—）はウインの貴族として、又アメリカ

の映畫監督兼俳優として知られて居る。

彼はウインの陸軍大學の出身であるが、軍人を廢めてから、新聞記者、劇作家等を經て、一九一四年、映畫界に入り、俳優、助監督、やがて監督となる。

監督として獨立後、「アルプス颪、愚なる妻、グリード、陽氣な後家さん、結婚行進曲」等を發表した。尙彼の映畫態度は嚴格な寫實主義である。

ファイト（Conrad Veidt, 1893—）はベルリンに生まれた。舞臺俳優を志願して、一九一二年、ラインハルト（Max Reinbardt, 1873—）のベルリン・ドイツ劇場に出演、一九一四年より一九一七年まで、歐洲大戰に出征し、凱旋後、再び復歸して、舞臺と映畫に出演し、性格俳優として重きをなした。

「カリガリ博士、ジキール博士とハイド、裏町の怪老窟、プラーグの大學生」等に出演したが、一九二八年、渡米して、「笑ふ男」に出演し、翌年歸國して、發聲映畫「最後の中隊」の主演をした。

フエアバンクス（Douglas Fairbanks, 1883—）はコロラド州生まれ、父は鑛山技師であつた。

一九〇一年よりニューヨークで舞臺生活を始め、一時ウォール街の株屋の店員にもなつたが、舞臺に復歸し、數年にして映畫界に入つた。

一九二〇年、メリー・ピックフォードと結婚し、チャップリン、グリフィス等と共にユナイテッド・アーティスツ社を組織し、自作を發表した。

主なる作品としては、「ダグラス大王、バグダッドの盗賊、奇傑ゾロ、三銃士、ロビンフッド、ドンQ、海賊、ガウチョウ、ジャジャ馬馴し」等があり、親日家である。

チャプリン（Charlie Spencer Chaplin, 1889—）はロンドンで生まれた。母はスペイン生まれの踊子、三歳で舞臺に立ち、八歳の時には歌劇團に雇はれ、一九〇五年、ロンドンのヨーク公劇場でシャーロック・ホルムズに出演した。翌年は英國で有名なカルノー喜劇團に加はり、一座と共に渡米した。

マック・セネットに見出され、一九一三年、キーストン社に入り、その後各社に轉じて、優秀な映畫數十本を作製した。その後ダグラス夫妻、グリフィス等とユナイテッド・アーテイスツ社を創立し、自身の原作、脚色、監督で「パリーの女性」、一九二五年には「黄金狂時代」を、一九二七年には「サーカス」を、一九二八年には「街の灯」等を完成した。その後、日本にも來遊し、天麩羅に舌鼓を打ち、藝者ガールのサーヴイスを喜んだ。

セネツト（Mack Sennett, 1884—）は俳優としてヴァイオグラフ社に入り、一九一二年、キーストン社を起し、二卷喜劇の黄金時代を作つた。指導した門下よりは映畫界一流の俳優監督等輩出し、映畫史上重要な人物となつた。

ピツクフオード（Mary Pickford. 1893—）はカナダのトレントに生まれた。初舞臺を踏んだのは五歳の時であつた。

グリフィスのヴァイオグラフ社に入り、その後一旦舞臺に歸り、再びラスキー社に招かれて映畫界に入り、今日に至る。

世界映畫ファンの戀人として一般的人氣を有し、フェィアバンクスの妻となつた。作品として、「嵐の國のテス、ロジク、雀、コケツト、ジヤジヤ馬馴らし」等がある。

ロイド (Harold Lloyd, 1894—) は貧困な生活を經て、映畫のエキストラとなり、ユニヴアーサル、エヂソン、キーストン諸會社を經て、喜劇俳優となり、一九一四年、ローチ(Hal E. Roach) と輕喜劇を作製して、パテー社から發賣した。

その後、ローチと別れ、パラマウント社を經て、作品を發表した。「ロイドの水兵、巨人征服、人氣者、危險大歡迎、足が第一」等がある。

キートン (Buster Keaton) は幼い頃から逆境に育ち、十六年間の舞臺經驗ののち、一九一七年、映畫界に入り、大いに努めたが惠まれなかつた。

歐洲を放浪して後、ファースト・ナショナル社 (First National) に入社、その後、各社に轉じて、現在では、M・G・Mのスターとなつて居る。

人を笑はせる彼が、自らは笑はない俳優なので、却つて有名になつた。作品として「忍

術キートン、キートンの大學生、キートンのエキストラ」等がある。

ガーメス（Lee Garmes）はアメリカの映畫撮影技師として知られた。

「姫君と給仕、トロイ情史、煩惱、彼の捕へし女、ゴンドラの唄、子守唄、モロッコ、戰ふ隊商、間諜X二七號、市街、アメリカの悲劇、女學生日記」等を撮影した。

人類の文化生活に於て、重要な役割りを受け持つ通信界に關しては、特記するの要もあるのだが、都合に依り、別項を設けず、この部門に併記することにする。

今日、世界の通信網もユダヤ人に握られたかの觀を呈して居るのは、世界有數の大通信社がユダヤ人の經營に係はるからである。

即ち、ロイテル男爵の社長たるロイテル通信社、ウォルフの社長たるウォルフ通信社、ハーストの率ゆるハースト系新聞社等がそれで、他に無數の新聞社、通信社が存在する。

ソヴエートの如きは、ロシア帝政時代にユダヤ人の創始に係はる社會主義の報道機關を國營とし、ユダヤ人をしてその經營運轉に當らしめて居る。タス、イズヴエスチア紙、プラ

ウダ紙の如きそれであるが、新しいものも全部例外なく彼等の掌握するところである。

ユダヤ人新聞記者、マキシミリアン・ハルデンが歐洲大戰當時、毒筆を揮つてカイザー・ヴイルヘルム（Friedrich Albert Wilhelm II., 1859—）を苦しめたことや、頭腦明晰を以て知られたニユーヨーク・タイムス社長アドルフ・フオツクス（Adolph Fox）が、ユダヤ人のアメリカ政界躍進に暗躍し、又アメリカ國內の輿論喚起に大きな力を持つことは、世界通信界に於ける彼等の地位を雄辯に語るものではあるまいか。

ロイテル（Paul Julius Reuter, 1821—1899）はドイツ系ユダヤ人である。

彼は初め銀行員となり、その後、獨立の資を得て、書店を經營した。一八四九年、パリーで石版刷の通信機關を經營し、更にアーヘン・ベルリン間の電信を利用して、盛に本國の新聞紙、銀行等にニユースを供給して、次第に信用を得、一八五一年にはロンドンに本據を移して、漸次各地に支社を增設し、今日ではその通信網殆んど全世界に及ぶ。

ハースト（William Bandolph Hearst, 1863—）。

彼は一八八二年より同八五年まで、ハーヴアート大學に學び、所謂ハースト系黄色新聞網を全國重要都市（ニューヨーク、サンフランシスコ、ロスアンジェルス、シカゴ、ボストン、ワシントン、ピッツバーグ、ウィスコンシン、シァトルその他）に張り、言論界を横行濶歩して居るが、その他、米國内で約十種、ロンドンで三種の世界的權威ある大雜誌を發行して居る。

一九〇三年より同七年まで、アメリカ民主黨の代議士となつた。

アツプルトン（Daniel Appleton, 1785—1814）はアメリカ有數の出版業者であつた。その子ウイリアム（William Henry, 1814—99）及びウイリアムの弟ジョン（John Adams, 1817—81）は協力して父の業を繼ぎ、大いに發展今日に至つた。その主なる出版物は、アメリカ百科全書（American Cyclopaedia, 毎年増補發行）、アメリカ傳記の百科全書（Cyclopaedia of American Biography、一八八七年創始）、北米とカナダのアツプルトン一般案内（Appleton's General Guide to U.S.A. and Canada）等がある。

ハルデン（Maximilian Harden, 1861—1926）は初めヴィトコウスキイ（Witkowski）を名乘つた。一八九二年、匿名の書、アポスタタ（Apostata）で、當時の政治及び一般文化を論じ、一世を驚嘆せしめた。

一八九二年、週間、未來（Die Zukunft）を創刊して、ビスマルクの知遇を得、その失脚するや、極力彼を辯護し、痛烈な諷刺でカプリヴィ（Leo Graf von Caprivi, 1831—99）首相を攻擊し、又、ズーデルマン（Hermann Sudermann, 1857—1928）にも攻擊の鋒を向け、更に皇帝ヴィルヘルム二世、特に嬖臣オイレンブルグ伯爵（Philipp Graf zu Eulenburg, 1847—1921）を彈劾して、之を失脚せしめた。

世界大戰の初期は帝國主義的見解を代表したが、漸次平和主義に傾き、後には極左的立場から、ブルジョア的共和主義を排擊するに至つた。多數の論文著述中、頭（Die Köpfe, 全四卷、一九一〇年から同二四年までに發行）が有名である。

倘、通信、言論界の問題は前記の政治と藝術の部を御參考ありたい。

五、科學的方面その他

この部門では、物理、化學、天文、地文、數學、法律、醫學、その他の學者を取扱つたことを豫め御承知ありたい。

既に文化とユダヤ人との關係は前に縷々述べたので、改めて茲に記すこともないから、直ちに科學者の根を掘つて見ることにする。

エディソン (Thomas Alva Edison, 1847—1931)。

發明王エディソンはオハイオ州のミランで生まれた。父はオランダ系ユダヤ人、母はスコツトランド系であつた。

少年時代をミシガン州のホート・ヒューロンに送り、小學校では低脳見扱ひをされたが、賢明な慈母の懇切な根氣のよい教育で、その長所を發揮することが出來るやうになつた。

彼は讀書を好んだ。十二歲の時、グランド・トラック線 (Grand Truck Line) の鐵道新

聞賣子をする傍ら、車中で化學の實驗等も始めた。次いで、中古印刷機を買ひ求め、グランド・トラック・ヘラルド (Grand Truck Herald) を發行した。之は列車中で印刷發行された世界最初のものであつた。

偶々或る驛長から、電信技術を習ふ機會を得たが、之が電氣に興味を持つ動機となつた。

一八六一年より同六八年まで、鐵道電信手として勤務し、その間、自働中繼機を發明しボストンのウエスタン・ユニオン電信局その他で、電信技師として在職中には投票記錄器を發明した。

又、一八七一年に印字電信機を、翌年に二重電信機を發明した。次いで四重及び六重電信機を完成した。更に、ベル (Alexander Graham Bell, 1847—1922, スコットランド系アメリカ發明家) の發明になる電話に暗示を得て、炭素送話器、擴聲器等を完成した。

一八七六年、蓄音機の發明に着手 (最初、蠟管の研究をし、後に圓盤を考案した) した。

一八七八年、微溫計器を案出した。翌年、協力者バッチエラー (Charles Batchelor)

と共に、日本の京都産の竹を心とした白熱電燈を完成し、又ゴム塗包装用テープを發明した。一八八五年、長距離無線電信の局部的特許を得、翌年、無線電信を進行中の列車に實驗し、レーハイ山間鐵道に實施した。

一八八八年、蓄音機の改良に志し、翌八九年には第二回渡歐、一八九〇年、卑金屬鑛石の經濟產業化の目的で、大規模の發掘作業を試み、日產一〇〇〇バレルのセメント工場建設に着手した。一八九三年、活動寫眞の發明完成。一八九五年、X光線の實驗中、透視鏡を發明完成した。現今の外科醫學の實用に貢獻したこの發明は偉大なものであつた。

一九〇〇年、エディソン蓄電池を發明し、一九一二年には現在のトーキーの前身ともいふべきキネトフオンを紹介した。一九一六年に民間事業を引退して、海軍顧問として專ら研究發明に從事した。

一九二七年に蓄音機發明五十年祭、一九二九年に電燈發明五十年祭行はれ、晩年はゴム代用植物の研究に身を捧げて居た。

ヘルツ (Heinrich Rudolph Hertz, 1857—94) はドイツの物理學者であり、ヘルツ光線の發見者である。

一八八三年、キール大學理論物理學の私講師 (Privat Dozent) となり、一八八五年、カールスルーエ工業大學の物理學敎授、次いで一八八九年、ボン大學の物理學敎授となり、死ぬまで在職した。

一八八八年、電氣振動から起る電氣波、磁氣波の存在を確め、且つ之等の波が全く光波と同一性質を有することを實證し、マックスウエル (James Maxwell, 1831—79, 英國の物理學者) の電磁光學に確固たる實驗的根據を與へた。又ヘルツ力學を創設した。

ハーバー (Fritz Haber, 1868—) はドイツの化學者である。

彼は明治七年、函館駐在ドイツ領事として赴任、市內を散策中、舊秋田藩士田崎秀親に刺殺されたルードヴィヒ・ハーバー (Ludwig Haber, 1843—74) の甥である。ブレスラウで生まれた。

ベルリン、ハイデルベルヒ、ブレスラウの諸大學で學び、カールスルーエ大學に職を奉じ、累進して教授となつた。在職中、氣體の反應に關する多くの研究を殘した。その工業的應用なる空中窒素固定法はハーバー法として有名であり、大戰中はドイツ軍の火藥製造に大いに用ゐられた。

一九一一年以後、カイザー・ウィルヘルム研究所の物理化學及び電氣化學部長、兼ベルリン大學教授を拜命、一九一八年、ノーベル賞を受けた。

一九二四年、日本へ渡來、伯父の展墓をなし、歸國後、日獨文化提携のため、ベルリンに日本學院、東京に日獨文化協會の設立を提唱し、その實現に盡力した。

アインシユタイン（Albert Einstein, 1879—） は理論物理學者として世界的存在であり、南ドイツのウルム市で生まれた。

スイスのチユーリッヒ工科大學に學び、ベルンの特許局技師に任用された。一九〇五年に特殊相對性原理を發表し、俄然學界注目の的となつた。

同年、ブラウン（Ernest Willian Brown, 1866—，アメリカの天文學者）運動に就て、氣體動力說的硏究をなし、分子物理學に新生面を展いた。又、光學效果について、プランク（Max Planck, 1858—，ドイツの理論物理學者）の量子假說を應用し、更に獨創的な光量子說を導いた。

その後、プラーグ、チユーリッヒ大學敎授更に一九一四年、ベルリン大學に招かれて敎授となり、又カイザー・ヴィルヘルム硏究所物理部長となる。

一九一三年より同一六年までに、一般相對性原理を完成し、一九一九年、それが英國の日蝕觀測隊に實認せられ、世界的に有名になつた。一九二一年にはノーベル賞を授與され一九二九年には、相對性原理を擴張して、動力、電磁力一切を含む理論を發表し、光量子說の外、物質波動說の發達に貢獻した。

彼はヴァイオリンの名手で且つヨットの愛好者であることは、科學者には珍らしいこととされて居る。近年、ユダヤ人なるが故に、ナチス・ドイツを追はれ、アメリカに轉住す

るに至つたことは、世界學界の同情者達にいたく惜しまれて居る。

アブラハム（Max Abraham, 1875—1916）はドイツの理論物理學者として知られて居るが、ミュンヘン大學の教授として、電氣學理論研究に沒頭し、その方面の權威者として認められて居る。

シユヴアルツシルド（Karl Schwarzschild, 1873—1916）はドイツの數理學者である。彼はフランクフルト・アムマインで生まれた。ゼーリガー（Hugo von Seeliger, 1848—, ドイツの天文學者）の門下である。一九〇一年、ゲッチンゲン大學教授兼天文臺長、一九〇九年、ポッツダム天體物理學觀測所長となる。

その業蹟は星の寫眞的光度の研究、太陽の輻射平衡論及び恒星運動に於ける楕圓體分布の假說である。その他、數學、理論物理學の幾多論文あり。

ガリレイ（Galileo Galilei, 1564—1642）はイタリアの物理學者、天文學者、哲學者である。ピサに生まれた。

十八歳の時、ピサの大學に入り醫學を學んだ。この頃ピサの寺院の吊燈を見て、振動の等時性を發見した。一五八三年、初めてユークリッド（Euclid of Alexandria, 紀元前三〇〇年頃のギリシアの數學者）を學んで大いに熱中し、二十一歳のとき、フィレンツエの父の家にピサから移つた。それから良師を得て、アルキメデス（Arkhimedes, 287—212 ギリシアの數學者）を學んだ。

一五八九年、ピサ大學數學敎授となり、ピサの斜塔で有名な落體の實驗をなしアリストテレス（Aristoteles, 前 384—322、ギリシヤの大哲學者）力學の誤謬を實證した。然るに二年後スコラ派の反對に遭ひ、ピサを去らねばならなかつた。

一五九二年、パドヴァ大學の數學敎授となり、在職十八年間にして、名聲全歐洲に響き敎を乞ふ者門前に市をなした。

一六〇九年、望遠鏡の發明あり、之を天體研究に利用して種々發見し、一六一〇年に木星の衞星を發見し、コペルニクス（Nicholas Copernicus, 1473—1543, ポーランドの天

文學者）の宇宙論に實證を與へた。爾來研究を續行した。そして近世自然科學の祖となつた。

その最大の功績は科學研究として、普遍的數學的法則の定立、即ち綜合的方法（Metodo Compositivo）と經驗的事實の數量的分析即ち分析的方法（Metodo Risolutivo）とを說くことに依て、科學の方法を確定し、その理想を明確にした點にある。自然科學への道を自然哲學より導いた努力は特筆大書すべき人類文化への貢獻であつた。

カプタイン（Jacob Cornelius Kapteyn, 1851—1922）はオランダの天文學者として知られた。

一八七五年、ライデン天文臺に入り、一八七八年より一九二一年まで、フロニンヘン大學教授として研究に從事した。

ギル（Sir David Gill, 1843—1914, 英國の天文學者、ユダヤ系）が喜望峰天文臺で、南天の恒星の位置を觀測するや、之と協同して南天の恒星表を完成した。又恒星の固有運

動の研究から、恒星界の二大星流を發見し、恒星宇宙の構造に對し、最も進步した概念を與へた。

オーム (Georg Simon Ohm, 1787—1854) はドイツの物理學者である、金屬線の電氣傳導を測り、その電氣抵抗は針金の長さに正比例し、斷面積に逆比例することを見出したのは、一八二六年のことで、オームの法則として、電氣學上の原理となつて居る。

シユヴアーベ (Samuel Heinrich Schwabe, 1789—1875) はドイツの天文學者、趣味から入つて植物學と天文學とを研究したが、太陽の觀測を長年月繼續し、一八四三年、太陽黑點の出現が約十年を週期として消長することを發見した。

リリエンタール (Lilienthal) は飛行機の發明者として有名である。

コルト (Samuel Colt, 1814—62) はアメリカの發明家である。一八二七年、水夫となり、一八三二年頃まで、アメリカの殆ど全部を旅行し、化學の講演をして資金を得、發明を遂行した。

一八三五年、連發拳銃の專賣特許を得、メキシコ戰爭後に、合衆國軍兵器に採用され、その後世界的に用ひられるに至つた。彼は故郷コネクチカットの生地に二百五十萬ドル以上の巨費を投じて、廣大な造兵廠を建設した。

ウエルナー（Abraham Gottlof Werner, 1750—1817）はドイツの地質學の開祖とも稱すべき鑛物學者であり、地質學者である。

ミンコフスキー（Minkovskii）は數の原理學者である。

ザメンホフ（Lazarus Ludwig Zamenhof, 1859—1917）はポーランドの醫學博士であつた。

一八八七年、國際語エスペラント（Esperanto 希望者の意）を創案し、語學に苦しむ人々に數學的人造語を宣傳し、現在、全世界に數百萬のエスペランティストを得るに至つた。

その動機は、被征服國の悲慘なる語學教習の苦心に同情し、各國語の語幹を對比して、

それに簡單なる語尾乃至は語頭に一定の接頭語乃至は接尾語を添加し、語尾變化による簡にして要領を得た統一文法を案出した。本業はワルソウの一眼科醫であつた。

アスコリ（Ascoli）はイタリイの有名な言語學者であつた。

ウイルクス（Sir Samuel Wilks, 1824—1911）は英國の醫師である。内臓黴毒を研究、變形性骨炎、その他に關する研究等をもなした。

ワイダル（Georges Fernand Isidore Wildal, 1862—1929）はフランスの黴菌學者である。一八九五年、パリー大學教授、ワイダル氏反應の提唱者である。

エーアリッヒ（Paul Ehrlich, 1854—1915）はストラスブルグに學び、一八七八年、ベルリンでフレリッヒス（Friedrich Theodor von Frerichs, 1819—85, 實驗病理學創立者の一人）の助手となり、一八九〇年、傳染病研究所員、一八九五年にはステグリッツ血清研究所長となる。

一八九九年、フランクフルト・アム・マイン實驗治療所長並に科學治療所長となつた。一

九〇一年から、惡性腫瘍の研究及び傳染病の科學的療法に專心、一九〇九年、日本の秦佐八郎と共に、サルヴァルサン（六〇六號）を創製した。

一九〇八年、メチニコフ（Ilia Metchnikov, 1845—1916, ロシアの生物學者）と共に、ノーベル賞を授與された。

ナイッサー（Albert Ludwig Siegmund Neisser, 1855—1916）は淋菌發見者である。

彼はブレスラウ、エルランゲン等に學び、一八七七年學位を得た。一八七九年、淋疾患者の排泄膿中に或種球菌の存在を初めて證明した。一八八〇年、ライプチッヒ大學講師、一八八二年にはブレスラウ大學に、又一八九六年にはベルリン大學で各々皮膚科教授となつた。

一九〇二年、ドイツ性病豫防協會を設立した。一九〇五年にはジヤヴアへ旅行して、猿に黴毒の發病し得る條件を研究し、歸國後、ノールウエー、スペインへ癩病の研究に赴いた。

ヴァッセルマン (August von Wassermann, 1866—1925) はエルランゲン、ウイン、ミュンヘン、ストラスブルグ諸大學に學び、一八九一年、ベルリン傳染病研究所員となり、一九〇六年には同所の部長、一九一三年にはダレムのカイザー・ヴィルヘルム研究所實驗治療部主任となり、一九〇六年、黴毒血清診斷のヴァッセルマン反應を公表し、弘く用ゐらるゝに至つた。

フランケ (Erancke) はドイツの肺炎球菌の研究者として知られて居る。

サルモン (Daniel Elmer Salmon, 1850—1914) はアメリカの獸醫として知名である。彼はニューヨーク州立獸醫學校出身で、家畜の疾病殊に傳染病の研究及び防遏に努力した。

一八八四年、農務省に畜産局が設置されると、初代局長に任ぜられ、一九〇五年退職した。その間人畜衞生上並に畜産の發達上に貢獻するところ甚だ大である。

ロムブローゾ (Cesare Lombroso, 1836—1909) はイタリアの精神病學者であり、刑事

人類學の創立者であつた。

トリノ、パヴイア、ヴインの諸大學で學び、一八六七年パヴイア大學の精神病學の教授となつた。一八七一年にはペザロ精神病院長、一八七六年よりトリノ大學精神病學、法醫學教授、後に、彼のため特に設けられた刑事人類學の講座に轉じ、犯罪の原因は發展停止狀態の隔世遺傳として、或は癲癇性精神病として現はれる神經中樞の器質的異常に基き、從的には骨系に於て認め得ることを說き、生來性犯罪者の考へを述べ、十七世紀以來の刑事學上の定說であつた罪刑法定主義を變じて、罪刑個別化主義となす根據を與へた。

又、天才と精神病者との類似點を述べ、倫理學、教育學にも影響を與へた。一方、イタリア農民を惱ますペラグラ病に關する業蹟もある。

イエリネク（Georg Jellinek, 1851—1911）はライプチッヒに生まれた公法學者であるウイン、ハイデルベルヒ、ライプチッヒの諸大學で研究の後、オーストリアの行政官となり、一八八三年、ウイン大學教授、一八八九年、ベーゼル大學教授、一八九一年、ハイデ

ルベルヒ大學教授となつた。

彼は自由主義的思想を骨子として、歴史と哲學とを綜合して、新國家理論を建設した。特に國家に關し、社會的存在としての性質及び法律上の權利主體としての意義の二面あることを明かにした點で有名である。

アードルフ・イエリネク（Adolf Jellinek, 1821—93）はゲオルグの父で、タルムード學の貢獻者であり、說教家であつた。

ヴアルター・イエリネク（Walter Jellinek, 1885—）はアードルフの孫、ゲオルグの子にして、キール大學公法學教授である。

ガンス（Eduard Gans, 1798—1838）はベルリンで生まれた。

一八一六年、ベルリン大學に學び、一八一八年、ヘーゲルを慕つて、暫時ハイデルベルヒ大學に學び、ヘーゲル及びテイボーの深い影響を受けた。

一八二〇年、ベルリン大學に就任し、一八二五年、キリスト教への改宗と共に、その員

外敎授、次いで一八二八年には法律學の正敎授となつた。

ヘーゲルの門下としての生涯は、歷史的法律學派に對するヘーゲル的立場からの攻擊と批判とに終始した。歷史的法律學派がプフタに於てヘーゲル的傾向を示したのは、ガンストとの論爭を通じての、ヘーゲルの影響の結果である。多數の著あり。

フランク (Adolphe Franck, 1809—93) はリオクールで生まれた。彼の兩親は共にユダヤ人であつた。

彼はナンシー、ツールーズに學び、パリーの Collège Charlemagne の哲學敎授となりアンスティチュート (Institute) の會員に推薦され、Collège de France の古典語敎授となつた。その後、自然法及び國際法敎授となつた。ユダヤの哲學に通じ、一八四三年にラ・カバール (La Kabbale) を著した。編輯した雜誌や著書が多數ある。

右の外、法學者として、フランスのレオンカーン (Lèon Cahn)、ドイツのゲアリング (Gering)、オーストリアのヨゼフ・ウンゲル (Joseph Unger)、オランダのトビアス・

アスサー（Tobias Asser）、ニューヨークの高等法院判事にして法學者たるダヴィッド（David）等がある。

右は單なる一例に過ぎないものである。一々之を擧げるとすれば、限りある紙面には收容し切れないので、一流の而も代表的人物を列擧したものであることを御諒承願ひたい。

それでこのユダヤ人物論に關しては、近い時機に更に研究の結果を増補公表することを約束するものである。

第三章　パレスタイン問題

去る十月十八日のロンドン電報は、各國を繞る利害關係の衝突から、國際政局が俄然危機を姙みつゝあることを傳へて居る。

卽ち、スペイン問題を中心として、久しい間暗雲低迷して居た國際政局を憂ふる歐洲各國は、難局打開の途を求めて、頻りに暗中模索を續け、不干渉委員會に一縷の望みをかけて居たが、不干渉委員會自體も期待に反して、ヨーロッパ政局を安定せしむることの出來ない內容が曝露され、十月十八日以來、ヨーロッパの情勢は頓に險惡化し、新しい危機に直面して、今後の推移は重大視されて居る。

この惡化の原因として掲げられた三つの問題の第一に、パレスタイン問題が取り上げら

れて居る。即ち、パレスタインに於けるアラビア民族の騒擾は、英國の手を燒いて居る問題であるが、その裏面にはイタリーの首相ムッソリーニが、私かに之を支持して居るものとなし、英國の對伊感情がソヴエートのそれよりも、著しく惡化の一途をたどり、兩國の關係は緊張險惡の極にある、となすものである。

パレスタイン（Palestine）がユダヤ民族の憧れの地であることは、今更いふまでも無いことであるが、併し、彼等がパレスタインを聖地として居ると同樣に、マホメット敎徒も、且又キリスト敎徒も、その宗敎的地域確保の主張を持つて居る。

只ユダヤ人達は他の何れの國民よりも、最も熾烈なる欲求を持つて居ることは、拒めない事實である。その證左には、彼等が有爲轉變の境地に在り乍ら、昔から絕えずパレスタインの奪還に努力したことである。

歷史に見える大きな叛亂は三つあるが、その第一は、紀元前一七〇年に、ユダヤの楠公と謳はれる忠臣マタテアス・マッカベース（Matateas Maccabees）の起したもので、異

教の王に從ひて生きんよりは、神に從ひて死なんとて、同族を率ゐて奮戰力鬪し、遂に紀元前一六六年には、一時シリア（Syria）王アンティオチュス・エピフアーネス（Antiochus Epiphanes）の羈絆を脱した程であつた。

第二回目は紀元前七〇年のシモン（Simon）の叛亂で、この場合もローマ皇帝ウエスパシアヌス（Litus Flavius Vespasianus, 9—79）が親兵を率ゐて攻撃し漸く之を鎭定しだ。

第三回目は一三五年、ローマ皇帝ハドリアヌス（Publius Aelius Hadrianus, 76—138）がその植民政策遂行のため、イエルサレム附近（Jerusalem）に、ローマ人を移住させ、ユダヤ人には重税を課し且つイエルサレム市內に住居することを嚴禁したために、コジバ（Coziba）の起した叛亂であつた。

この三回目の叛亂を卓尾として、ユダヤ民族は集團結束の場所を失ひ、漸次離散して、轉々流浪の旅をするやうになつたものである。勿論この後と雖も小さな叛亂は絕えず繰り返されたものであつた。

その後も幾度かパレスタインの奪還を策し、又幾度かその失敗を嘆いたことであらう。彼等は止むなく、凡ゆる手段を總動員して、神政大ユダヤ國の復興を夢にも忘れやうとはしない。

試みに世界史を繙くも、戰爭、騷擾、革命、暗殺等一としてユダヤ人の無關係なものは無い。この問題は次章で詳說するから、省略するが、ユダヤ民族が救世主の再來近きを確信し、ユダヤ再神政のための世界最終戰たるハルマゲドン（Halmagedon）の戰が、彼の歐洲大戰を以て、その前哨戰を開始せるものと宣言したことを見逃してはならない。

彼等は始めメソポタミヤ地方（Mesopotamia）に住んで居たが、この地方の諸民族は偶像崇拜の多神敎徒であつたところから、ユダヤ人に對する壓迫が漸く猛烈となるに及んで、遂に耐え切れなくなつた彼等は、ユダヤ民族の首長アブラハム（Abraham）の決意のもとに、西曆紀元前二〇〇〇年の頃（今を距る四千年も前のこと）、全民族を率ゐてユーフラテス（Euphrates）河を渡り、安住の地を求めて、遊牧流浪の旅を續けながら西方へ大移動

し、たどり着いたのが日月星辰を神とするバール教徒の住むカナーン（Canaan、この名稱はハムの第四子カナーンに出で、聖書では此地をヤコブ Jacob の名に從てイスラエル Israel の地とし、又神が此地をアブラハム Abraham とその子孫に與へる約束をしたとある）の地即ちパレスタイン（Palestine）であつた。

即ち、彼等がこの地へ着いたときは此地の先住民にとつては流浪の外來者に過ぎなかつた。彼等は此所も決して安住の地とはなり得なかつた。それは彼等の傳統的信仰は先住民の信仰と相容れず、早くも信仰的嫌惡の情は忽ちにして迫害爭鬪の絶え間ない日を送らねばならなかつた。

由是觀之、彼等の歳史的經路は流浪漂泊を續けなければならない運命を負はされたかに見える。

斯くして、此地に對するユダヤ人の感情は遂に離るべからざるものとなつたのである。

歐洲大戰の折、ユダヤ人ワイツマン博士（Dr. Weitzman）は新火藥を發明して、英國

に終局の勝利を與へた。そこで英國皇帝は彼の功勞に報ひやうとして、彼の欲する物を與へ樣と告げられたが、彼は只——吾欲する何物もなし、若し陛下にして賞せられなば、只ユダヤ人にパレスタインの地を與へかし——と答へた話は未だ耳新しいことである。

又、英國政府がユダヤ人の慘狀を救濟しやうとして、東アフリカのウガンダ地方に、一安住地帶を與へやうとしたが、ユダヤ民族主義者達（Zionista）は「我等は祖國パレスタイン以外寸尺の地を欲せず」と、此の好意を固辭して受けなかつた。

大正十二年四月に、前記新火藥の發明者でパレスタイン回復の熱烈な運動者として知られた世界ユダヤ民族主義運動團長、英國系ユダヤ人ワイツマン博士の渡米歡迎會席上、米國上院議員、米系ユダヤ人ハミルトン・フィツシュ（Hamilton Fish）が述べた歡迎の辭の一節に——余はエルサレム並びに聖堂が速かに復興せられ、新國際聯盟用の殿堂たらんことを切望して止まぬ。而もこのことは空想ではなくて必らず近い日に實現されるであらうことを確信する。何となればパレスタインこそは東西兩洋の交渉地帶だからである——

とある。

又一九二〇年七月十二日、前英國々際聯盟大臣ロバート・セシル（Sir Robert Cecil）卿がロンドンのアルバート會館での演說の一節に――世界大戰史が世の公正なる歷史家の筆にものされるならば、ユダヤ國樹立と國際聯盟樹立の問題がその二大偉業として大書されるであらうことを、私は信ずるものである――とある。

以て如何に彼等がパレスタインに執着して居るかが判明する。

英國がパレスタインを委任統治するやうになつた直前、パレスタインの人口中、アラビヤ人五十萬人、キリスト教徒十萬人、ユダヤ人八萬人であつたが、英國の委任統治領となりパレスタインが實際上ユダヤ人に解放されたにも拘はらず、雀躍して我も我もと押し掛けるものと思ひの外、一九二四年までに歸國した者は僅に二萬人に過ぎなかつたことは、彼等の日頃の熱望に反し、更に不可思議なことである。

而も米國へは年々十萬人を移住しつゝあるユダヤ民族が、終始一貫パレスタインの奪還

を絶叫する彼等の二萬は矛盾そのものである。

彼等は、パレスタインが彼等發生の地なりと信じて、此所を精神的據點とすることが出來れば、それでもうよいといふのであらうか？　といふのは、彼等の住む天地は依然世界であり、その野心はユダヤ神政による世界征服だからである。

パレスタインはその面積百萬方哩で、二百萬人を養ふに足りない。それ故、若し全アラビヤ人、キリスト教徒を他に移して、ユダヤ人を代らしめても、ユダヤ全民族の十分の一を容れるにも足りないことが判然として居る。

兎も角、パレスタインは今日ユダヤ民族と交渉を持つ各國の忘るべからざる題目となつて終つた。

今夏デムマルクに開催された國際會議の議題にも、このパレスタイン問題が出て居るが、筆者は特に英國王立史學協會々員マスター・オヴ・アーツ・ヘロルド・エフ・ビング（M. A. Harold F. Bing）の發表せる「パレスタイン問題 The Problem of Palestine」の全文

を掲げて讀者の參考に供する。（この著述は今年發表のものである）即——（本書表紙裏地圖參照）

(二)戰略上の重要性を持つパレスタイン

パレスタインは戰略上、非常に重大な地位を占めて居るといふことが出來る。といふのは、パレスタインは古い歴史を持つ世界の三大陸卽ちヨーロッパ、アジア、アフリカの會合點だからである。

此所は太古から最大なる國際公道の交叉點であつた。隨つてそこは各々相違した文化が互ひに相交錯し、混合した場所の一つなのだ。

ジヨルダン河とインド洋との間に橫はる非常に大きな砂漠地帶の際に在る比較的肥沃なこの土地は、折々食糧の缺乏を來たした膨脹せる砂漠民族に侵入され、且つ占領されたものであつた。ユダヤ及びアラブ兩民族はこんな具合でパレスタインに來たものであつた。

又パレスタインは世界の三大宗教たるユダヤ教、クリスト教及びモハメッド教の聖地である。

現在に於てはスエズ運河が東西を結ぶ公道として出來て以來、パレスタインは頓にその戰略的重要性を增大した。

この公道の管理如何は大英帝國の凡ゆるものに重大なる影響を與ふるものである。

それが大英帝國の生命線（ヴァイタル・コード）として說かれる所以のものは、英帝國の領土、人口、富源の大部分はインドとこれに相隣接する地に存するからなのである。

それ故、英國對外政策の基點は長い間この道の支配を持續すること、或は少くともそれを脅威する他の大きな力の存しない樣に確保することであつた。

英國のクリミヤ戰爭に於ける參加が、エヂプトの占領、又アビシニヤに於けるイタリーの侵入等に對する態度といふものは、すべて大いに此の理由によつてであつたことを明にするものである。

(二) ユダヤ人、アラビヤ人及びトルコ人

キリスト教時代の始め頃は、パレスタインはローマ帝國の一地方であつた。既に此頃はユダヤ人の離散（ディアスポーラ）が始まつて居たが、キリスト時代から一世代後の頃、ローマの支配を脱しやうとして起した謀叛は、イエルサレムを破滅に導き、ユダヤ住民の離散に一層の拍車をかけた結果になつた。

マホメット教擴張の最初の時代であつた第七世紀にアラビヤ人は此の國を占領して、比較的高い文明を樹てた。

更に十一世紀に至つて、此地はトルコ人に征服され、歐洲大戰まで依然トルコ帝國の一部として殘されたものである。

然し乍ら、そこはトルコ人による外延的占領ではなかつた。

パレスタインは地方自治の一定の制限を命ぜられ乍らも、トルコ官吏によつて統治され

た、アラビヤ人の一地方として、殘されて居たものである。勿論トルコの統治なるものも御多分に洩れず屢々專横にして、壓制的なものであつた。
パレスタインの狀態といふものは、トルコ帝國隣接の諸地方が皆さうであつた樣に、少からぬ餘地を殘した極めて原始的なものであつた。
疑ひもなく、トルコの統治は文化の高揚發達に好意あつたものとは思へない。
然し乍ら、他方パレスタインは西方ヨーロッパの大部分と比較すれば、素晴らしくはないが、古代から砂漠から來た民族に「牛乳と蜂蜜の溢れた土地」と呼ばれた樣に、ジョルダン河の東方の國々と比較すると肥沃な地方である。
多くの國々は山地乃至は半砂漠地であつて、これが灌漑作業には資本と勞働の莫大な經費を要するであらう。そうした所で、一定の生活標準でどし〳〵殖えて來る人口の生活を支へやうとするには集約的農業の近代的な科學的方法に賴らねばならぬのである。
然るにアラビヤ人の耕作方法は現在も昔同樣極めて原始的なものであるが、この遊牧的

田園生活と單純な農業とで住民を支へて居るのである。又鑛物資源の缺乏は產業の發達を制限して居る。

アラビヤ人の諸侯や酋長達は富裕で强力であるが、之と反對に農民達や勞働者達(フェラーエーン)は大部分困窮して生活して居ることは事實である。

酋長と農民間の關係は封建的性質を帶びたものである。

(三) パレスタインに於ける英國の目的

二十世紀に於ける英本國と現在の自治領土との間の係累が解かれて、主體を內地に依存する帝國の一部分(特にインド)の經濟的重要性を增大したのである。

それで、英國の對外政策の目標たる、東方への公道支配問題が益々永久的のものとなつた。

此故にバグダッド鐵道やその他の歐洲大戰前近東に於けるドイツ發展の諸計畫に對し、

英國は猛烈な反對を唱へたものである。
それ故聯合國特に英國は世界戰爭に於てその近東政策の目標を、ドイツ勢力の絕滅と少からずベルリンの政策に追從して居たトルコ勢力の瓦解とに置いたのであつた。是等の目標を追ふて、全く兩立出來なかつた幾多の妨害工事が互に入り亂れて行はれたのであつた。

その當時、パレスタインの住民の九十三パーセントはアラビヤ人であつた。そして英國政府は英國の對トルコ戰には、彼等が英國を援助してトルコに反擊を加へるといふことを條件として、アラビヤ人に自治を許すといふ尤もらしい約束をしたのである。

當時エジプトに於ける英國の最高委員たるサー・ヘンリー・マックマホーン（Sir Henry MacMahon）は一九一五年十月二十四日に、メッカのシヤリフに宛てた書狀を出して、特に英國政府はアラビヤ諸國の獨立を誓約して居る。

たとひ此誓約を履行したとしても、英國政府は近東に於けるヨーロッパ最高の勢力を期

待し得た筈である。

一九一六年の春に、英、佛、露三國は「各自の勢力地帶と領土取得」に關して協約をなした。

然るにこの協約によつて、フランスはシリヤと他の領土を獲、英國はベグダッドと一緒にメソポタミヤの南部及びシリヤではハイファとアッカの開港場を獲得することになつた協約の他の適切な割當は次の樣なものである――

佛、英間の協約によつて、佛英領土間の地帶はアラビヤ人諸國乃至は一の獨立せるアラビヤ人國の聯合を形成する。勢力範圍も同時に限定される。

協商國諸勢力の宗教的權利を得る目的で、パレスタインは聖地と共に、露、佛、英協約によつて決定されべき特別制度に支配を受け、トルコ領土から分離さるべきこと――といつた樣なものである。

(四)　ユダヤ國民主義者の熱望

さうかうしてる間に、更に新しい紛糾が發生した。それはパレスタインが全世界ユダヤ人團體の會員間に盛んに强調されつゝあつた民族意識の對象となつて居たことであつた。十九及び二十世紀に於けるナショナリズムの勃興は、ユダヤ人にも影響を與へずには居らなかつた。然し乍らナショナリズムなるものは國土を度外視しては、その實行化が甚だ困難なものである。

ユダヤ人は斯る要素たるべき領土的本國を持たなかつた。そこでユダヤ國民主義者(ザイオニスト)が彼等同胞の祖先の地たる「パレスタインに注目せよ」と絶叫するに至つたのも無理からぬことである。

彼等の公表せるプログラムの中に次の如き一節がある。「ユダヤ國民主義者の團體は公然法律上保證されたパレスタインにユダヤ人の本國を請ひ求める……」と

事實、世界各國に散在するユダヤ人の大部分は、彼等自身の國を樹てる願望に對して、特別の理由を與へらるものであると思はれるほど、政治的且つ宗敎的迫害又は社會的追放を强ひられて來たのである。

全ユダヤ人に一の本國も與へないといふのは、ユダヤ人の國民性に對する反感からでもあつたが、そうしたことから小數のユダヤ人は多分迫害される地位に立たされたものと思ふ。

小規模ではあるが、ユダヤ人は彼等の放逐あつて以來、常にパレスタインに歸還しつゝあつた。又ザイオニストの影響下に、移民が奬勵されたが、未だ微々たるものであつた。パレスタインに落付いたユダヤ人は近隣のアラビヤ人と親善關係を結んだが、諸情勢が萬事トルコの支配下にあつては盛んなる移民は歡迎されなかつた。とは云ふもののトルコ政府はザイオニズム（Zionism）（世界に散在するユダヤ人に中心を與へ、彼等をパレスタインに復歸せしめんとする主張を持つユダヤ國民主義）には同情的興味を示した。

英國政府は代りとしてウガンダ（註、アフリカ第一の高地東部アフリカの赤道直下の英領植民地、ウガンダ人は土人中最も發達し、綿、コーヒー、皮革、砂糖、護謨、ココア、落花生、銅、金等を主産とする。政治上五地方に分れ、英國駐在官はエンテッベに在り、メンゴ・カムパラが首府である。ケニヤと隣り共に富裕な植民地である）をユダヤ人に提供するといふ興味深い厚意を示した。然しこの事は失敗であつた。

一九一四年まで、パレスタインのユダヤ人は僅か住民の五パーセントを增加したに過ぎなかつた。而してこの國に於けるユダヤ國家建設は未だ實現不可能の夢と思はれた。ともあれ、坩堝の中に在る近東の凡ゆる政治的將來と共に、新しき事態が赤裸に曝露された。

（五）バルフオア宣言（The Balfour Declaration）

一九一七年の初期は聯合軍にとつては、大戰中での最暗黑時代の一つであつた。といふ

のは、フランス軍では度々重大な上官抵抗暴動が惹起するし、イタリー軍は敗走の實際であつたし、ロシヤは革命の產氣に苦しみ、アメリカの協力は漸く始められたばかりの時であつたから。

〔註〕大正五年にはシンガポールで印度兵の叛亂があり、執政官司法官等殺害され、重大危機に到らんとし日本義勇兵の御蔭で英國は救はれた。此種領土の叛亂は各地に起つたのだが英國は秘して其眞相を傳へないことは怪しからんことだ。

斯る情勢下に、時の英國總理大臣ロイド・ジョージ氏が下院に於て述べた樣に、英國政府は世界中のユダヤ人團體の援助を受くる必要に迫られて居たといふ結論に到達したのであつた。斯くしてバルフォア宣言が生まれたものである。

〔註〕一九一七年十一月二日、佛、伊、英三國政府を始め、英、佛、露三國のシオン國代表等は約九ケ月に亙る論議の上、アーサー・ジエームス・バルフオアをしてユダヤ人ロートシルド卿（英國）及びシオン團本部に手交せる宣言文であつた。

（これは一九三六年六月十一日にロイド・ジョージ氏が英國下院でなしたバルフォア宣

言の起原に關する說明であつた。けれどもその正否は疑問とされた）。これが戰後パレスタインにユダヤ人國家を建てることを、英國政府に依つて保證された樣になつたので、既にアラビヤ人となされた約束とは明かに矛盾扺觸したことであつた。

然し乍らその文言は不分明なものであつて、非ユダヤ人團體の公平なる判斷の留保は既にアラビヤ人になされた約束を庇護する樣支持することも出來るであらう。

宣言の形式は次の如きものであつた——

「陛下の政府を代表し、余はユダヤ・シオン團が曩きに陳情せる要望は內閣に於て同意するところとなりたることを、貴下に傳達するの光榮を有す。英國皇帝陛下の政府はユダヤ人民のためパレスタインに國家を建設することを好意と共に考慮する。而して此目的の達成を容易ならしめんが爲最善の努力を拂ふであらう。そはパレスタインに現住する非ユダヤ人諸團體の市民權並びに宗敎的權利或は諸外國に居住するユダヤ人の享受する權利並びに政治的地位を少しも偏頗なる處置に出でざることを明らかにするものである、余は貴

下が此宣言をシオン國に通報あらんことを切望するものなり」

（註）バルフオア宣言が公表されて五週間目に、即ち一九一七年十二月十日のユダヤ修殿節に、イギリスのアレンビー將軍の率ゆる軍隊がエルサレムを開城せしめたが、このアレンビー將軍麾下にユダヤ人聯隊が參加して居た。

ユダヤ國民主義者が「ユダヤ人民の國家としてのパレスタインの建替」なる成句を必要として居たことを注意せねばなるまい。然し英國政府は、單に「現在の非ユダヤ住民」として指示された此地の住民の十分ノ九以上を構成するアラビヤ人に對し、すべてを留保しつゝあるのに、ユダヤ人にはすべてを與へる樣に見える上記の語句に對し、何れにも矛盾なく固く約束を守らうといふのだ。（註、凡そ不可能なことを敢てし、自己滿足の解釋を與へてその矛盾を忘れんとする、所謂僞善紳士國たるの證左之より大なるはない）。

（註）一九二〇年四月バルフオア宣言批准發表の日、サンレモ首相會議に出席せるユダヤ人ワイツマン博士は同族アインシユタイン、レウイン、モシンソーン三博士及びシオン國副團長なるロシヤのウシシキン博士と共に、英首相ロイド・ジヨーヂと會談の節、首相が、吾等は今諸君にスタートを

贈物とせり、走ることは諸君自身の務めである。假りにパレスタイン建設に失敗しても、それは吾等の責任ではないと云つたに對し、ワイツマン博士は即座に、ユダヤ人に失敗なし――と答へたといふ話は有名である。

斯くして大戰が終りを告げた時、英國は三つの矛盾せる政策に惱まされて居た。即ちアラビヤ人國家としてパレスタインに自主權を許與するといふ約束、同じ此地にユダヤ人國家を樹立する約束、而して英帝國主義者は、東方への直通航空路、スエズ運河を通じて東方への海軍並に貿易上の進路及びメソポタミアに於ける英國の管理たる石油井の出路等に關するその戰略上の地位故に、この國の支配を固守する必要を認めて居ること等である。

現にユダヤ及びアラビヤ人の兩方は、英國政府が專ら最後の政策に交渉を有して居るといふことを閲知しつゝある。

實際、大戰後の植民地は、ヨーロッパの聯合軍側の國土併合論者の計畫案はウィルソン大統領の反對に因て讓歩されたものであつた。

その結果、パレスタインは委任統治領となり、その委任統治權は英國に委托された。とは云へ、委任統治により、アラビヤ人が政治的に高度の進歩を有して居たことが確認され、此國は委任統治領中「A」クラスに屬するものとされた。即ち「自主的な是等諸國民は、彼等が自立出來る樣になるその時まで、委任に依る行政上の助言並に援助を受くることを條件として暫定的に承認され得る程「進歩の段階に達した」といふのである。「是等諸國體の願望こそは委任統治上の重要な考慮であらねばならない」(國際聯盟規約第二十二條第四項)

〔註〕而も國際聯盟はユダヤ人の陰謀に成立し、その構成分子たる各國代表者は又ユダヤ人であることに注意。

事實、たとひ住民の願望が委任統治上の選擇を考慮されなかつたとしても、パレスタインの英國政府當局は專ら獨裁的性質のものであつた。即ち國民自治機關の發達せぬことが望まれて居る英國の統治方法なるものは、近頃では逮捕狀なき捕縛、郵便小包・電報・出版

物の檢閱、追放、町村に對する總體的罰金、消燈取締、所有權侵害に對する體刑、道路輸送の警察管理、意見發表機關の認可制度强要等を含んで居る。（參照、一九三六年六月十九日、ハンサード氏 Hansard 談）

（二八）分割か征服か

偶然か將又故意な政策の結果からか、英國政府はパレスタインに於けるユダヤ人とアラビヤ人間の權利主張の衝突を巧みに利用することが出來たのであつた。

パレスタインの地は前記の如き英國政府の約束として、當然各々その約束によつて自らの確實なる支配權を主張してひしめきあつたのであるが、その自治權承認は拒絶せられ、この地方は國際聯盟規約によつて勝手に資格づけられAクラス委任統治權下に置かれたのであつた。

事實、そこにはパレスタインに於ける英國官憲がユダヤ人とアラビヤ人との間の調和や

協同動作を妨害せる瀝然たる證左が存在する。

左にその顯著なる三つの例を引證しやう——

(一)、一九二二年にユダヤ人とアラビヤ人の鐵道從業員のトレード・ユニオン (Trade Union) が結成されたが、政府はその承認を拒絶した。

(二)、一九二七年にアラビヤ人の都邑ナブルス Nablus は地震により被害甚大であつた。ユダヤ人の勞働運動團體は此の荒廢せるアラビヤ町を再建することを企圖申入れたが、政府は之を拒んで許可しなかつた。

(三)、一九二九年にユダヤ人勞働組合は首尾よくアラビヤ人勞働者に接近したので、共同組合を組織して、ユダヤ人とアラビヤ人間の友情と協力の助長を念願した。

此團體はアクウオールス・ポーリム (Achwalth Poalim) と稱せられ (Worker's union の意味)、クラブ、讀書室等を設け、アラビヤ語、ヘブライ語や兩民族の連繫に關する歴史の學習會や演奏會等を始めたが、然し政府は間もなく之に干渉し、「斯る勞働團體は破壞運

動を指導する有害無益な存在なり」との理由のもとに結社の解散を命じた。

(七) ユダヤ人の移住率

歐洲大戰以來、パレスタインに於けるユダヤ人移住は增加の傾向にあつた。

即ち一九二二年中のユダヤ人移住者總數は六千三百四十一人であつたが、一九二五年にはそれが三萬三千人の高率を示すに至つた。

ドイツに於ける國家社會主義政權確立後は再び一段の增加を示し、一九三五年には六萬二千人を算ふるに至つた。

一九二二年、英國政府は「この國の經濟的收容力に順應して、移住者率を調節すべきである」との方針を示した。

これに對し、アラビヤ人は「經濟悲境の際斯る方針は甚だしい越權行爲である」と言明した。

一九二九年の英國下院に於ける質問委員會の報告は此考査に贊成して居る。

一方その報告の論據は、ユダヤ人は灌漑事業の成績に徴するも又不可耕地として烙印された土地を開拓して割合に隆盛な共同社會を現出することが出來る事實からして、かなり嚴しい詰問的のものであつた。

既にしてユダヤ人移住者は數地方に於て「砂漠に花を咲かす」素質に成功したものである。

ユダヤ人の移住が近隣のアラビヤ人の土地と比較してもこの國の經濟的繁榮を阻害減少して居なかつたことは、そこへはアラビヤ人も亦熱心に流れ込んで居る事實によつて證明されて居る。然も違法によつて入り込むアラビヤ人移住民數は同じユダヤ人移住民の數を遙に凌駕して居るが、後者の數は確に非常に大なるものがあるといふことをさへ斷言した。又ユダヤ人は彼等がパレスタインに住むには何所でもアラビヤ人から物を買はねばならないのに、そこではアラビヤ人に賣る何等の權利を持たないといふことを指示し得る。

けれども多くのアラビヤ人の貧窮を救ふには、彼等が現金を得る爲彼等の土地を離れ比較的單調でない都會の生活を探すことが一番容易なことである様に思はれることは事實である。

ところが、平野に於ける肥沃な土地の大部は急速にアラビヤ人からユダヤ人の手に讓渡されつゝあり、かくて住民の全均衡は變化しつつある。

歐洲大戰前パレスタインに於ける住民の五パーセントを占むるに過ぎなかつたユダヤ人は今日三十パーセントとなり、此數字は急速な增加である。この移住狀態はアラビヤ住民の希望に反してその地位を代へつゝあるものである。

さり乍ら、彼等の不平は多分ユダヤ人の移住地では左程でもないであらう。何となれば大戰前の日にはアラビヤ人とユダヤ人は相並んで平和な日を仲良く送つて來た――卽ち彼等は彼等自身の國の政府を忌避して居たこと、又ユダヤ人の移住が、增援隊を派遣し此國を戒嚴令下に固めんとする理由となつてるに對しアラビヤ人の抗議がなされた事實に徵し

ても。

ジョン・ヘキネス・ホルムズ（John Haynes Holmes）はその著「パレスタインの今日と明日、一九二九年」で次の如く書いて居る――

「ユダヤ人に對してのみならず尚又英國人に對するアラビヤ人の憤怒の釋明を助長する所以のものはアラビヤ人のパレスタインに於ける自治權の不承諾に他ならないのである。この憤怒は（私はそそ叙述する他に適當な言葉を知らない）私にとつては全く意外のことであつた。

私は今ユダヤ人に對する强烈なる感情のみを見出さんとする期待を持つて居たアラビヤ人の指導者協議會で、多少の反ユダヤ感情の存在することを知つたが、而もこの感情が反英感情の飛ばつちりに他ならないことを知つて驚いたことを想ひ出す。

反英感情の直接間接の事情は前記の諸事情に於ても略ゝ察せられるところであるが、そこにはまだ苛酷な事實が存在するのである。

此地方は高給を食み贅澤三昧に暮らして居た四百人からの高級英國官吏に蹂躪されて居る形であつた。他は推して知るべしだ。

貧困に喘ぐこの地方民に賦課された税金は年平均四ポンド以上收入の無い者でもその十分ノ一課税を無理强ひされて居た。土地法のやうなものも有つて無きが如く、單に高級事務官一個人の布告によつて左右され、此法令布告を人民に施行する裁判所は相も變らず英國人である裁判長の支配下にあつた。

簡言すれば、國際管理下のパレスタインは英帝國主義の惡辣な常套手段に惱まされつゝあつた。右の事情は爾後益ゝ惡化するばかりで、爲にそこには多數の生命を失ひ莫大な財貨を無くする樣な騷擾（ライオット）（所謂宗教的性質を帶びた）及び大規模のストライキが度ゝ惹起された。

又、一方、そこにはユダヤ人移民の數が加速度的に怖るべき增加率を示し、他方英國陸軍の第一師團は此地方を遠慮なく占領した。

ユダヤ人移住者達はこの英帝國主義の常套手段を左程非難して居ない様であるばかりでなく、どちらかと云へば彼等の大多數の者はかなり同情的態度を示して居るかに見受けられる。この態度がユダヤ人は英國の支持者となつてすべてを默認して居るとアラビヤ人に疑はれ、惡感情を持たれる樣になつて居る。

若しもユダヤ人の移住が今日の率を以て、更に數年間繼續するならば、ユダヤ人の勢力は日に〳〵增大し、パレスタインに於ける自治に關する多年の努力者であつたアラビヤ人の熱望を遮り、自治權讓受人の株を奪つて、この地方の多年培つた支配を持ち去るであらう――との考慮は强ちアラビヤ人の杞憂として葬り去ることは出來ない理由である。

こんな譯で、パレスタインに於けるアラビヤ人自由國を熱望するアラビヤ人はユダヤ人の代表機關（パレスタインに於けるユダヤ人の公式代表）の實行委員會委員長であるベン・ギリオンズ Ben Gurions 氏が一九三七年一月七日、ブリテイッシュ・ローヤル・コムミッション British Royal Commission にした聲明書位では如何にもならなかつた樣に、近

東及び中央アジアの他の諸アラビヤ人國と聯合して、萬難を排して結束して終つた。

ユダヤ人國家（Jewish State）に對して何故國民的本國（National Home）なる名稱を特に用ゐたかとの質問に對し、ギリオンズ氏は――ユダヤ人である彼等が英帝國の範圍內に留まりたい樣に、一つの切り離されたる政治的單位を表はすステート（國家）なる語を用ゐることをユダヤ人は好まないからであると答へたといふ話はかなり人を食つた答辯である」云々と。

（八）アラビヤ人の封建制度

周圍の狀況の一面も見落してはならない。

パレスタインに新しい收容所を求めつゝあるヨーロッパからのユダヤ人の大部分は、民族的乃至は宗敎的亡命者（レフユジー）であると共に又政治的亡命者である。

そして彼等は左傾的な政治乃至は經濟說の感染者であつた。それ故、斯る學說のアラビ

ヤ農民（Fellaheen）間に宣傳普及されることは、大アラビヤの酋長（Shieks）や地主達の社會的乃至は經濟的地位を脅すものである。斯る理由からアラビヤの酋長や地主達は「ユダヤ人脅威 Jewish Menace」を大いに非難し、國家主義的風潮を益々強烈にあふりつゝあるものの如くである。

一方、アラビヤ農民と、ユダヤ人移住者は、その協力によつて得べき全部のものを持つて居る。そこには近頃の總同盟罷業時代の危險をさへ無事に通した確實な友情關係の多くの例が存在して居る。然し乍ら、既に示された樣な斯る友情は、アラビヤ、ユダヤ兩人種の双方に傲然たる優越的態度を以て臨んで居るといふ定評のある英國官吏によつて妨害こそされるが、奬勵されるわけはないのである。それかあらぬか、ユダヤ人部落では此地方語としてのアラビヤ語よりは寧ろ、パレスタインに於ける彼等の國語ヘブライ語（彼等の多くは忘れて居る）に力を入れて居る事實を見ても了解し得ることであるが、兎に角此二つの人民間の交はりに障碍の出來つゝあることは何等疑ふ餘地のないものとなつて居る。

(九) 不滿足な英國委任統治

すべての平和愛好者達は、彼等が自身自由に平和に生活の出來る、又過去に於て彼等があの通り人類の文化的開發に寄與した祖國を見出さんとする迫害されたるユダヤ人の熱望に同情を寄せるであらう。

然し乍ら、永久的な祖國を見出すとならば、小く、山の多い、一部に砂漠地方のあるパレスタインを特に撰ばずとも、斯る制限のない方面にユダヤ移民の收容地が探索されべきであつた。

何となれば、土着民の意志に反して、英國の銃劍の保護のもとにパレスタインに入つて來るユダヤ人は單に彼等自身新しい鬪着を惹起するのみならず、内亂の種子を播きつゝあるからである。

國際的見地から、英國の委任統治に對する異議は二つある。卽ち——

（一）英國政府がアラビヤ人及ユダヤ人となした矛盾した約束は、兩人民にも僞善的のものと考へられて居る程（何れが正か否か）そのパレスタインに於ける政策遂行を逡巡して居ること。

（二）委任統治はその統治領自體の存亡に關する樣な重大なる利害關係のある權限を與へられべきではなかつたこと。

であある。英國政府はパレスタインの自治を拒否する爲に、アラビヤ人とユダヤ人の對立抗爭を助長せしむるやも知れぬ。而して若しも結局止むを得ず自治を認可したとしても、自らの勢力を保持せんが爲に、多數のものに對し小數のものを支持應援し、恰もインドに於てヒンヅー敎徒制壓の爲にモハメット敎徒を利用し、漁夫の利を占めて來たやうな手段を弄するであらう。

宜なる哉、英國政府部内にはユダヤ人同情派なる者が相當數居ることは事實である。然し人によつては、その同情が何故にアラビヤ人を犧牲にしてまで表示せねばならぬか、と

問はれるかも知れない。そこが問題なのである。

だが、英國政府にとつて重要なことは石油及びインドへの公道に關するパレスタインの支配確保の意志である。

それ故に、所謂「宗教的軋轢（レリジャス・ストライフ）」が惹起するとしても、それはインドに於けると同様に單に英國の軍事政策遂行のカラクリの犧牲であることを忘れてはならない。

先年パレスタインに英國陸軍が第一師團を派遣したことがあつたが、それはパレスタインの治安維持の爲には非ずして、地中海に覇を唱へんとして着々實力を行使しつゝあるムッソリーニの强硬政策を牽制せんが爲の示威行動の一つであつたと見る向も決して少くないことに注意せねばなるまい。

（十）解　決　策

三つの相牴觸する利害關係といふのは次の如きものである――

（一）アラビヤ人が歐洲大戰中終始一貫聯合國側に奉仕した報酬として、約束された獨立と自治に對する履行要求、並びにAクラス委任統治領としての等級を認められたパレスタインに於て當然與へらるべき正當なる權利の主張。

（二）ユダヤ人が諸國に於て惱み苦しめられて居る積極的乃至は潜在的迫害より解放されて、自由と幸福の生活を享受し得る場所として、パレスタインを探し求めたといふ要求、特にバルフォーア宣言によりパレスタインに一日も早く斯る機會の到來せんことを期待しつつある態度。

（三）英帝國戰略上の要地としてパレスタインを管理せんとする英政府自體の欲望。

それ故、是等三つの作爲のうち（第三）の意志が働き續ける間は、（第一）及び（第二）の懸案の解決が不可能であることは明白である。

英國の帝國主義はパレスタインに關して、斯くも利他主義的政策を採用する餘裕も無いほど問題になつて居るものである。

若し英國の管理がこの地方の委任統治に對して、條件を求めつゝある住民の利害關係を保證出來ないとしたならば、よし皮相的援助を暫時繼續するとしても、利害關係なき者にその委任統治權を讓渡されるものには非るかの不安を與ふるものである。

そは近來吾人の度々耳にする國際委任統治權の性質と共に、經驗上の事實であると云ひ得るであらう。

斯る皮相的介在はやがて清算さるべきものであり、適確に暫定的のものであらねばならない。

されば、第三者である英國の援助によつて兩民族の和解工作が成就さるべきであるにも拘はらず、この地方に於て、却つて斯る內訌や民族的反目を惹起せしめたことは、英國政府の一九二〇年以來辿り來つた誤れる政策の反映であつて、遺憾なる事實と云はねばならない。

先づ何を措いても、完全自治の約束を一日も早く解決すべきであり、且つ極めて一方的

であつた政府諸機關を一般的に迄進展すべきである。

勿論、パレスタインは、望みとあらば、計劃中のアラビヤ人諸國聯邦に參加し、又國際聯盟に加入し得る自由を保有すべきである。

次に、ユダヤ人とアラビヤ人の各指導者達によつて協議會が準備さるべきである。この協議會に於ては、第三者である英國は兩民族間の相互扶助の基礎を作るのに大いなる援助を與へ得るものである。

最も困難なる論點は多分ユダヤ人移民率に關する問題にあるだらう。

ユダヤ人が日增に殖え且つ一際目立つて來たことに對し、深く根ざしたアラビヤ人の不安といふものは、今日容易に消え得べくもない感情を釀成したのであるから、ユダヤ人は讓步して現在の移民率をグツト低下することに同意するの必要があるであらう。

而してこの兩民族間に眞に寛容と協力の精神が芽生えた時、アラビヤ人はユダヤ人の資本と勞働が如何に彼等の共同利益に寄與し且つ如何に富の增大に寄與するかを知り、その

入國制限はこの地方の經濟的且つ吸收性の受容力によつて決定せらるべきものなるを疑ひもなく認識するであらう。

アラビヤ文化と特に入らんとするユダヤ人の大部分の持つヨーロッパ文化との混入は此地方の社會的及び文化的生活を豐富ならしむるであらう。

歐洲大戰前には、アラビヤ人とユダヤ人とはパレスタインで仲よく働き且つ生活して居た。アラビヤ人の不安と敵愾心が英國との相牴觸する約束によつて激成されたものであり、又斯る反古同樣になつた盟約が破棄され、且つ利己的帝國主義者の介在が除去された時、何故再び斯る平和鄕を現出していけないといふ理由はない筈である。

それにつけても、アラビヤ人の意志に反してまでも、ユダヤ移民を彼等に無理强ひする權利は誰にも無いといふことを特に力說せざるを得ない。

（十一） 世界のユダヤ人問題

然し乍ら、パレスタイン問題の斯る解決策が世界のユダヤ人問題に解決を與ふるものではない。

反セム民族主義的感情（anti-Semitic feeling）の迫害に因て、堪え切れぬ生活の必要條件を發見しつゝあるヨーロッパ諸國や其他に散在するユダヤ人民に、パレスタインを本國として無條件に與ふる樣なことは出來ないことである。が然し此の問題に對して眞實に貢獻するのは特に所謂キリスト教信奉諸國民の義務であると信ずる。

既にソヴィエット露西亞はユダヤ人のため新開定住の地を割り當てて居る（ビロビヂヤン・ユダヤ自由國）。他の諸國も同樣に出來なかつたものであらうか？

英帝國には、又南米や其他の地には移植民により開拓されべき必要に迫られて居る土地があるではないか。

それで、（a）ユダヤ人移植民の土地割當（b）斯る未耕地の開拓の爲公債其他の方法による資本の準備（c）貧窮然らずんば迫害を蒙りつゝあるユダヤ人救濟、等を包含する全

問題を討議する國際會議を開催すべきであらう。

斯く全世界は國際協力の新時代を創造し、且つ正義に基く眞の世界大平和への方法を確立するやう努力すべきであらう。

（十二）平和主義者の課題

パレスタイン並びにユダヤ人問題に關する平和主義者の課題は左の諸點であると思ふ。即ち

（a）パレスタインに關聯するアラビヤ、ユダヤ兩民族の境遇に對する寛大なる理解。

（b）パレスタインに於ける英國政策の改變乃至は掛替的に國際（乃至相似）の權力に委任統治權の讓渡。

（c）ユダヤ人及びアラビヤ人間に於ける直接の和解工作。

（d）反セム民族主義者への戒告

（ヒ）貧窮、懊惱のユダヤ民の直接援助。

右の如く、パレスタインを繞つてイギリス、ユダヤ人對アラビヤ人の相反目は將に發火點にある。而も現在パレスタインは英國の委任統治領とは云ふものの實際はユダヤ人が主權者と云ふも過言でない。と云ふのはパレスタイン總督ハーバート・サムエル卿及びエルサレム市長ロナルド・ストールスは共にユダヤ人であるではないか。アラビヤ人の憤慨故ないとは云へまい。

この問題に關して論ずべきことを多々持つて居るが、此所では單に英國の惡德を示し、英國が世界平和の攪亂者である事實を知つて貰ふことに重きを置いた。

第四章　ユダヤ人短評

今日ユダヤ人を批評したものにも、各種各樣の觀點からなされたものがある。その觀點の相違からして、結論も種々雜多である。

或ものは好意的であり、或は嫌惡非難的である。特に興味を惹くのはユダヤ人自身の評言である。

多少でも知られた人々のユダヤ人短評は、興味ある問題であり、ユダヤ人に對する公平なる認識を與ふるにも、役立つことではあるまいか。

之を記して、聊か讀者の參考に供する。

（一）　非ユダヤ人のユダヤ人評

ナポレオン（Bonaparte Napoléon I, 1769―1821）は實際的にはユダヤ人の保護者であつた。政策的にもせよ、彼がトルコ領エヂプト遠征の折、アジア及びアフリカ在住の全ユダヤ人に宣言を發して、若しフランスが勝利を得たなら、聖地パレスタインを汝等に與へ、自ら第二の十字架となつて、パレスタインを再建する、といふ約束をし、多數ユダヤ人の支持を得（一七九九年）、又一八〇六年には、サン・イドランのユダヤ人代表會議を召集して、ユダヤ人のため、從來に見ない便宜を圖つて居るが、然も次のやうな批評をユダヤ人に下して居る――

ユダヤ人の支配する官署、彼等が金庫乃至は家政の鍵を握つて居る家庭、或る一課をユダヤ人に委囑した行政廳、或は學生、或は學者の融資者として、彼等を收容する大學校などは、是非とも乾燥を要する泥沼である。地上の神の選民たるユダヤ人は天刑病よりも怖

ろしく、他民族の體中に密着する寄生蟲そのものである――云々と。

ゲオテ（Wolfgang Geothe）は前にも述べたやうに、インテリ・ユダヤ人との交渉があつたが、然も公平なる見地より、次のやうに批評して居る――

ユダヤ主義は、全人類に對する敵愾心を基礎として、建てられたものであるから、怖るべき存在である。

ビスマルク（Fürst otto von Bismark, 1815―98）は、彼のため徹頭徹尾よき辯護者であつた、世界的新聞記者ユダヤ人、マックスミリアン・ハルデンのやうな知己があつたにも拘はらず、次のやうに批評して居る――

宗教上の信仰を無視し、國家の基礎を發掘し、不法手段によつて、所有權を脅威し、破産を以て貿易を否定し、農業の健全を侵害しては、輿論を惑亂し、然も己れの幾多の教義的習慣によつて、國民の動亂を助長して來た彼等は、一般生活のすべての點で、赦し難い亂民となつた。

又ビスマルクが一八七〇年より同七一年の戰爭に於けるユダヤ人の態度を慨嘆した言葉に、――ユダヤ人は軍事探偵以外に、何の必要あつて存在するか不可解である、云々といふのもある。

ドイツの名將**モルトケ**（Graf H. Karl Bernhard von Moltke, 1800―91）伯曰く――

ユダヤ人は離散したにも拘はらず、尙且つ相互密接な關係を持續し、眼に見えない不思議な指導によつて、常に彼等共通の目的に導かれつゝある。彼等を同化しやうと努力しても、彼等は頑强に之を拒絕する。世界到る所の國家內に更に國家を形成して居る。殊にポーランドで彼等は今日に至るまで、根治することの出來ない害毒となつて居る、云々と。

ドイツの經濟學者で社會學者である、**ウエルナー・ゾムバルト**（Werner Sombart, 1863―）のユダヤ人を批評するところは――

ユダヤ人の商才なるものは、ユダヤ敎精神の所產である、と。

ピヨートル大帝（Piotr I, 16812―1725）はユダヤ人の憎惡者であつたが、その批評も

亦峻烈である――

わがロシアでは、ユダヤ人よりも寧ろ異教徒或はマホメット教を認める。ユダヤ人は詐欺漢で詭計家である。それ故、彼等が如何に努力し、如何に我等の隣人に賄賂したとしても、我國内には彼等のため家を建て、商業を營ましむる氣持にはなり得ない。

ユーゴー（Victor Marie Hugo, 1802―85, フランス文豪）は――現代に於ても、自己の名稱を誇りとして居るユダヤ人は地獄の直接の産物である。その年代記は戰慄すべき行爲に滿されて居る。ユダヤ獨立國であつた間は野蠻行爲に專心し、その征服さるゝや、フアリセイ式の神政に狂氣して居る――と酷評した。

ドイツの宗教改革を以て知られた神學博士**マルテイン・ルーター**（Martin Luther, 1483―1546）は次のやうな評をして居る――

彼等の文書を以てユダヤ人を判斷するに、彼等は非ユダヤ人を侮蔑して、ゴーイ（Goi, 豚）なるヘブライ語で呼び、之を憎んで居る。然も彼等は、學校、教會、家庭などで、彼

等非ユダヤ人に凡ゆる不幸の降らんことを、神に祈願した。又、彼等は我等の所有する物を掠奪し、我等の支拂ふ利子によつて我等を破産に導き、更に我等を慘酷な刑罰に處すことを念とした。かゝる行爲は古代の偶像崇拜者と雖も試みなかつたことで、現今彼等以外に斯る惡德行爲をするものが無い。之れは惡魔がユダヤ人を作つたからの故である。元來ユダヤ人は愚昧慘酷の民で、昔から嫌惡すべき迷信に耽り、財物を惜しみ富を得た。然も彼等の罪惡を寛容して來た非ユダヤ人を憎み、すべての民族中最も破廉恥な民族である。之を獰猛なアメリカのヒユートン人種や野蠻未開のイロコン人種に比較して見ても、寧ろこれ等の人種は人道の敎師、深遠な哲學者であらう。ユダヤ人は、不幸に遭遇すると意氣消沈し、幸福を獲れば勇氣百倍す。

ゴーメル（Gomer）曰く――

ユダヤ人は陰險なる僞瞞者、不良な會計官で、これがため多くの人は苦しんだ。

コストマーロフ（Nikolai Ivanovitch Kostomarov, 1817—85, ロシアの歷史家）曰

く――

ユダヤ人はフランスを喰ひ盡す毛蟲や蛆蟲である、と。

トルストイ (Lev Nikolaievitch, Tolstoi 1828―1910) のやうな宗教的神秘論を提げて、社會改造に乘り出して居た敬虔な藝術家でさへも、「ユダヤ人は棍棒で諸君の脊中を打つだらう、それでも諸君は彼等に叩頭百拜せずばなるまい」と云つて居る。

又、その作品中にユダヤ人を度々取扱つて居る**ドストイエフスキー** (Feodor Michailovitch Dostoievskii, 1821―81) も「ユダヤ人及びその長老會はロシアに對する陰謀團である」と云つて、彼等の陰險な策動を怖れた。

カント (Immanuel Kant 1724―1804) はモーゼス・メンデルスゾーンのやうな大學者やその他のユダヤ人インテリと知己の間柄ではあつたが、その批評は厳しい――

ユダヤ人は、彼等に好意を寄せ居る國家の市民になることを名譽としないで、却つてその國民を欺くことを念とする商人だけで、ユダヤ全民族を組織して居るものとすれば、實

に奇怪千萬なことである。

又、「世界各國民の中に一つの民族が雜居して居る。彼等は己れの固守する法律によつて、他民族を敵視し、國王の命令に順はず、我等の國法を無視し、我等の處置に反抗し、我等が不幸に陷るやうに最大の陰謀をめぐらして居る」云々、と云つて居る。

アポローニ（Apolloni）曰く――

國家國民の利益はユダヤ人に關する範圍に於てだけ存在して居る。ユダヤ人がその相手が高潔で惡事へ誘惑出來さうもないやうな人と交際するときは、出來るだけ眞面目に交際する。そして善事を奬める事もある。併し、その時でも、その善事から何か落ちこぼれを得やうと狙つて居る。反對に、惡漢との交際には、その人間の惡的行爲を益々助長奬勵するやうにする。南部及び北部諸縣に住むユダヤ人は地方民に飮酒酩酊の弊風を鼓吹し、ウオッカを與へ、酒飮の財産が居酒居に注ぎ込まれるやうに仕向けることを知り拔いて居る。又地方民を煽動して、竊盜を働かせてその贓品を買ひ取り、淫蕩の手傳へをして、婦女子

を誘惑して、墮落させ、人の弱點につけ込んでは、うまい汁を吸ひ盡し、遂に破滅に導いて少しも頓着しない。

ウエスパシヤン（Vespashan）の批評は左の如きものである――

黄金革命こそはこの忌憚せねばならない民族の大切な目錄である、云々。

又、近世ドイツ哲學の寵見と云はれて居る**ヨハン・ゴツトリーブ・フイヒテ**（Johann Gottlieb Fichte, 1762―1814）の批評に見えたユダヤ人は次のやうである――

ユダヤ人は神の選民であるから、非ユダヤ民族に比べて、心身共に一頭地を拔いて優秀である、と考へて居る結果、他民族はやがて地上から一掃されるものであると考へて御座る、云々と。

ビユーロー男爵と結婚して居た娘コジーマとユダヤ人樂聖リヒアード・ワグナーとの再婚を許した、ドイツの大音樂家**フランツ・リスト**（Franz von Liszt, 1811―86）も、ユダヤ民族の批評には私情を許さなかつた――

ユダヤ人にとつて、好ましくない人を罰したり殺したりすることは、即ち彼等の所謂「獨立自由」なるものである、云々と。

フランスの歴史家**フオンタン**（Marius Fontain）がその著「世界史」で次のやうにユダヤ人を解剖して居る――

ユダヤ人が長となれば必らず苛酷である。執政者となれば暴君であり、僧侶となれば慘虐者となる。ユダヤ人の説教は常に呪咀の聲が充ちて居て、軍人としては極めて卑怯であるが、然も兇悪慘忍非道である。彼等にも哲學はあるが淺薄で、商業を營んでも詐欺をする。ユダヤ人の家庭は貪慾者の集團であり、彼等の愛は又情慾に過ぎない。表面では博愛を唱へ、その裏面は專制的で、思想の自由を制裁し、個人の獨立自由を認めない。

ロシア愛國の志士**ボレツキー**（Boretzkii）の著「呪はれし國民」には次のやうな深刻な批評がある。――

ユダヤ人はその數の少いためか、その性格極めて卑怯である。彼等は公然と戰爭が出來

ないので、常に内訌や内亂の勃發を誘導し、ゴーイ（他民族を指すヘブライ語で、豚を意味する）の自滅方法を講じて居る。キリスト敎的文明の破壞工作も亦彼等の策するところである。

ユダヤ主義宣傳者の標語は、例外なしに、自由、平等、友愛、協同、專制絶滅、共和促進、世界平和確立、良心自由、死刑全廢、差別待遇徹廢等であるが、これは己れの目指す敵を攪亂し、己れを有利に導く美辭美句に過ぎない。彼等はかやうな運動を、土着民には、秘密陰謀によるものであることを氣付かないやうにさせ、却つて文化運動であると信じさせ、人形ゴーイを裏面で意のまゝに操縦して居る。

殊に出版物のやうなものは、その代表的のもので、彼等は先づ眞つ先に政治家を買收した。彼等の經濟網の成功に至つては、眞に驚くに堪えないものがあり、非ユダヤ人が氣の付いたときは、既に遲く、彼等の掌中に完全に收められて居た。

ユダヤ人は小學校兒童から、大政治家に至るまで誘惑することに努力し、非は擧げて主

權者に轉嫁させることを敎へ、すべて民衆に分つ寸法を取らせて居る。
ユダヤ國と同時代に在つた國々は皆滅びて終つたのに、彼等のみ獨り、復活の生氣溢れ、その四分の三はポーランドを含むロシアに居る。而もロシアの政治犯人乃至は精神錯亂したインテリゲンチアに、ロシア及びロシア國民に宣戰させたのは勿論彼等であつた。
ドーリンゲ（Dorlinge）の批評は――
彼等の出現するところ、その場所の何れであるを問はず、ユダヤ人問題を惹起しつゝあるのである、云々と。
ドリウモン（Dreumond）曰く――ユダヤ人は飽くまでタルムードを信仰して居る。でその信仰上、非ユダヤ人に對し、敵愾心を抱く義務があるとし、道義缺乏と惡德横行とによつて、各種の善を滅ぼす義務あるものと確信して居る。だがこれ等の義務は彼等獨特の心理狀態に過ぎない。又何人が共產黨の音頭取りであつたか、如何してユダヤ人の財產だけが、何所でも掠奪されずに濟んだか。その一例に、パリーのロスチャイルド家所有家屋

百五十軒が一つとして、共產黨の襲撃を受けたものが無かつたではないか。それも只ユダヤ人であつたばかりのためであつた。

グレゴアール（Henri Gregoire, 1750—1831, プロアの司敎にして、フランスの革命家）はダ・ラツール（Latour）とは共に天主敎の僧正であつたが、キリスト敎徒のユダヤ人に對する處置が餘りに非人道的であるのを大いに憤慨して、却つて次のやうな擁護批判をして居る。

ユダヤ人も亦キリスト敎徒同樣に人類であるからには、フランスの市民としての立派な資格を持ち合はせて居る。然も過失のあるやうにしたのは、誰の罪でもなく、實にキリスト敎徒の播いた不正義の結果に外ならない、云々と。

法學博士岡松参太郎曰く——

ドイツが歐洲大戰で敗けた近因は、戰爭永續に伴つた國民怨嗟の聲を抑へるため、各種の分子を政府内に入れたためである。その結果、商賣人が政治上に立ち入るやうになり、

途にそれ等のユダヤ人が要路の大官と結托して、軍需品を賣りつけるため、商賣に利用されたので、參謀本部の命令が少しも行はれなくなつたに原因する。(中略)國民は今一度ドイツの復興を志して居る。

カイザルの帝室財産は競賣の結果、ユダヤ人の手に入つたが、政府が戰爭中、食糧品の供給を外國に仰ぐ資金に充てるため、强制的に鐵鎖を與へて取上げた時計の金鎖や、賠償を拂つて蒐めた婦人の金の首飾等は後に調査して見ると、皆ユダヤ人が政府を通じて買ひ占めたものであつた。一面からいふと歐洲大戰はユダヤ人に金儲けをさせたに過ぎない。何れ西洋は、その昔政治と美術とを禁止したモーゼスの子孫たるユダヤ人に支配され、東洋は同じ性格を備へた支那人が巾を利かして居ると思はれる。

(二) ユダヤ人自身の評言

最も興味ある問題はユダヤ人のユダヤ人評である。或は讃美し或は呪咀してるのを掲げ

て見やう。

ドイツの大音樂家として世界的に知名な**リヒャルド・ワグナー**（Wilhelm Richard Wagner, 1813—83）は同族を非難攻撃して曰く——

ユダヤ人は生活に對し、利己的意志を代表し、利益の打算に强い狡猾な動物の典型で、人生の惡德に勝ち誇つた惡魔の化身である、云々——と酷評して居る。

西部ロンドンのユダヤ**敎會堂牧師モーリス・ジヨセフ**（Maurice Joseph）曰く——

イスラエル人は確に一大國民である（中略）何人もユダヤ人を一國民と看做し、之を宗敎上の區別であると誤認するものはない。それ故、ユダヤ人の國民性を否定する事は、實にユダヤ人の存在を否定するものである。

レオン・シモン（Leon Simon, ユダヤ學者、著作家にして、宗敎と國民性の研究者）曰く——ユダヤ人の宗敎は卽ちその國民性であり、又その國民性は彼等の宗敎の主要部分である（中略）ユダヤ敎の中に敎義を包含しないといふことを屢々耳にするが、これは當ら

ない。即ち、ユダヤ人に取つて、救世主時代は只單に地上に平和を齎して、人心を善良ならしめることを意味するばかりでなく、世界中にユダヤ人とその神とを一樣に認めさせることを意味するものであつた。換言すれば、これはユダヤ民族の永遠性を物語るものである。然もその敎義は何人も受納出來るやうな單純な敎會的のものではなく、實に一國民の過去及び將來に對する一つの信念に外ならない。如何となれば、ユダヤ敎はキリスト敎のやうに、個人の心靈を救ふ使命を持つて居ない。その全觀念は實にユダヤ國民の生存と結合したものである。

アーサー・ルーイス（Arthur David Lewis, 西部ロンドンのユダヤ民族主義協會リーダー）曰く――假令、ユダヤ人であつてキリスト敎の洗禮を受け、全くキリスト敎徒化したからといふて、その血統、その氣質及び精神的特性は決して變じては居ない――と。

グレッツ（Heinrich Graetz, 1817――91, ドイツの歷史家、ブレスラウ大學敎授）曰く――ユダヤ人の歷史は、彼等がその國家を失つた後と雖も、從來の國民的性質を保有し

て居て、決して單なる信條乃至は教會の歴史のやうなものではない。我等の歴史は單に文學的事件の年代記のやうなものとは、凡そその趣旨を異にするものである——と。

ユダヤ民族主義の世界的指導者と云はれる米國高等法院判事ルイス・ブリンデース（L. David Blindies）曰く——

ユダヤ僧侶會議で、ユダヤ正教に歸依する者に限り、ユダヤ人であるといふことを認むべきだといふ提案が時々出されるが、ユダヤ人なる字義に對する定義を定めることは、一部ユダヤ人のみの間で出來るものではない。併しユダヤ人問題と云ふやうな場合のユダヤ人といふ意味は、苟くもユダヤ人の血を受けた者は全部之を含むべきであつて、宗教を變更したからといふて、之を免れることは出來ない。假令どんな學理と信條とを以てしても、ユダヤ人の本能と行爲とを有する者に對しては、他の者と區別するために、ユダヤといふ語を使用することを拒み得ない筈である——と。

又、歴史上有名な人物で、古代よりのユダヤ人計畫の具體化に貢献したモーゼス・ヘツ

ス（Moses Hess）曰く――

ユダヤの宗敎は何ものよりも先づユダヤの愛國主義である。事實ユダヤ敎は一つの國民性と同樣に、自然的基礎を持ち、他の宗敎のやうに、單にその信仰を變ずることによつて、この基礎を捨てることが出來ない。ユダヤ人はユダヤ民族に屬して居るから、從つて又ユダヤ敎に屬して居る。然もこの事は、彼自身又は父祖の改宗は少しも關係のないことである。ユダヤ人はその欲すると欲せざるとの別なく、悉く同民族としての固い結合を持つて居る。

ドイツの法學者として知られたヨーゼフ・コーラー（Joseph Kohler, 1849―1919）曰く――ユダヤ種族は、大天才に於ては多産的ではないが、大才能の點では、多産的な人類が産出した最も天賦ある一種族である――と。

ユダヤ人にして歷史家たる、イエルサレムの名門フラヴィウス・ヨセフス（Flavius Josephus, 37―95）は曾てイエルサレムを女郎屋街と稱し、又殺人强盜の巢窟であると稱

し、「若しローマ人にして、この市街を放置すれば、イエルサレムはソドムのやうに、地震で滅びたであらう。蓋しイエルサレムはその罪悪ソドム以上のものがあるからである」と記してある。

(三) タルムード拔萃

次に序ながら、ユダヤ精神の眞髄と稱されて居るユダヤ法典タルムードの拔萃を紹介する。

(一) 神より生まれ出た者は獨りユダヤ人のみである。ユダヤ人以外の民族は悪魔の子である。

(二) 人間が動物より高等であるやうに、ユダヤ人は人間より高等である。若しこの世にユダヤ人が居なかつたならば、どんな幸福も、輝く太陽の光線も、風雨もなく、人類は到底生存することが出來ないものである。

（三） 永久に生存する價値の有るものは、獨りユダヤ人だけで、他の民族は驢馬にも劣るものである。

（四） ユダヤ人は人間と名付ける權利を持つて居るが、不淨の神から生まれた非ユダヤ人はゴーイ（豚）と命名せねばならない。

（五） エホバは非ユダヤ人を憎み給ふほど、驢馬や犬のやうなものを憎み給はない。

（六） 非ユダヤ人が善事を行ひ、慈善を施したならば、之を罪と認め彼等を呪ふであらう。彼等は誇るために斯様な行ひをするからである。

（七） 我等はどんな援助も非ユダヤ人に乞ふてはならない。我等の利益のためには、彼等に害を與へてもよい。非ユダヤ人は地上に在る幸福を占める權利がない。何故とならば、彼等は只動物だからである。動物を放逐し或は殺すことが出來るやうに、我等は非ユダヤ人を逐ひ殺し、又彼等の財物を利用することが出來る。即ち非ユダヤ人の所有する物は我等の紛失したもので、實の所有者はユダヤ人であるから、ユダヤ人は先づ第一に之を所有

しなくてはならない。

（八）若し非ユダヤ人がユダヤ人から、少しの物でも盗んだときは、之を死刑にするのが當然のことである。併しユダヤ人は欲する儘に非ユダヤ人の所有物を奪ふことも自由である。汝の隣人に惡を施す勿れ、とあるが、非ユダヤ人に惡を施すな、と明記して居らぬからである。若し非ユダヤ人で穴に墜つる者があつたとしても、之を引き上げるには及ばない。その穴に梯子があるならば、之を取除け、又若し傍らに石でもあつたなら、拾つて之を穴に投げ入れろ。

（九）非ユダヤ人の財產を管理することはユダヤ人の權利である。同樣にユダヤ人は非ユダヤ人を殺生する權利を持つて居る。殺す勿れ、といふのは、實はヘブライの子であるユダヤ人を指すもので、非ユダヤ人のことではない。之を行ふには、責任上の危險の尠いときが一番よい。非ユダヤ人を殺害するには、彼等のうち最も高等な者を選ばなくてはならない。

（十）　非ユダヤ人の生命は我等の掌中にある。特に彼等の黄金はみな我等の所有物である。

（十一）　非ユダヤ人を殺すにあたり、キリスト教徒中の地位の高い者を選べ。

（十二）　非ユダヤ人の血を流す者は、エホバの神に生贄を捧げる者である。

（十三）　故意にユダヤ人を殺害した非ユダヤ人は、丁度全世界を滅ぼしたやうな罪がある。

（前篇終）

昭和十二年十二月十日印刷
昭和十二年十二月十五日發行



ユダヤ民族を檢討する
定價 一圓三十錢

著者 柴田武福
發行者 東京市小石川區竹早町三七 尼子靜
印刷者 東京市牛込區早稻田鶴卷町一〇七 吉原良三

東京市小石川區竹早町三五
發行所 モナス
振替東京六三八五四
電話小石川五四四六

東京（株式會社 康文社印刷所）早稻田